

悠遊

第二十九号



企業OBペンクラブ



病床の母へ
スマホの花便り

中村 晃也



行く道の
先の模様も
禅問答

下山 健夫

悠遊

第二十九号

企業OBペンクラブ

表紙の絵「メタセコイアのボート小屋」

安藤 晃二

心に取りついて離れない景色がある。

隣町立川の昭和記念公園へは良く出かける。総面積50万坪。元立川飛行場・米軍基地を経た跡地が、1978年、国営公園に変貌を遂げた。四季折々の植栽など心を捉えて離さない。中心に広がる湖水、その渚にメタセコイアに囲まれたボート小屋がある。長梅雨の晴天、陽射しに惹かれて懸案の風景を描いた。



目 次

▽巻頭言……………	塚田	實 4
II エッセイ II		
▽それなりの人生を生きて……………	木村	敏美 6
▽I日クッキングヒーターの開発物語……………	荒野	喆也 8
▽脱亜、従米、そして……………	児玉	寛嗣 10
▽極楽浄土〜『阿弥陀経』の世界……………	斉藤	征雄 12
▽湖東三山〜信長の焼き討ち……………	清水	勝 14
▽誰か故郷を想わざる……………	志村	良知 16
▽新しい音楽の楽しみ方に出会う……………	下山	健夫 18
▽人間が地球を壊している……………	杉浦	右藏 20
▽懐かしの信州……………	田原	敬 22
▽インドの思い出……………	塚田	實 24
▽苦楽共生……………	富岡喜久雄	26
▽俳句に嵌る……………	中村	晃也 28
▽初めての海外渡航……………	長尾進一郎	30
▽地球温暖化タイズ……………	吉田	真人 32
▽ボケ防止の大ボラ噺ひきこもり編 まず模写から始めよ……………	山縣	正靖 34
▽金沢感傷旅行……………	矢澤	正二 36
▽菩提樹……………	八木	信男 38
▽十二月に思うこと……………	森田	晃司 40
▽それは四月のことだった……………	三	春 42
▽コロナ禍のボランティア活動……………	松谷	隆 44
▽かみのやま温泉の旅……………	松田	昌康 46
▽あの時私は生きたウイルスを見た……………	細谷	博 48
▽机の上の愛読書……………	藤原	道夫 50
▽二枚の絵……………	原田	信 52
▽景德鎮の女体……………	浜田	道雄 54
▽和倉温泉……………	浜口須美子	56
▽東京オリンピック雑感……………	長谷川	修 58
▽「資本主義」って何だ……………	野瀬	隆平 60
▽『評伝 福田赳夫』を読む……………	野上	浩三 62
▽京都の山散歩……………	新田由紀子	64
▽無言館と父……………	西川	知世 66
▽悠悠閑閑……………	西川	武彦 68
▽わが会社人生……………	新井	良侖 70
▽八十二歳の回想、そして今を思う……………	安藤	晃二 72
▽ホモ・サピエンスとして……………	池田	隆 74
▽スコットランドのお産事情……………	池松	孝子 76
▽八十路を前に……………	市川	忠夫 78

▽世界あれこれ……………	稲宮 健一	80
▽八十になつたら……………	上田 信隆	82
▽乗り鉄一人旅の至福……………	内田 満夫	84
▽「神」縄文祈りから 廃仏毀釈 薩摩藩を経て……………	大越 浩平	86
▽想い出の祖父母……………	大津 隆文	88
▽企業OBペンクラブ一五年……………	大月 和彦	90
▽伊藤博文の無念……………	大平 忠	92
▽私の旅……………	大野 昱	94
▽パンデミック、世の変わり目……………	大森 海太	96
▽不要不急の外出……………	川口ひろ子	98
▽後期高齢者の運転免許事情……………	川村 邦生	100
▽土に還る……………	宮原由利子	102
▽ボニファティウス8世の棺の前で……………	松浦 俊博	104
▽猿田彦の鼻……………	首藤 静夫	106
▽リンダちゃん……………	高橋由紀子	108
▽夢を追った男 鵜飼直哉君追悼……………	大平 忠	109

II 創作短編 II

▽鬼の舌震い……………	大塚 喜子	112
▽悲しみの果てに……………	内藤真理子	117
▽人生の岐路……………	福本多佳子	120

II 活動報告 II

▽何でも書こう会……………	126
▽掌編小説勉強会……………	127
▽サロン21……………	128
▽ペン俳句のこの一年 佳句鑑賞……………	129
▽ペン川柳……………	135
▽ペン・フォト句会……………	140
▽英語を読もう会……………	141
▽何でも読もう会……………	142
▽ホームページ関連……………	143
▽クラブ活動を振り返って……………	144
▽会員名簿……………	146
▽編集後記……………	148

表紙の絵	安藤 晃二
アート	木村 敏美 首藤 静夫 塚田 實
	福本多佳子 八木 信男 (五十音順)

巻頭言

書くことは楽しい

会長 塚田 實

会社勤めを終えた後、絵を学び始めました。小中学生の頃絵は全く下手と家族から言われていたので、一から勉強を始めました。その絵仲間から、「文章を書くことに興味はありますか」と聞かれ、「小説は書きたいと思っている」と応えたら、彼女は企業OBペンクラブに誘ってくれ、何回かのトライアル参加を経て会に加入しました。

ビジネス文書はたくさん書いてきたけれども、他人に読んでもらえるような文章を書くことなど、考えが及びませんでした。

掌編小説の勉強会に参加すると、先輩からは優しく、また厳しく文章の基本を教えていただき、この世界への目が開きました。「何でも書くこう会」ではメンバーの深い洞察と幅広い識見に感心しました。

そのうちにひよんなことから川柳会に参加し、今では

世話人を仰せつかっています。

何よりも楽しいのは、一仕事終えた後の有志でのアフターファイブです。会員は様々な業種の企業や官庁の出身者からなり、最近では女性も増えて多様性を一層増し、話題も自然と豊富になっています。

約二年に及ぶ新型コロナウイルス感染症の蔓延は、会の活動に大幅な制約を課すことになりました。しかしメンバーの創意工夫により、Zoomを利用した勉強会やメールベースでのやりとりで、活動を継続することができました。今後コロナがどのように展開するか分かりませんが、いろんなツールを巧く利用しながら、会を継続発展させてゆきたいと思っています。

この『悠遊』二十九号を手にとっていただき、少しでも内容に興味を持っていただけたら、ホームページを覗いて、気軽にお声がけください。文章を書く楽しさを共に究めましょう。

エッセイ



水彩 八木 信男

それなりの人生を生きて

木村 敏美

「美しい人はより美しく、そうでない人はそれなりに」樹木希林さん演じる富士フィルムのCMは、今でも印象深く残っている。この言葉は人生にも当てはまる気がする。それなりの人生とは、社会的な成果に関係なく、一生懸命に生き、人を愛する事ができていれば、どんな人も価値があると言う事ではないだろうか。

後期高齢まで生かされ、振り返ってみると、ある時期、好きな事に熱中した事があった。

高校二年の時、美術部に入って始めた石膏デッサンだ。一作一作出来上がっていく時の達成感があり、誰よりも早く学校に行き授業の始まる前に練習した。放課後にも練習した。三年になると、東京の美大に行こうと友人から誘われたが、終戦の年に生まれて引き揚げ、十一歳の時に父親が他界したので経済的に無理だった。また自分の力にも自信がなかったので夢を追わなかった。しかし

描く事は楽しく、家に帰ってから暇さえあれば絵を描いていた。スケッチブックには、母の顔、赤ん坊の甥っ子、テレビ、アイロン等々、昭和三十七、八年時代の身近な生活風景が沢山描かれている。セピア色に変色した画用紙から、当時の生活が生き生きと伝わってくる。

高校時代にもう一つ熱中したのが読書だ。本好きは小学四年生の時に転校して、世界の名作童話を読むようになってからだ。中学三年の時パールバックの「大地」の感想文が、福岡市のコンクールで入賞している。

高校生になると一人でひたすら読んだ。外国文学が主で、ドストエフスキー、ロマン・ロラン、アンドレ・ジツド等、色々代表作は読んだものの、記憶にあるのはモーパーッサンの「女の一生」くらいだ。

高校を卒業して就職すると多少収入が得られ、友人と映画や小旅行等にも行けるようになった。それらが楽しくて読書も絵画も全くしなくなった。

四年間の社会生活の後、結婚して子育てに追われる生活になったが、三十八歳の時主人の海外転勤でマレーシアと一緒に引っ越した。国の民族衣装にバティックという蠟

結染めがあり、その美しさに惹かれ、友人と国境を越えシンガポールまで習いに行った。習った期間は二年間くらいだったが、帰国後も何点か描いている。パティックは布に描く染物で、絵とは違った面白さがあり、第二の熱中時代を迎えた。

何故あんなに熱中出来たのか。若さもあつたが、絵の題材である質素な日常生活や南国マレーシアを愛していたのと、成果を求めない事で熱中できた。

早く働いて、人並みの生活が出来る様になる事が夢だった高校時代。就職した後は、現実の生活を一生懸命に生きてきた。

六十歳になって、再び身近な孫達や山の畑の景色を描き始めた時、高校時代の絵画の基本が役にたった。高校生当時は成果も出せず、就職活動に役立つ事も無かつたが、唯好きで熱中した事は、決して無駄ではなく貴重な時間ではなかつたかと思う。

また六十代後半、あるきっかけで企業OBペンクラブに入会する事ができた。文章は特に書く事も勉強した事もなかつたが、クラブの方々の作品を読ませて頂き、N

氏の「文章の作法」を参考にさせてもらい乍ら段々楽しさが増してきている。その上、絵まで掲載して戴くようになり、そこからパティックの絵を太平洋展へ出展するきっかけに繋がった。

現実の生活とは別に、誰にでも好きな事や自分しかできない事がある。すぐに成果が出なくても何時か役にたつ事もあり、認められなくても目に見えない力がついて、その人の魅力になる。できる時にできるだけでいい。何かを愛し一生懸命やれば、成果に関係なく力になっていく。それがそれなりの人生の価値なのではないかと思う。

僅か四年間程熱中した事が、五十年弱のブランクを経た今、生活を潤してくれている。

高校時代に描いた母の絵の口元が「よかつたね」と言っている様だ。

これが私の「それなり」の人生である。



I日クッキングヒータの開発物語

荒野 詰也

一九七〇年三月、筆者は、アメリカのフロリダ州マイアミのオーランド空港に降り立った。約一か月の米国研修を終えて、一週間の自由行動を許され、三つの目的をもって開放感を味わいながらアメリカのリゾート地へやってきた。一つは、当時は世界に一つしかなかったデズニーワールド、二つ目はケネディ宇宙センター、三つ目はコーラルスプリングスの「未来の家」モデルハウスであった。これらは、いずれも印象的ではあったが、最後に訪れたモデルハウスで見ることが出来た電磁調理器の試作モデルが終生忘れられない。モデルハウスは、たまたま当日は休日で、誰もいなかったが、一軒の家だけは入れたので見学した。そこで見たものは、台所にあつた木製のテーブル上の金属の鍋であり、その中では湯が沸いていた。何の気なしに鍋をずらしてみると、鍋は加熱されていたが鍋が置いてあつたところは、温かいが高

温ではない。ここで、加熱源を探したが、電源コードがない。電気もガスもないのになぜ加熱されているのかわからず、休日で聞く人もいないし、説明書もないまま、帰途につかざるを得なかった。

帰国後、研究所や出身校の関係部門にも聞いてみたが、相手にしてくれなかった。そのころ研究所の仲間が、当時の大型コンピュータで誘導電動機の模擬計算をしていた。彼が面白半分に、電動機の回転運動を最大に、損失としての熱ロスをも最低にするという本来の目的を逆にし、回転出力を最低にして、熱ロス部分を最大になるようにシミュレーションしてみたら、極めて高効率の熱量が得られることがわかつたという。この結果についていろいろ討議した結果、これがアメリカで見た、鍋の加熱現象ではないかとの結論に達し、この逆転の発想をベースに加熱調理器の開発に邁進した。下部に電動機の固定子を置き、上部に回転子を置くと、固定子から誘導された磁束が空間を通して回転子に伝わり、回転子に相当する鍋に電力が誘導されるので接続線が無くとも電力は伝送さ

れる。こうして、回転力を最小にした、すなわち回転しない電磁調理器が誕生した。

この原理をベースに、アメリカでの不思議発見以来二年半後の一九七二年十月に技術発表を、一九七四年二月に製品発表を行った。しかし、発売しても電磁調理器は一台で七万九千八百円と高価であり普及はしづらかった。

また、普及しにくい最大の理由は、加熱原理からいって使用する鍋の素材が鉄やステンレスのような磁性体でなければならぬ事であった。当時家庭で使用されていた鍋は、フライパン以外は殆どがアルミ製であった。しかし、二〇〇七年前後アメリカで、アルミが人体内に入るとアルツハイマー病になるという風評が流れたことと、生活が高度化して珪瑯鉄鍋やステンレス鍋が一般化したため電磁調理器も少しずつ売れていった。そして、従来のガスコンロによる火傷や火災を防ぐ対策として、



誘導加熱方式を応用
電磁調理器を開発

従来のガスコンロは、火傷や火災の原因となることが多く、また、燃焼による有害な物質を発生させる。一方、電磁調理器は、加熱部分にのみ電磁波を発生させるため、火傷や火災の心配がなく、有害な物質も発生しない。また、電磁調理器は、従来のガスコンロよりも省エネで、加熱時間も短縮できる。さらに、電磁調理器は、従来のガスコンロよりも清潔で、お手入れが簡単である。このように、電磁調理器は、従来のガスコンロに比べて、安全で省エネで、お手入れが簡単であるという大きなメリットがある。そのため、電磁調理器は、今後ますます普及していくと予想される。

特に老人用マシジョン・全電化マシジョン等で先行普及している。しかも、鍋の制約のない炊飯器には、よりおいしい炊飯ができるということで、IH炊飯器が数量的には先行して購入された。

このIHクッキングヒータは、文科省の発明協会創立一〇周年を記念して戦後我が国産業経済の発展に寄与したイノベーション一〇〇に選定されている。ウォークマン・新幹線・インスタントラーメン・ハイブリッド車等と並びイノベーションの仲間入りをした。

この調理器の特性であるコードレス給電は、ワイヤレスパワートランスミッション(WPT)技術として最近いろいろな方面で開発されている。その一つは、リニア新幹線である。リニア新幹線は時速五〇〇キロ以上で走り、走行中は磁気浮上により車体が浮いているため、走行するための電力が有線では供給できないので、WPTが不可欠となってくる。また、将来の電気自動車の充電も走行しながら充電車線で充電できるようになり、継続的に走り続けるという夢にもつながる。

脱亜、従米、そして

児玉 寛嗣

明治維新から太平洋戦争の敗戦までは七十七年間だった。そして、敗戦から今年までが同じ七十七年間だ。つまり、明治維新から今年までの中間点が太平洋戦争の敗戦の年に当たる。中間点を境に日本は大きく変わった。

黒船の来航により、日本は蜂の巣をつついた様な騒ぎになった。隣の中国ではヨーロッパ諸国から戦争を仕掛けられ敗北の末、屈辱的な扱いを受けていた。それを日本の知識階級はよく知っていた。「このままでは大変なことになる」との強い危機意識が若い下級武士を中心にあった。

大政奉還を経て政権は幕府から朝廷に移った。

発足時は脆弱だった明治政府も西郷隆盛、大久保利通らの指導力で国は安定し近代化に突き進んでいった。

日本古来の天皇を中心とする国家体制で、文明は欧米

から貪欲に取り入れるという折衷方式がとられた。

明治十八年に新聞「時事新報」に無署名の社説「脱亜論」が掲載された。筆者は遅れている中国、朝鮮には欧米諸国が行っているのと同じ態度で接するべきであり、アジアから脱却して欧米に目を向けると主張していた。

この社説の筆者は福沢諭吉であった。

その後富国強兵政策のもと軍備増強が進んだ。やがて、日清戦争に突入、拍子抜けするような戦いであつさり中国を破り、得た巨額の賠償金で官営製鉄所を作ったりして、さらに富国強兵を進め、今度は日露戦争に突入、辛勝ながらも勝利した。この時点が戦前の絶頂期だった。その後、明治維新を経験し、明治政府を主導した政治家たち、軍を統率した軍人たちが次々と死に絶えていった。昭和になると明治維新時の傑出した政治家、軍人がいなくなり、凡庸な指導者のもと、太平洋戦争に突き進んでいった。それは歴史の必然だったのかもしれない。

明治時代の先人が築いてきた国家も敗戦で破壊されてしまった。そこに登場したのは戦勝国のアメリカだ。占

領時代にはアメリカの言いなりになるしかなかった。

占領後も経済の立て直しが最優先で、安全保障、外交は二の次だった。冷戦構造のなかで日本が主体的に動くことは不可能であり「従米」（アメリカに従うこと）が唯一の道だというのは現実的な選択でもあった。「従米」を貫くことで経済は復興し、驚異的な経済成長で世界第二位の経済大国となった。そんななか、産業の米と言われた半導体で日本がアメリカを追い抜く事態にアメリカ国民は沸き立った。日本がダンピングをしていると難癖をつけたアメリカに日本の世界におけるシェアを二十％以下にするという協定を結ばされた。一九八六年のことだった。十年後には協定は解消されたが、その間に日本の半導体産業は挽回不能になるまで弱体化が進んでいた。この協定の締結の後ぐらいから、日本の成長率は三パーセント以下と低迷するようになり、二十一世紀になってからは「失われた二十年」が日本経済の形容詞のようになってきている。

原因としては人材の流動化が進まないなど社会の抱える構造的問題もあるが、半導体などの最先端技術企業が

振るわないことも大きな要因であろう。

翻って考えるに、日本とアメリカとの半導体協定交渉の背景に、日本の安全保障へアメリカの貢献が圧力としてあったと考えるのが妥当であろう。「従米」と引き換えに経済においてフリーハンドがなくなるという大きな代償を払わなければならなかったのだ。

これからも、「従米」をそのままの形で続けるのか、それとも別の道を選ぶのが問われる。問題は中国の台頭にどう対応するかだ。米中対立はかつての米ソ対立の冷戦構造とは構図が違う。中国の経済のグローバル体制にすっかり組み込まれており、中国抜きには経済は回らない。中国を蚊帳の外において一方的にアメリカにつくことは難しい。さらに、トランプ大統領が「アメリカ・ファースト」を打ち出したように、どの国も自国優先だ。今まで、日本の「従米」にアメリカが付き合ってきたのも彼らにとってもメリットがあったからだ。しかし、いつまでもそれが変わらないと考えるのは危険だ。今後、日本は難しいかじ取りを迫られそうだ。

極楽浄土（『阿弥陀経』の世界）

斉藤 征雄

ある時、お釈迦様は祇園精舎で多くの弟子たちに向かつて次のようなお話をされた。

ここから西の方、十万億の仏国土を過ぎたところに、極楽という世界がある。そこには阿弥陀という仏がいて、法を説いている。極楽は清浄なる世界で、そこに住むものは、身体や心の苦しみもなく、ただ諸々の楽しみがあるばかりだ。

われわれが住むこの娑婆世界は、お釈迦様がおられる仏国土であるがそれを小世界という。宇宙は、小世界を千個集めた小千世界、小千世界を千個集めた中千世界、中千世界を千個集めた大千世界から成り立っており、それを三千大千世界（略して三千世界）という。三千世界には千の三乗個つまり十億の小世界（仏国土）があることになる。そして仏国土ごとに一仏がおられるのである。

さて、宇宙の西の果てにある極楽とはどんな世界だろうか。

極楽は、七重の石垣と並木にとり囲まれていて、真中に蓮の池がある。すべてが金、銀、瑠璃、水晶などで宝飾されているし、地面や池の底には金の砂が敷き詰められている。池には浄らかで甘美な水が湛えられていて、色とりどりの蓮の花は香しい香りを発している。

極楽では、常に音楽が奏されている。そして人々は一日に何回も美しい曼荼羅華の花を降らせて天にささげるのである。

空には、鸚鵡、孔雀をはじめ多くの鳥が舞っている。中でも声の美しい迦陵頻伽かろうびんがという鳥は極楽にしかない珍しい鳥。これらの鳥の囀りは妙なる風の音と相まって人びとに念仏の心を起こさせるのである。

このように極楽は、見事な穢れなき浄土世界なのである。

この極楽世界を作られたのは阿弥陀如来である。阿弥陀とは、無量（計り知れない無限の量）という意味で、

阿弥陀如来は無量光、無量寿つまり、無限の光明（智慧や慈悲の象徴）を持って極楽はもちろん十方を照らし、極楽に住む人びとの寿命を無限にするのである。

悟りを開く前の阿弥陀如来は法蔵菩薩といったが、永い修業の末に仏になられた。そして仏になられてからでもすでに十劫じゅうという時間が過ぎたという。

劫とは、無限に永い期間をいう。一劫とは、四十里四方の箱に芥子の実をつめて、三年に一粒取り出してすべてがなくなる期間、あるいは四十里四方の大石を天女が三年に一度舞い降りて衣でぬぐい、大石が磨滅してなくなる期間など、気の遠くなるような長い時間を指す。

この無限の時間の中で、極楽には、すでに修業を終えた無限の人びとが住んでいて清浄な世界を作っているのである。そしてひとたび極楽に生まれれば、墮落して元へ戻ることはない（不退転）という。

この極楽浄土に生まれたいと願う人々は誰でも、阿弥陀如来の名号を念ずれば、その人の臨終のとき阿弥陀如来が迎えに来られて、極楽に生まれることができるのである。

お釈迦様は話を続けられた。

今や三千世界の仏国土の諸仏は、ことごとく阿弥陀如来の法門を称え、それを信じるべしと説いている。

世の中の人たちは、私がさとりを得たことを甚難稀有のこととして、大いなる功德とほめたたえてくれる。

がしかし、今やこの娑婆世界は五濁ごじよくの悪世、穢土えいど（汚れた世界）であり、末世まっせともいふべき時代である。こうした現実の世界の中では、一切の世間の人びとを正しいさとりに導くことは私にとつても甚だ難しい。このような末世の世においては、人びとは阿弥陀如来の法門を信じ、極楽浄土に生まれ変わるがよい。

以上のお話をされたお釈迦様の姿は、やや寂し気に見えたのは気のせいであろうか。

『阿弥陀経』の世界は、お釈迦様が没して五百年以上後に作られたものである。

【五濁】一、天災・戦争などの社会悪がはびこる 二、邪よこしまな見解や教えが横行する 三、精神的悪徳（煩惱欲）がはびこる 四、人間の身体・心が弱くなる 五、人間の寿命が短くなる

湖東三山（信長の焼き討ち）

清水 勝

紅葉の名所として知られる湖東三山は鈴鹿山脈の西側山腹にあり、北から龍應山『西明寺』、松峯山『金剛輪寺』、釈迦山『百濟寺』を称している。

いずれの寺も山門から本堂まで登りの参道を十五分ほど歩くが、その道沿いの紅葉が見事で、足の重さも気にならなくなる。そんな参道を歩きながら、ふと考えた。

創建順では『百濟寺』推古十四年（606）、『金剛輪寺』天平十三年（741）、『西明寺』承知元年（834）となっている。

国宝・重要文化財の数でみると、『金剛輪寺』十五、『西明寺』十一、『百濟寺』五となる。

歴史の古い『百濟寺』の国宝・重要文化財が少ないのはどうしてなんだろうか。

元龜二年（1571）九月十二日に織田信長は比叡山焼き討ちを実行した。併せて近江国にある天台宗寺院をも

焼き払うことを命じた。それにより湖東三山も焼き討ちされたのだが、その時の寺の状況、対応の違いで、火災を免れた文化財の数に違いが出た。

比叡山焼き討ちについては多くの書物に記載があるが、湖東三山の焼き討ちについては余り触れられていないので、湖東三山を訪ねた機会に調べてみた。

『西明寺』には比叡山焼き討ち直後に、信長配下の丹羽長秀・川尻秀隆らが軍勢を率いて西明寺に迫った。当時の『西明寺』は天台宗の修行道場として栄えており、諸堂十七、僧坊三百、修行僧何百人もいる大寺院であり、比叡山と同じ運命になるのは明らかであった。

僧たちは戦うのをやめ、ご本尊を守る方法を探った。

その結果、自ら僧坊等に火をかけ、とりわけ御本尊を守るべく本堂前を激しく燃やした。あたかも全山焼失したかのように見せかけたのだ。攻め手の丹羽長秀・川尻秀隆らは寺を焼き討ちすることに多少の迷いもあり、寺側が坊舎を燃やし恭順の意を表したと考え、軍を返した。

こうして焼き討ちを免れ、鎌倉時代に建立した本堂は

国宝第一号指定となり、三重塔も国宝、秘仏本尊薬師如立像は重要文化財の指定を受けている。他にも多くの文化財が『西明寺』に残った。

『百濟寺』はというと、聖徳太子の願いにより、百濟人のために創建された古刹であり、格式も高く、寺領も広い。それだけに信長は他の寺院とは違う扱いをし、信長の祈願寺とした。敵対する近江の守護職六角義賢と『百濟寺』の関係が深いことを承知の上のことであった。

観音寺城から逃亡した六角義賢は湖東の鯉江城で籠城しており、信長は配下の佐久間盛信らに包囲させていた。その戦況を見ようと信長は祈願寺である『百濟寺』に入り、宿坊にいた。その時、『百濟寺』が鎌倉時代以来繋がり深い六角氏に食料を支援していた事実を見つけ、「全山ごとごとく焼山にしてしまえ、石垣は壊して安土に持ち帰るのだ」と厳命した。

これにより元亀四年(1573)四月十二日に火が放たれ「湖東の比叡」と呼ばれるほどの壮大な伽藍、千を超える宿坊、五重塔等すべてが灰燼に帰し、寺宝の殆んどが失われた。ただ、寺側が信長の動きを察知し、事前に

ご本尊等数体の仏像と重要な経巻物を遠く離れた奥の院西ヶ峯に遷座させていた。僅かながら文化財は残った。

湖東三山の真ん中の寺で、千鉢地藏が並ぶ『金剛輪寺』は、信長が『百濟寺』を焼き払った後に『金剛輪寺』も同罪だとして火を放たれた。幸いにも二天門・本堂・三重塔は焼き討ちから免れ、そこに収められていた多くの国宝・重要文化財級のものが残った。

その理由には、本堂・三重塔は寺の中心からはるか奥にあるため、見落とされたのではないかという説と、『西明寺』の事例から、僧侶の機知により本堂の前で大火を装ったという説がある。

何はともあれ、燃えるような紅葉に暫し見とれよう。



誰か故郷を想わざる

志村 良知

二十年ぶりに小学校の同級会に参加した。女衆メナシもいるせいで十一時開始の昼会。新横浜八時発の特急「はまかいじ」に乗り、故郷の駅に十時過ぎに着く。会場まで三十分と踏んで歩く。駅からしばらくは馴染みの商店街だ。看板はあるが、シャッターは苔むしていて十年は動いてないな、というようなのが幾つもある。

会場は同級生の家がやっている和食処。当人はかなり前に亡くなり、息子が板さん、同級生の奥さんが大女将で仕切っている。

入り口の大きな立て看を見上げつつ入ると既に賑わっていた。受付が待ちかねたと「おおー、良ちゃんじゃん」名簿に当たるに「名字はなんだっけんね」。忘れたというより、良ちゃんとしてしか認識されていなかったのだらう。同姓が多い田舎のこと、名字で呼ばれたのはごく

一部で、ほとんどは名前だけか呼び名で、××ちゃん、○○やん、だった。

同級仲間の看板屋の手になる立派な横断幕が張られている。入口の立て看とともに彼の寄付だという。幹事によると卒業時九四名、物故者九名、会は五年ぶりで出席者三十名。県外在住出席者は私を入れて三名。

中学三年生の時合併統合されるまでの中学時代二年間も同じ顔ぶれだけだったので、小学校が八年、中学が一年という感じで話が弾む。気持は昭和三十年代、日本で一番可愛いげのない方言、という甲州弁の直線的な響きが心地よい。顔を見て「いつさら変わらんじゃん」から「おまんは誰だっけねえ」まで、昔の面影の差が激しい。特に女衆はわからない。「私、○○子、判るらあ」と言われても……。

宴たけなわになると席が目まぐるしく変わる。話す奴ごとに「良ちゃんは、勉強には関係ねえこんも、何でも知ってえておせえてくれた」と誉められる。「だっちゃねえこんばっかね」。高学年時には、兄の科学雑誌はも

ちろん、家にある本を乱読していた私は『主婦の友』なんぞは別冊付録まで熟読していたので、「何でも知ってた」のであろう。

あちらでは出口近くの座にいた国立大学名誉教授を、村の情報総元締めで同級会永年幹事長の床屋の大将が、「Mやん、ビールと酒を十本ばかり、ほう言ってきたりよう」と昔のようにパシリに使っている。こちらでは数人で丸くなり、「動くもんはなんでも運転でえてしようだった」「へえ、こけえはこんだね」と永年幹事団の一員で、つい先日逝ってしまった、消防車と重機と田植え機運転の名人だったTちゃんを偲んで涙している。

宴跳ねて、じじ、ばばを迎えにきた車でごった返す中を、今夜泊まる生家に帰ろうと歩きかけると、後ろから床屋が大声で「良ちゃん、うちいいくずらあ、ちよつくり待ちようし、お女将さんが送ってくれとう」
混雑の解消を待つて仕出し用の軽ワゴン車を出してくれる。歩くと山道で三十分もあるので有難い。お女将さんは某演歌歌手に顔と、声まで似た美人である。

生家に着くと、長兄夫婦が出て来て酔っ払いになり代わり礼を言ってくれる。仏壇の親父、お袋とも二年ぶりだ。「危ねえから、ほんくれえにしとけ」と言われる位、お線香をしこたま上げる。

朦朧としつつ、駅からのシャッター通りにあった店の名前や様子など昔話。夕方醒めてきた所でビール、酔うほどに話は脈絡なく飛び回り、昭和ギター演歌メドレーから手当たり次第の高歌放吟へ。

突然足元を見られポツリと「えらい爪が伸びてるね」と言われたのがきっかけで二度目の宴も果て、隠居所のお袋さんが使っていたベッドで、昼間会ったあの顔この顔を思い浮かべながら寝る。期待したが、お袋さんは化けても夢にも出てきてくれなかった。

あれから七年、あの友この友とあの夢この夢を語りたい。



新しい音楽の楽しみ方に出会う

下山 健夫

残念ながら令和三年度もコロナ禍で入国後の隔離等の関係か、海外の演奏家達、ご最員の海外在住日本人演奏家、庄司紗矢香の来日演奏会も開催されなかった。スケジュールを見ると欧州、米国での演奏会は多く開催されたようなので、私の若い頃ならいざ知らず、海外との行き来が多い現代では、こんな年は初めてだった。

唯一私の行った生の演奏会は、六月にサントリーホテルの小ホールで開催された、モーツァルトのフルート四重奏全曲演奏会だ。フルートはベテランの工藤重典、彼が紹介した合奏者は彼の子供世代の若手で、ヴァイオリンの辻彩奈、ヴィオラの田原綾子、チェロの横坂源。数年前から全国で演奏している手慣れたフルートのベテランと合奏する嬉しさ、また観客の前で演奏する嬉しさにあふれた素晴らしい演奏だった。特に演奏中も彼らの笑

顔が絶えなかったことが新鮮だった。集中するため演奏中の笑顔などは無いのが普通であり、めったに経験しないことだった。

生演奏以外はTV番組（深夜放映録画）で鑑賞するところが多かったが、演奏家自身がYouTubeで配信する演奏を知って鑑賞の方法が増えた。音楽を鑑賞する方法はこれまでは、オペラのほかに年に数回演奏会に行くことと、LPから始まり、CDやデジタル音源と変化はしたが、室内で自由な環境や体勢で音楽を聴くことだけであった。古いと言われるかもしれないが、オペラで流行りの時代を現代に置き換えた新演出は、私にはどうも馴染めない。一応いくつかはオーソドックスな物も観ているし、DVDで鑑賞しているので、眼をつぶれば録音とは異なる音響は良いのだが、この頃はかえって寝てしまう危険がある。比較的オーソドックスな演出が多かったザルツブルグやメトロポリタン共に現代風のものが多くなってきたいて、日本の歌舞伎の様に伝統的なものを受け継がないのかとも思ってしまう。

この巣ごもりのなかTVで観た独日混血のピアニスト、アリス・紗良・オット。彼女の名前は聞き覚えがあり、演奏会が開かれていたことを知ってはいたが、実際に演奏会に行ったことは無かった。彼女と女性指揮者オクサ・リーニフのモーツァルト「ピアノ協奏曲13番」。軽やかで音楽も良かったが、彼女がオーケストラの演奏中にメロディに合わせて頭を振り楽しんでいることが、観て聴いている私をも楽しくさせてくれた。彼女のインタビュー (YouTube) で、他の演奏者や観客のことも考えて演奏しているとのこともわかった。

彼女のもう一つの特徴として、ピアノペダルの微妙な感触の為に裸足で演奏している。このことは良く知られているらしく、海外のオーケストラとの共演でも、彼女の入場時にこれを映しているものがいくつかあった。彼女は多発性硬化症になっているとの発表もあるので、次の来日時のコンサートは是非聴きに行きたいと思っているが、何時になるのだろうか。



人間が地球を壊している

杉浦 右藏

ウィキペディアの地球史年表を眺めると結構面白い。地球誕生、生命の誕生、古世代、中世代、新世代に区分された新世代部分が興味深い。地球での人類の出現、進化が全ての自然を破壊している感じがする。

I P C C第五次評価報告書によれば主要なリスクとして、沿岸部や島嶼部の海面上昇高潮、都市部の洪水豪雨、電気や医療なディンフラ機能停止、熱中症などの健康被害、食料不足などのリスク被害を警告している。

アメリカのシンクタンク（新米国研究機構）デイビッド・ウォレス・ウエルズ、「地球に住めなくなる日」（藤井留美訳）では地球の危機を警告している。キーワードをあげると、気候崩壊の連鎖、見えない脅威、大気汚染による生命の危機などで、細かい事例をあげて述べてい

る。幾つかのキーワードを拾ってみる。気候崩壊の連鎖、頻発する殺人熱波、飢饉が世界を襲う、水没する世界、山火事、自然災害が日常に、水不足、死にゆく海、グローバル化する感染症、経済崩壊、気候戦争の勃発、大規模な気候難民、資本主義の危機、政治の弱体化、終末思想の抵抗、劇的な変化の時代が始まる等である。

今、世界の各機関で国や専門家を集めて議論し、その実行を勧告、これを遵守する、しない、の議論をしている。世界の国々や機関が議論している間にも地球悪化が進行している。

いま話題のEV電気自動車を例にとってみよう。ガソリンから電気駆動に切り替えることは非常に結構な話である。ところが、電気を利用する技術と、その装置を作る原料を総合して考えると、どちらが得か判らない。双方を比べると判る。電気を利用するにはリチウムイオン電池が貢献している。電池の原料であるリチウムを何処から、どの様に調達しているか考えなければならぬ。リチウムの産出国は、チリ、ボリビアが現在の主流だ。

世界的埋蔵量は、チリ、中国、オーストラリア、アルゼンチンが大半を占める。取得方法としては鉱石粘土やかん水からリチウム塩を取り出し、それを高純度に精製する。例えば、かん水から天日蒸発によりリチウム濃度を約一%まで濃縮する。さらに天日蒸発を重ね不純物を除去して六%程度まで濃縮し、その後精製を行う。ここで問題にしたいのは、使えるリチウムを作るのに自然を破壊していることを考慮して評価しなければおかしいということだ。現状では問題が起きなくとも、EV電気自動車の普及が増大すると問題は大きくなる。かん水、鉱石の採取から精製過程で出る二酸化炭素は多量で、これにより環境汚染が進み、地球破壊を進めることになる。

ここで述べたいのは、新製品を出現させても、総合的に二酸化炭素の排出する量のバランスが問題だ。

世界の二酸化炭素排出量（二〇一八年統計）を国別に現すと、中国二八・二%、アメリカ十四・五%、インド六・六%、ロシア四・七%、日本三・七%の順位となり五カ国で世界排出量の五七・四%を占める。日本が幾ら努力し

ても寄与度は小さい。日本の排出量を個別に表すと、エネルギー転換部門四〇・一%、産業部門二五%、運輸部門十七・八%である。これら三部門で八十二・九%を占める。早急な改善工夫が必要と判る。

私の初渡航国であるイランを回想する。古く栄えた旧都イスハハーンの長い石橋と水量についての記事が新聞に載った。私が行った一九七〇年には並々と水を湛えた大河であった。三〇年後に訪れた時には小さい池のようになつていた。今年の写真では、大河の底が干上がり、ひび割れの状態だ。わずか五〇年でかくも惨憺たる状態である。イランの地図を初めて見た時に驚いた。ミミズのような川が無数ある。日本の山河と異なる。ヒマラヤからトルコに続く山脈のうちアルポズ山脈と名付けた四千メートル級の山脈の雪解け地下水が地上に表れて流れて、また潜る川であった。それをうまく地中で繋いだのがカナートと呼ぶ砂漠の水路だ。水利権を握った者が覇者になる。

懐かしの信州

田原 敬

今住んでいる埼玉県新座市の野火止から信州に日帰りドライブを楽しんだ。二〇一九年十月のことだ。快晴の下、息子の運転で私の家内と嫁と親子四人の旅行だ。上田、別所温泉方面を目指して車を走らせた。信州育ちの私には道中いたる所に思い出がある。碓氷軽井沢トンネルから長野県に入る。右手に浅間山がはっきり見える。車が小諸を過ぎ、海野宿に近づくあたりに、S 医院という看板。上田高校の時に一緒だった同姓の S 君を想い出した。彼のご先祖の地は此処であろうか。

「別所温泉まで七キロ」の表示のあたりで昼食にした。この辺りはやはり同級だった U 君の住んでいた地だ。彼は卒業時の総代であったが、親に死なれて進学を断念し都庁に就職、その後大学夜間部に進学した。あるとき私が、東大教授だった江上波夫先生と一緒にモンゴルへ旅行した話をすると、「いいなあ、俺も行くよ」。その後、彼は

首都ウランバートルで一年間も日本語の先生をしてきたとのこと。

生島足島神社にお参りの後、上田市内に向かって車は走る。近くを蜻蛉が飛んでいた。日帰りなのでゆっくりもできず、中塩田から昔住んでいた川辺村（現在は上田市）に向かう。近くに親戚があるが立ち寄れずに通過。長池の下を通過する。何と懐かしいことか！

母はこの地で生まれ、上田女学校へは歩いて通ったそうだ。大東亜戦争で私たちの東京の家が焼け、一家は母の生地である此の地へ疎開した。父も一緒だった。父は日本画家だったが、絵を描く時代でなく、日本橋の近くの証券会社に職を得ていた。

その父が会社から呼び戻され、出張で大阪方面に向かう途中、浜名湖辺で米軍艦載機の銃撃を受け即死した。仮埋めの地から兄が掘り出し、茶毘に付し、お骨にして信州に居た母の元に届けた。母には兄から事前に電報を打っておいだのに届いていなかった。いきなりのことで母は其処にしゃがみ込んでしまった。

父と住み家を失った一家は、結局母の生家のある上田で暮らすことになった。父を亡くし、私にとっては進学どころではなかった。

それでも母は私を旧制上田中学（現上田高校）に行かせてくれた。収入もない時にと不思議な思いだ。どうやら母は農家で働かせて貰い、それで何とか一家を支えてきたようだ。

家計が苦しく、私にとっては大学どころではなかった。東京に出てきたが、当時、下町一帯は焼け野原であった。隅田川から上野の山が望めた。良い職場もなく、三年間は中小企業で、次に旧新橋演舞場近くの米国陸軍病院で働いた。しかし将来を考え、中央大学の夜間部で法律を学んだ。

いずれ出版に関連する仕事に就きたいと思っていたが、従業員千五百人ほどの製本会社に就職、六十二歳まで、定年より二年も余計に働き退職した。

ある日、新聞で江上波夫先生の講演会の記事を目にし、行ってみると、「モンゴルへ江上波夫と一緒に行きませ

るか？」のチラシ。八日間の考古学の旅である。考古学に興味のある私はすぐに申し込んだ。

現地ではラクダにも乗り、初体験の連続であった。江上先生の計らいで、ソドノム首相にも駐モンゴル日本大使にもお会いした。

後日談になるが、同じ埼玉の坂戸に住んでおられるKさんというご婦人がやはり「古代東洋史の会」の会員で、モンゴルにもご一緒した。そのKさんがご友人のMさんに旅行に行った話をしたところ、「私も行きたかった」と言われたそうだ。何でも五百万円もの大金をモンゴルに寄付したいというのだ。

翌年、江上先生とMさんは現地に赴かれ、多額の寄付を実現し、大いに感謝され看板まで建っているそうだ。

私も齢九十に達したが幸い健康に恵まれ、好きな考古学のことや、ほろ苦くも懐かしい信州の思い出を語れることを嬉しく思う。

インドの思い出

塚田 實

一月に誕生日を迎え後期高齢者となった。大学時代の先輩と話していると、高齢者の心得なども話題になり、先輩はマハトマ・ガンジーの言葉を教えてくれた。

Live as if you were to die tomorrow.

Learn as if you were to live forever.

(明日死ぬかのように生きなさい。永遠に生きるかのように学びなさい)

「いつ死んでもいいように、覚悟を決めて毎日を懸命に生きよ。いつまでも学びを止めるな」という意味だろう。なかなか意味深い言葉と心に刻んだ。

インドを初めて訪れたのは、一九七〇年代終わりの頃だと思う。ニューデリーで独立の父ガンジーを記念する博物館に行ったことをよく覚えている。

その後ボンベイ（現在のムンバイ）に移った。空港からホテルまで道の両側は何重も貧民街が延々と続いた。暗い中で車のライトに浮かぶ子供達の目は忘れられない。五つ星のハイアット・リージェンシー・ボンベイに着くと、そこは別世界だった。

翌日窓を開けて外を見ると、隣は貧民街に続く野原で、多くの人が水を入れた小さな器を携えながら、草陰にしゃがんで用を足している。この貧富の差に愕然とした。

一九九〇年代にも会社幹部のお供をしてボンベイを訪れた。一九九五年には、ボンベイはムンバイと改名されていた。このときはムンバイ港に面したタタ・グループの保有するタージ・マハル・ホテルに泊まった。目の前にはイギリス領インド帝国の象徴だったインド門が聳えていた。空港から続く貧民街は変わらなかつた。タタ・グループの本社でインド最大の財閥を率いるラタン・タタ氏と面談した。巨大な貧富の差だ。

一九九三年遠藤周作の『深い河』が出版され、夢中で読んだ。ガンジス川で沐浴するインド人が強く印象に残

った。その後北インドのリシケシュから更にガンジス川に沿って上流にある某財閥の別荘に二泊したことがある。川はヒマラヤ山脈の雪解け水が流れる清流で、ヒンズー教の聖地ベナレスの濁った川とはまるで別世界だった。

一九九七年にマザーテレサが亡くなった後、タタとの建設機械合弁会社訪問の機会に、カルカッタ（現在のコルカタ）の教会と児童養護施設を訪問した。施設を見回ると、子供達がアジアからの変わった訪問者に手を伸ばす。あどけない無邪気な子供達の笑顔が頭に焼き付けられた。

インドは精神世界では独特の発展を遂げた。仏教が誕生し、ヒンズー教が起こり、インド哲学を発展させた。仏教は主に中国を経由して日本にも大きな影響を与えた。玄奘三蔵や達磨大師の貢献も大きい。日本は宗教・哲学面で、インドから多くを学んでいる。

今やインド人はアメリカでも大活躍している。マイクロソフトやグーグルのCEOもインド人が務めている。

二〇一一年十月、会社の社内広報誌に掲載する対論の

ためハーバード・ビジネス・スクールのニティン・ノーリア学長と面談した。彼は前年四十七歳で学長に就任、二〇二〇年まで十年間学長を務めた。父はインド財閥の創業者で、合弁会社の設立など仕事を通じて良く知っていたので、彼の学長就任と共にお祝いのメールを送ると、直ちに礼状が届き、翌年対論に辿り着いた。

貧富の格差増大は日本を含め、今や世界中の問題になっている。貧しかったインドは人口の爆発的増加により人口ボーナス現象をもたらし、経済規模を拡大させている。一方未だカースト制度や女性蔑視の悪弊が続き、社会問題の解決が期待される。世界での存在感が増したインドが、彼らの持つ叡智で経済の更なる発展と諸問題の解決を成し遂げてほしい。貧富の差が少しでも縮まって、子供達の明るい笑顔を見たいものだ。

さて、後期高齢者の年末年始は、健康保険の切り替えや免許証の更新などで忙しかった。今年もガンジーに習って、OBペンクラブでの学びを続けよう。

苦楽共生

富岡 喜久雄

コロナ禍も発生以来様々な影響を人間世界に与えている。その発生源は何処、何故との問いには色々な説があるようだが、その影響は世界に広がりつつある。

身近な市民生活への不便から、コンテナ不足での油の高騰、半導体不足等、政治経済面でも深刻だ。

医薬界の努力もあり、これをワクチン接種で防御せんとすれば敵も然る者、自らを変異させて対抗してくる。

さすれば、戦訓にも曰く、「敵わぬ敵とは和解し、共存・共栄を図るべし」と。共生策を考えねばなるまいと思えてくる。さらに云えば、「禍福はあざなえる縄の如し」と言うではないか。オリンピック開催もなんとかやり抜けたし、この辺で共存策とその功罪を冷静に考えて見るのも一考ではないかと思えてきた。

まずは感染予防の為に、我がOBベンクラブでも多用しているZoom会議利用等のIT利用の非接触作業か

ら生じた在宅勤務の普及。またそれによる勤務形態の変化、さらに不動産市場動向の変化等々。

曰く、都心型高層マンションから郊外型住居への移住等々、数え上げれば我々の生活様式、態様も様変わりの方である。今や、己はOBベンクラブや図書館通いの書齋派生活だが、現役時代の通勤地獄・早朝出勤と残業の多さや飲み会等の非効率な苦役？を思い出す。

昨今の在宅勤務の様子を想うと、昔の非効率さが苦々しくもあり、また懐かしくもなってくる。

勿論、その功罪を一樣には語れないが、現政権の御題目「IT技術の普及」を待つまでもなく「やればできるじゃないの」の典型のような不合理な働き方だったとは思えてくる。蔓延防止策としての出入国制限は、それによる海外旅行の不便、観光収入減を来たし、国内旅行促進策としてGOTOキャンペーンを打ち出してもいる。

だが、喧伝せずとも庶民の知恵は深いようだ。

身近な神社参拝等、近場の観光資源を発掘し、其処に住む喜びや楽しみを再発見しているのだ。

我が多摩丘陵の陋屋近くにも、普段は見向きもされない神社や仏閣が多くある。何も京や伊勢に行かずとも白山神社に御嶽神社、さらに高尾まで足を延ばせば高尾権現がある。散歩がてらに探索すれば、コロナ以前は周りの住民からは見向きもされず、ただ小山の森の中で静かに鎮座していただけた小さな神社群は、近在の住民や子供たちが集まるようになって賑わい、埃を被っていた賽銭箱も小銭ならぬ紙片も入って、賽銭泥棒まで出現する始末である。地元資源再発見、活性化だと言えるじゃないか。

だがその一方、近在の福祉施設の老人たちが、介護職員の指導の下、流行り歌を歌わせられている情景も見る機会も多くなった。その度に、いやな寂寥感を感じてしまうのだ。そして、その後、嘗て見た温かみのある幼時の情景と唄が思い出されてくるのだ。

「母さんお肩を叩きましょう、タントン・タントン・タントントン」

「お縁側には陽が一杯、タントン・タントントン」
こんな情景は近來見ることもないし、聞きもしない。

高層マンションか郊外の洒落た住宅からは、とても想像がつかない情景で、今の孫達は手持ちの電子機器で、マンガかゲームに夢中だ。老人達は「介護保険施設」で寂しく老人仲間と歌を唄わされ、つまらなそうに唱和しているばかり。しかし、在宅勤務が常となれば、親父も自然あふれる田舎の広い居間で、纏い付く子供に煩わされることなく仕事をし、妻は庭の野菜を料理に使い、犬は庭駆け回る昭和の初期の情景が帰ってくるかもしれない。其処には外国からの農業研修生も居ない。

各国が、それぞれの国柄にあった生活様式で暮らし、強欲資本主義に煽られず、ゆったりとその国柄にあった生活をすれば良いのだ。グローバリゼーションからローカリゼーションへの回帰だ。そう考えると、コロナ禍も満更でもないじゃないかと思えてくる。だが、

「何、バカ言ってるんじゃないよ。結婚も子を持つ夢も持てない世にしたのは誰よ」

そんな反論を聞く前に、「千の風になつて」山紫水明のこの鳥を守ることも考えよう。

昨今、「南シナ海波高し」だから。

俳句に嵌る

中村 晃也

どこまでが秋空どこからが宇宙

星野 高志 佳作

(平成二十四年)

春潮や先祖は隠れキリシタン

茨木 和生 秀逸

抜け道の春泥に足とられおり

小笠原和夫 佳作

たこやきの匂ひ広がる花の土手

山尾 玉藻 佳作

花氷メルトダウンは二十五時

鳴戸 奈菜 秀逸

(平成二十五年)

突っ伏して泣こうか笑おか大花野

鳴戸 奈菜 佳作

片減りの靴で踏みゆく枯野かな

山西 雅子 秀逸

多重債務三代続く桜守

今井 聖 佳作

春の汐掴んでみたき渦ひとつ

山西 雅子 佳作

田の闇を震わす祭り太鼓かな

伊藤伊那男 佳作

(平成二十六年)

地下鉄の出口や春の空四角

伊藤 敬子 佳作

草萌えや日はたつぷりと岬道

伊藤 敬子 佳作

潮騒は風の伝言啄木忌

伊藤 敬子 秀逸

尼寺や色濃きままの落ち椿

山西 雅子 佳作

椎落葉殞かたの列の木遣り唄

嶋田 麻紀 佳作

郭公のひと日こだまを連れ歩く

名村早智子 佳作

平成二十一年の初頭、企業OBペンクラブに入会、西

川知世先生に就いて俳句の勉強を始め、同時に角川の出

版する「俳句」誌に投稿した。入選句の選者名と評価結

果(推薦・秀逸・佳作)は次の通りで、まだまだ研鑽が

足りないことを痛感している。

(平成二十一年・平成二十二年)

子どもの水面をつかみぶら下がる

行方 克己 秀逸

魂が抜けてふらりと枯れ野行く

西山 睦 佳作

三代目布目確かな冷や奴

伊藤 敬子 佳作

讚美歌が止んで秋刀魚の焼く匂ひ

藤木 俱子 佳作

同 右

西山 睦 佳作

林檎色づく信州の風の中

伊藤 敬子 佳作

(平成二十三年)

バス停が尾瀬の入り口花辛夷

行方 克己 佳作

山の辺の道尽きるまで鯛雲

伊藤 敬子 佳作

(平成二十七年)

組板の傷に沁み込むパセリの香

星野 高志 秀逸

押し花で余白を埋める古日記

山西 雅子 佳作

(平成二十八年)

校庭の雪の融けだす四時間目

名村早智子 佳作

逃げ水の立ち止まりある交差点

出口 善子 佳作

花吹雪落ちきるまでは風のもの

名村早智子 佳作

朝採りのメロン運ばれつつ熟るる

出口 善子 佳作

風に浮き風に流るる稻雀

朝妻 力 佳作

バス着いて手袋の手話じゃあ又ね

出口 善子 佳作

(平成二十九年)

せせらぎの小石の震え春浅し

星野 高志 佳作

蒼ざめた干潟に昇る春の月

対馬 康子 佳作

剃き出しの命ひしめく蝌蚪の池

星野 高志 秀逸

玄関を出てカナブンに突き当たる

山西 雅子 佳作

(平成三十年)

提灯をヒリりと伸ばす夏祭り

出口 善子 佳作

(平成三十一年・令和一年)

浅間嶺に煙立つ見ゆ蕎麦の花

伊藤 敬子 佳作

理科室に夏の名残の展翅板

朝妻 力 佳作

尺取虫への字崩してまたへの字

嶋田 麻紀 推薦

同 右

触れ合うて大きな露となりにけり

山田 佳乃 佳作

ペリカンの嘴透ける月の夜

山田 佳乃 佳作

(令和二年)

せせらぎの小さな堰となる落ち葉

山田 佳乃 佳作

木の根開く炭焼き小屋の犬の声

山田 敏秀 佳作

外面の良い妻に買うカーネーション

小林 貴子 佳作

(令和三年)

荒星や鯨の流れ着く浜辺 題詠「流」

夏井いつき 佳作

春一番流刑の島の波しぶき

井上 康明 佳作

(別途『俳句年鑑』掲載句)

掛け違ふボタンの穴の炎暑かな

(平成二十五年)

乳房より小泡の上がる菖蒲の湯

(平成二十六年)

透明なお遍路の列杉並木

(平成二十七年)

島ごとに教会の塔柚子の空

(平成二十八年)

啞蝉の待つ啞蝉でなくなる日

(平成二十九年)

雑踏の塵の一人となる師走

(平成三十年)

初めての海外渡航

長尾 進一郎

前日両親に見送られて、開業したての成田空港をJAL便で出発し、アンカレッジ、ハンブルク経由、フランクフルトに到着した。沢山乗っていた日本人はさっと散って、あたりは外国人ばかりとなった。

私は入社六年目に、会社からベルギーの研究所へ一年余の研修に行かせてもらえることになり、その前に英語に慣れるためロンドン郊外の英語学校に行く所である。

一人きりになると、急に心細さに襲われる。ロンドンへの乗り継ぎの仕方が分からず、カウンターで何度も尋ねる。何せ飛行機に乗るのも今回が初めてだ。ヒースロー空港に到着後、重いスーツケースを転がしながら、地下鉄、列車、バスを乗り継ぐ。車窓から見るレンガ造りの家々は日本では見たことのない風景で、疲れも重なって孤独感が募った。夕方に英語学校に到着し、笑顔で出迎えてくれてようやくほっとした。

学校では皆揃って食事をする。スタッフや各国から来た生徒とカタコトの英語で話すうちに少しずつ打ち解け、三日もすると到着時の心細さや違和感が無くなったのは自分でも驚いた。若かったのと、退路を断たれて覚悟が決まったせいだろうか。十日も経つと居心地が良いとさえ感じるようになり、放課後一人で列車に乗ってロンドンへ出て、コンサートを聴くまでに慣れた。帰りは夜中となり、駅から真つ暗な畑の中の道を歩いて、非常口から宿舎に入った。

二週間の英語学校滞在は瞬く間に終わったが、外国に慣れるためには貴重だった。ベルギーへ移動し、早速研究所に向く。場所はブリュッセルの南の郊外で、近くに大きな森が広がる緑豊かな所だ。ナポレオンの敗戦で知られるワッテルローにも程近い。研究所から徒歩三十分の所に一部屋を借り、自転車で通うことにした。

私が参加した研修コースの生徒は二十七人。ヨーロッパとアメリカの人達ばかりで、アジアからは私一人だ。初日に地元ベルギーのフィリップが、「自分は家族で日

本へ旅行に行ったことがある。こちらで困ることがあったら手伝うよ」と言ってくれた。

次に友達になったのはアメリカ人のビル。物静かで控え目な人で、想像していたアメリカ人のイメージとは、ちよつと違う。一般に言われている国民性の特徴が、皆に当てはまる訳ではないのだと納得した。

その後、フランス人のダミアンとも親しくなった。気さくで親しみやすい男だ。こうしてコース開始後間もなく三人の友人ができた。慣れない土地での生活や授業のことなど、何でも気楽に話ができる友達は心強かった。

十月末の休日、彼らと共に、フィリップ運転の車で南東部の国境に近い国立公園へ行き、広い草原や森の中を歩き回って、ベルギーの穏やかな自然を味わった。

翌年の夏、ダミアンの実家を訪問した。フランス西部の大西洋岸から少し内陸に入った所で、家の二階から見ると、見渡す限り平らな農地が広がっている。地平線に沈む夕日を見て、夜は何の音も聞こえず空には満天の星。大地に抱かれた日常を体験した。

ダミアンが両親と一緒に車で、古代人の壁画が残る丘の洞窟や、コニヤックの工場などへ案内してくれた。両親は英語を話せないため、ダミアンが通訳をしてくれる。彼が用事で車を離れている間は、両親と共に黙って待つしかなく、フランス語をもっと勉強しておけばと残念に思った。

研究所での研修は忙しくも充実した毎日で、指導教授はもとより、スタッフや秘書の方にも大変お世話になった。ヨーロッパに渡って一年半の後、予定していた研修を終えて帰国した。

その後、研究所の教授が来日する機会が何度かあり、旧交を温めさせて頂いている。またフィリップとは十年後にも再会し、家族ぐるみで親しくなった。

初めて海外に渡ってヨーロッパで過ごした一年半は、私の人生の中で最も変化が大きく、また思い出に残る期間となった。行かせてくれた上司と会社に感謝したい。

地球温暖化クイズ

吉田 眞人

「妖怪が世界を徘徊している。地球温暖化防止・脱炭素という妖怪である」と、百七十年前の先達なら書いたであろう。近時大きな課題となっている地球温暖化をこれ以上悪化させないためには、脱炭素⇨脱化石燃料が必須だ、というわけだ。市民権を得た脱炭素の波は、これに邁進しない者は人類の敵だ、という勢いである。

では地球温暖化の現状はどうなっているか。英国のシンクタンク「国際環境経済研究所」のウェブサイトに興味深いクイズが掲載されている。大変面白いので、紹介しよう。三択問題十二問だ。

2019年9月の記事であるが、このコロナ禍で、ここ数年の化石燃料の使用は増加していないので、問題の解答も大筋現時点と変わっていないだろう。

(正解は次ページ末参照)

問① 過去20年で世界の温度は何度上昇したか

a .. 0.3度 b .. 0.8度 c .. 1.5度

問② 産業革命以降、世界の温度は何度上昇したか

a .. 10度 b .. 3度 c .. 1度

問③ 1960年には5千〜1万5千頭の北極グマが生

息していたと考えられている。現在の生息数は何頭か

a .. 2万8千頭以上 b .. 5千〜1万頭

c .. 4千頭未満

問④ 世界のエネルギー消費に占める太陽光と風力のシ

ェアは

a .. 2.6% b .. 0.8% c .. 8.4%

問⑤ 1920年代以降、異常気象で死亡した人数は

a .. 9割以上増加 b .. 9割以上減少 c .. 変化なし

問⑥ 大気中のCO₂濃度は

a .. 40% b .. 4% c .. 0.04%

問⑦ IPCCは洪水についてどう言っているか

a .. (強い証拠と高い信頼性で) 増加傾向にある

b .. いかなる傾向についても証拠を欠いている

c .. (中程度の信頼度で) 減少傾向にある

問⑧ 化石燃料は2016年に世界のエネルギー利用の81%を占める。2040年はどの程度と予想されるか

- a…32% b…74% c…56%

問⑨ 欧州における2017年の新車販売に占める電気自動車のシェアは?

- a…17.4% b…28.6% c…57.3%

問⑩ 1981年から2015年にかけて極端な貧困下で生活している人々の割合は

- a…18%増加 b…18%減少 c…78%減少

問⑪ 1998年から2015年にかけて火事に見舞われた地表面積は

- a…32%増加 b…68%増加 c…24%減少

問⑫ 1983年以降、森林面積は

- a…13%減少 b…6%減少 c…7%増加

出来ましたか? 「簡単だ、正解率100%(ないしは80%以上)だ」と自慢してはいけない。クイズ出題者から次のような警告が発せられている。

「気をつけて! あなたには、気候に関する情報とバ

ランスのとれた見解があるようですが、誰にも知られないようにしましょう」何故なら「あなたは、温暖化防止対策に不熱心なグループの一員だ、と見なされる恐れがあります」。

昨年の十一月に英国のグラスゴーでCOP26が開催された。多くの国の首脳も参加し、日本の岸田首相も超強行日程(0泊2日)ながら出席した。グラスゴー気候協定の採択にあたり、石炭火力の扱いを巡り大論戦となり、結局インドや中国等の反対により、段階的廃止ではなく段階的削減となったことは記憶に新しいところである。

たまたまこの会議の時期、英国では風が弱く、風力発電による発電量が大幅に低下した。停電を避けるため、休止中の幾つかの石炭火力発電をやむを得ず急遽稼働させて、急場を凌いだのは誠に皮肉な出来事であった。

各問の正解 ①a、②c、③a、④a (2020年は5.9%)、⑤b、⑥c、⑦b、⑧b、⑨a (2020年は12%)、⑩c、⑪c、⑫c

ボケ防止の大ボラ噺ひきこもり編 まず模写から始めよ

山縣 正靖

前年号に「ボケ防止の大ボラ噺」なる大風呂敷をご披露もうしあげました。同じ事を繰り返していたのではボケるよ。何事も一歩前進を目指そう。このように公言しておく。「あれどうなったの？」と聞かれるかも知れないので、真面目に努力するという訳でした。

コロナ禍で引きこもりを強制されるようになってからこの大風呂敷は効果を発揮しました。なにしろ多くの課題を抱えていたので、退屈せずに日々をすごせたのです。

その中で初めて抽象画を描くという課題は小生のごときセンスの乏しい者には難しく、アイデアがでてこない。悶々としていたところある先生がのたまわく、「神様ではあるまいし、最初からオリジナルの抽象画を描く

など誰もできない。まず好きな抽象画を模写しなさい。模写すると画家がどんな色彩を創っているか、筆のタッチを選んでいくが見えてくる。勿論天才の絵を完全に模写することはできないが、何枚も模写をしている間にあなたの個性やオリジナルティもでてくる。すぐ模写を始めなさい」

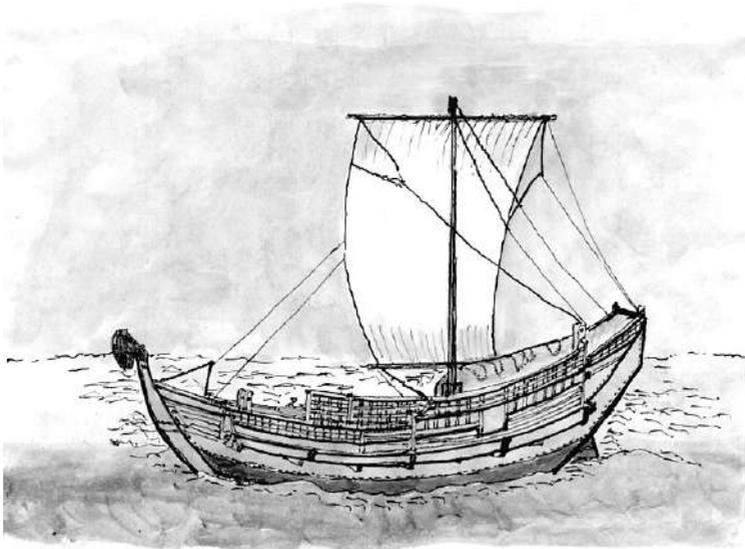
小生は木村忠太画伯のプロヴァンスの絵が好きなので早速模写を試みました。それまで漠然と見ていたのが、模写となるとどうやってこの色をだすのか、この筆のタッチを選ぶのか、音楽の世界ではヴィブラート、トリル、スタッカート、フォルテなどあるのに似て、この絵はプロヴァンスの光と影、多彩な色彩の交響曲なのだ、と悟ったしだいです。他にも脇田和、米国のマーク・ロスコーの模写をやってみたい。終わる頃には小生の個性もオリジナルティもおぼろげながらでてくるだろうと期待しております。

さて、小生は由緒ある古い帆船が好きで、今や歴史の

彼方に消えつつある帆船の雄姿を「悠遊」の挿絵に残したいと願っております。今回は江戸時代の日本の物流を担った北前船です。この船は別名千石船といわれる巨体なのに帆柱は一本、巨大な帆が一枚、船底の竜骨（キール）の幅が狭いという江戸時代特有の、操船が難しい船です。当時は鎖国で海外に渡航できないようにそんな規制を加えたようで、熟達の船頭、水夫が風の強い日は船泊で風待ちをしながら北は北海道から南は九州まで渡っていたのです。

北前船は乗合客も乗せていたようで、お客は船泊では陸にあがって地元の珍味を肴に一献傾けたのでしょう。

「船泊 待てば海路の日和かな」



北前船

金沢感傷旅行

矢澤 正二

半世紀ぶりの金沢であった。コロナ禍が少し収まったかにみえた秋、念願の金沢行を実行した。北陸新幹線で二時間二十分、ドーム状の融雪装置を備えた新駅舎が待ち受けてくれた。「おもてなしの心」で、雨や雪が多いこの地を訪れる人に傘を差し出すという優しい心を表しているという。

思えば四五十年前、新米係長として金沢に赴いた。東京から米原経由で約五時間かかった。そこで結婚して子供が生まれた。金沢は「弁当忘れても傘忘れるな」との格言がある。「一年中雨が多く日照が少なく胸をやられる人が多い、気を付けた方がいいよ」(実際そんなことはない)と先輩から助言を受けた。金沢は江戸時代加賀、能登、越中の三カ国を領し、百万石の城下町であり、その気位は高く、雅な伝統は今でも大切に受け継がれている。

五六豪雪

金沢在住で忘れられないのが五六豪雪。昭和五十六年の日本海側を襲った記録的な大雪をいう。雪とは無縁で育った私にとってそれは大変であった。胸まである積雪には途方にくれた。朝まず始業前に雪かき、そして夜は自宅の通路開けのために雪かき。毎日雪と格闘したのも思い出である。雪を地元の人は「白い悪魔」と呼ぶ。

近江町市場

江戸時代からの歴史をもつ。アーケード内には魚介類、青果、総菜何でもござれの市民の台所だ。会社の帰りに薄暗い電灯の下、晩酌の友に刺身などを買ったものだ。それが今ではアーケード内に回転寿司や海鮮丼の食堂が軒を並べ、食のテーマパークの体をなしている。

香林坊、片町周辺

香林坊、片町、堅町周辺を歩いてみた。街には高級ブランド品、ファッションを並べる店ばかりで、昔ながらの古い店は影をひそめ、情緒が感じられない。しかも商店街もコロナ禍でシャッターを下ろした店も数多く、街全体が重苦しい雰囲気を感じた。

北陸新幹線開通に伴い、多くの東京資本が入り街は変わったと聞いた。コロナ禍を機に古い店は街から引いていったのであろう。

ひがし茶屋街、橋場町

美しい紅殻格子と石畳が続くお茶屋街。当時の私はめくるめく不思議な世界に身を置いたことを覚えている。

今は修学旅行生が多く見られ、スイーツの飲食店や土産物店が軒を連ねており、当時の面影はない。

ひがし茶屋街からほど近い橋場町に、三百年の歴史をもつ大樋焼の美術館へ行った。そこで偶然人間国宝十代大樋長左衛門さん(九十四才)をお見かけしたことは嬉しかった。現在も作陶に励んでおられるという。

当時私は長左衛門作の抹茶茶碗を購入していた。

保守基盤

「本当はいい人やけんねー」とはジェンダー問題の発言で物議をかもした元首相のことであった。ここは元首相のお膝元であった。その食堂の女主人は元首相に励ましたの手紙を出したところ、お礼の電話が直々にあったそう、それは感激していた。こんなところにも保守政治

家は庶民生活にも根を張っていた。

その女主人は私が住んでいた頃を知る唯一の人であった。二時間余り話し込んだ。この女主人が私を当時の金沢へ引き戻してくれた。それは懐かしく、楽しい時間であった。

事務所、社宅

勤めていた事務所の近くまで行った。当時の楽しいことも辛いこともあれこれ脳裏に浮かび、苦しくて足が止まった。

社宅のあった場所には路線バスで行ってみた。鉄筋三階建てのそれはもうないと分かっていたが、その周辺もすっかり変わってしまった。唯一子供が熱を出し夜間診療をお願いした医院が代替わりしてやっていた。時代は大きく変わっていたのだ。

ここに私の感傷旅行は終わりを告げた。

追記 金沢からおせちが届いた。女主人の店で頼んでいたのだ。「かぶら鮎」「寒ぶり」などそれは美味しかった。

菩提樹

八木 信男

大正末期生まれの父は島根県の出雲出身で陸軍に召集された。

母は昭和五年生まれ。和歌山で幼年を過ごし、大阪で育ち空襲に遭う。

空襲におびえし母は壕中で

耳を塞いだ十五の少女

終戦が父の心を与えしは

青空でなく鉛色の雲

戦後、二人は見合い結婚で夫婦となった。

物がなき時代のさなか新婚の

父母の旅は武田尾温泉

長男が生まれた。

我が子にもしばし与えしヒ素ミルク

M社不買を母は決意す

営業職の父は、接待で午前様は当たり前だった。私と兄の夏休みの旅行はいつも祖父母と一緒にだった。

子育ては母の役目と言い放ち

父は不在の家庭となりゆく

しかし、私も兄も無事思春期を終え、成人となった。それなりに育った子らの成人を

無口に祝う我が父と母

巣立ちこそすなわち父母のそれからの

終わることなき老いの始まり

兄が結婚し、初孫が生まれた。

初孫を見て微笑みし父のさま

同じ言葉を繰り返すなり

父は入院。先は長くないと言われ、ほぼ毎日見舞いに

行く。眠っている父の横で専門書を一冊読み終えた。

ご主人は余命三月みつぎという医師の

予言はまさにはずれることなく

戦友の弔辞で知った終戦で

特攻中止の命受けし父

母は一人暮らしとなった。週に一度、顔を見に行く。

一人でも心配無用と言う母は

深夜ラジオを友にしており

空襲に怯えし少女は年老いて

レバノン戦禍の子らに涙す

世話をやく相手もおらず鉢植えの

花を育てる母はもう喜寿

幼少も不幸だった母に追い打ちをかけるように老人福祉が改悪された。

年金で腹が立ったという母は

野党候補のポスターを張る

大阪にその年一番の寒波が来た日、母は心不全で突然亡くなった。

夫のため子のためさらに孫のため

生きてきたのか母の人生

菩提樹の花言葉は夫婦愛だと知った。花が咲き終えた菩提樹の木をみると子供への愛と思える。

風雪に耐えし野道の菩提樹の

実を守りたる葉の確かさよ

我が親の世代はほぼ同じ人生を歩んだのだろう。残業、接待で体を酷使した父、紙不足や米不足で走り回った母、家族を守るために必死で生きた両親を思うとき、私は親としての役割を果たしているのだろうかと不安になる。それはおそらく私の娘たちが自らの歴史を振り返ったとき、彼女たちが私に下す判決に待たなければならない。



十二月に思う(1)

森田 晃司

昭和十六年十二月八日は真珠湾攻撃の日でした。同年十一月十五日の大本営政府連絡会議とそれに続く内閣議で、「対英米蘭蔣戦争終結促進に関する腹案」が決定され、「やむなく開戦に至った場合は西へ進みインド洋を目指す」ことが確認されました。この国家の決定した大方針に逆らい、永野修身軍令部総長、山本五十六連合艦隊司令長官の率いた海軍による真逆の東への暴走が真珠湾攻撃でした。国家に対する反逆とも思えるこの愚拳が日本の敗戦につながりました。

十二月二十三日は上皇陛下の誕生日です。皇太子時代の昭和二十三年のこの日、極東国際軍事裁判（いわゆる東京裁判）でA級戦犯とされ死刑判決を受けた七人への絞首刑が執行されました。東条英機を始めとする六人の陸軍関係者と広田弘毅元首相でしたが、なぜか、海軍関係者は含まれませんでした。

昭和二十年の十二月十六日は、GHQから戦犯容疑者とされていた近衛文麿が自殺したとされる日です。巣鴨拘置所への出頭が予定されていた日の早朝、自宅の隣室には知人二人が待機していた中での変死でした。GHQ関係者が駆け付け、十分な検死もないままに自殺と断定しました。（信憑性ある他殺説が出てきています）

十二月だけをとっても、日本の近現代史にとって重要な様々な出来事があったのですが、近年、あまり省みられなくなっています。

小生は戦後生まれの第一期生で、「日本は戦争に負けが良かった。米国が軍国主義を打ち破り、日本国民に自由をもたらした」という民主主義教育を受けましたが、疑念は年々膨らんできます。特に近年の日本精神の衰退を見ると、敗戦の負の影響の大きさに愕然とします。

GHQは七年半にわたる占領中に秘かに言論統制を敷いて日本の言論を圧迫していましたが、その上、戦前戦中の八千近い優良図書を実質発禁とする犯罪行為を行っていたことが近年になって発覚しています。

南原繁が総長だった東大で、GHQからの通達を受け

て、三人の関係者が発禁図書を選定に協力したことも明らかになっています。

隠されていた発禁の実態が明らかにされるとともに、良書を復刻する動きが西尾幹二氏を始めとする人々の努力で進められています。

小生も幾冊か拝読し、当時の日本人の觀察の鋭さ、国際情勢への真摯な対応、主張すべきは主張する勇氣などに気圧される思いです。

翻つて、現代日本は、食料自給率は四割を切り、万が一の食糧危機に対する備えは皆無です。生活と産業の基本となるエネルギーには確たる見通しもないまま、脱炭素だの、自然エネルギーだのを唱える無責任にして無防備な状態に陥っています。国民の領土、財産、生命を守るべき防衛は未だに日米安保頼みで、各地に米軍が駐留したままです。主要軍備の国産は許されず、米国の言い値での購入が続いています。

中国共産党の独裁政権には人権非難決議さえ出せない一方では、三十年間続く経済停滞のありを受けて日本の土地や企業を中国資本に買い漁られています。

そんな中で、十二月二十二日、皇統に関する有識者会議が最終報告をまとめ、男系男子による皇位の継承を明記し、旧宮家男子の皇族復帰の検討を提言しました。

自民党をぶっ壊すと言つて、日本をぶっ壊す愚策が続けた小泉内閣では、伝統を無視して女系天皇を認める寸前まで行きました。天の配剤か、悠仁親王のご誕生で事なきを得ましたが、あれから十五年、ようやく正しい方向に歯車が向き始めたようです。

今年には皇室の存統にとつて忌まわしい出来事が続きました。しかし、日本人にとつて皇室は、どんな意味があるのか、見つめなおす機会でもあります。二千年前後続いている王室、家系は世界に類例のないものですが、長い皇統の核は血統です。そして血統の核は男系の継承です。女系天皇の容認は皇統の破壊、皇室の解体につながると言えます。

皇統にとつて、最も重要な男系継承を明記したこの貴重な最終報告が日本を取り戻すための大きな節目となつて欲しいものです。

それは四月のことだった

三 春

春たけなわの四月。四ツ谷の眼科医へ。

いつも通りの検査を終えて診察室に入ると、「よくないねえ。これ以上打てる手はないから、あとは手術しか残ってないんだが、この手術にはリスクもあるからな。ま、歳も歳だから寿命との競争だ、死ぬまでなんとかもたせりゃあ上等だろう」。緑内障にかけては日本で五本の指に入る名医だそう。この口の悪さ、無用な希望を抱かせない、私はそこが気に入っている。長年の通院でどうやら同じ年らしいとわかった。いかに名医でもその年齢で外科手術はそろそろ危険ではあるまいか、むしろそれこそがリスクでは？

点眼薬の処方箋を受け取り、三ヶ月後の予約をとる。

十二歳から十年間も通学した四ツ谷、半世紀を経て駅も街並みも驚くべき変化を遂げた。変わらないのは土手の桜並木だけ。そよ風になぶられた花びらが舞い降りて、

黒土を薄桃色に染めている。

コロナ感染を警戒してか四ツ谷駅の人影はまばらだ。

ホームに滑り込んできた東京行き快速電車に乗り込もうとしたとき、反対側の八王子行きに学生時代の友人の姿を見つけた。そういえば彼の住いは荻窪だ、車内で昔話でもしようかと、慌ててその電車に飛び乗った。

乗ってはみたものの、彼は隣の女性と親し気に話しているの無粋に割り込むのはいかなものか、仕方なく少し離れたドアの脇に立って待つことにした。

私に気付いてくれる気配もないまま、電車は早くも阿佐ヶ谷を通過、あと一駅で彼は降りるはず。せっかくの機会だ、私もそこで降りようか。私にとっても荻窪は昔しばらく住んでいた懐かしい街でもある。あの街もすっかり変わったに違いない。

さつきからどうも変だ。この電車は四ツ谷駅を出てから一度も停車していない。それなのに乗客は困惑した様子もなく、誰もが平然としている。スピードは上がるばかり。うらかな春はどこへやら、いつのまにか窓の外

には枯野が広がり、雪もちらつき始めた。なにか恐ろしい異変が起こっている。昔話なんぞもうどうでもいい！

そのとき、彼が立ち上がって近寄ってきた。

「実はさっきから気付いてただけどさ、どうしてこの列車に乗ってるの？ 俺は七年前にこの世とおさらばしたんだぜ。この乗客はみんな中央線沿線に愛着のある人たちでね、時々こうして現世の人々や景色を眺めにくるのさ。ところでもう感じているだろうけど、早く降りないと帰れなくなるぞ」

「うん……、でも全然停まってくれないし、ここが何処かも、どうやって帰ればいいのかもわからないのよ」

「じゃあ俺が掛け合って最徐行にしてみようから窓から飛び降りろよ。降りた途端にさっきの四ツ谷駅に戻っているはずだ。そこから先は通いなれたコースだろ？」
気がつけば自宅のベッドに居た。無我夢中で辿りついてそのままベッドに倒れこんだのだろう。

ここまで読み進めばもうお分かりだろう。これは一般

的には「夢」と呼ばれるものだ。だが、夢を単なる「夢物語」で片づける時代は終わろうとしている。現実世界をクルリと裏返せば、時空を超えたもう一つの世界が同時進行しているかもしれないのだ。

Facebookが社名を「Meta」に変更したのは二〇二一年十月のことだ。「メタバース」という事業に力を入れていくというニュースが世界を駆け巡った。

メタバースとは、meta(超)とuniverse(宇宙)から作られた合成語で、インターネット上に構築される多人数参加型の三次元仮想世界だ。そこでは、実際の人間がアバター化して、現実世界同様の活動を展開できるらしい。インターネットを離れても時間が常に流れていて、他者同士の交流などが行われ続けるのだ。

この「夢のような」世界、素晴らしいようでもあり、恐ろしいようでもある。

ところで、運行表にない列車は貴方の街の沿線を今も走っているはずだ。死者それぞれの思いを乗せて。

コロナ禍のボランティア活動

松谷 隆

日本での新型コロナウイルス感染症が蔓延し始めてから約二年。その間観光や飲食業界での被害がよく報道された。だが、その大半は協力金などで補填されているのではなからうか。一方、補填のない小さなボランティア活動も存亡の危機に出くわしている。

二〇一二年二月に八名で結成の折り紙ボランティアグループ「にこにこ会」（以下「当会」）は毎年二十回前後の「出張折り紙サロン」と銘打って、障害者施設や高齢者施設への訪問活動を行ってきた。

参加者たちと一対一、一対三、四人の対面指導、手助け、折紙を完成する方式で、参加者の反応がすぐ読み取れ、その後の活動に反映できている。

二〇二〇年一月末、この対面方式がとれなくなり、当

会もとうとう解散かと危惧した。

というのは、新型コロナウイルスの感染防止策の一環で、前述の施設が「第三者の入場・入館お断り」を宣言。お断りが次年度にも継続すれば訪問活動なし、活動資金の八〇%を占める社会福祉協議会（以下「社協」）からのふれあい助成金がゼロになるからだ。

そのとき、救いの手があった。社協からの「新年度の助成金申請書は例年の活動ベースとすること可」の通達で、二月中旬に二〇年度の申請書を提出できた。

だが、コロナの猛威は収まらず、三月四日から折り紙の練習施設が閉鎖となり、さらに、四月二七日の『緊急事態宣言』で閉鎖が六月末まで延長、七月になり閉鎖解除でも訪問先のお断りはそのまま継続。その直後に新年度の予算申請が承認されたのに打つ手なし。もっぱら今後に備え、毎月二回、折り紙の勉強を続けるのみ。

そして社協から、例年通りの『年末たすけあい募金配分金』対象の事業募集通知があり、八月初旬に申請書を提出した。これは共同募金からの助成金で、当会では毎

年障害者施設に対する「クリスマスプレゼント提供事業」として申請し、実施してきた。

八月の申請時に、担当者にダメ元で「ふれあい助成金の事業は相手方が入場お断りなので、事業が消化できない。たすけあい事業と同様の内容をふれあいで行って良いか」と打診の結果、「OK」を得た。ホッと一息。

了承を得たものの、工数不足のため、コマとチューリップを百十個ずつ作り、両施設に届けるだけで終わった。

結局、二〇年度の決算で、前受の助成金の七五%を返納という想定外の事態に直面したけれど、生き延びた。

二一年度のふれあい助成金事業計画は当初より折り紙作品の贈呈に限定、申請金額も過去最低とした。

すでに、兜、亀、ハイビスカス、サンタクロースを提携済で、特に花は好評で両施設とも年末まで受付に飾ってくれている。後一回作品を届ける計画である。

一方、年末たすけあい事業は例年通り、障害者施設へ十二月九日にプレゼント五十人分を届けた。

和紙で折ったギフトボックスにサンタクロースを貼り付け、他の障害者作業所から調達したクッキーを入れた。さらに折り紙のペンギン二羽を、クリスマス仕様のバッグに入れたものである。

これで二一年の作業は完了だと思ったのに、二七日に障害者施設から「先日のお礼状を郵送してよいか」との問い合わせ。善は急げと「頂きに行きます」と応答。

担当者と電動車椅子に乗った女性の出迎えて、彼女から「ありがとう」と共に、立派な見開きの色紙を頂いた。開いたら、お礼を言う前にウルつとなりかけた。

後向きで片手にプレゼントをもった四名の背中に「ありがとう」の文字の写真、プレゼント五個付きのツリーの写真、十枚以上のメッセージが張り詰められている。

折り紙活動を始めて十年目にこんなうれしいお礼を頂けるとは全くの想定外。

当会の代表にこれを届けると、「我々のしていることがこのように評価されているならうれしい。これからも頑張って喜んで貰いましょう」との決意が表明された。

かみのやま温泉の旅

松田 昌康

昨年十一月にコロナ感染者が減少し始めた頃、二泊三日で山形県かみのやま温泉を訪れた。旅行会社が往復の電車とホテルを予約して夫婦だけで行動できる形の旅だ。

出発一週間前までの天気予報では、当地はずっと雨の予報だったので、ホテルで温泉を楽しむしかないかなと、観光して廻るのは半ばあきらめていた。

しかし、出発日の東京は曇りで、現地のかみのやま温泉駅に着くと外は雨は上がっていた。旅館に着いたら外は暗くなりかけていたが、部屋に荷物を置いてすぐに、旅館から歩いて行ける武家屋敷と上山城を見に出かけた。徒歩数分で武家屋敷通りに出て、何軒か残った武家屋敷を門の外から見る事ができた。茅葺の家屋をカメラに収めたが、なにしろ暗くなっていたので、良い写真は撮れなかった。

さらに観光地図を頼りに上山城を探して歩くと、旅館

の送迎バスから遠くに見たお城がライトアップされているのが見えてきた。坂道を登って行くと、道から少しの所に石の鳥居があり、入ってゆくと月岡神社の境内だった。その隣に、お城としてはちょっと小ぶりではあるがライトで白く輝く上山城があった。「羽州の名城」として知られる美しい城だった。なお、ライトアップされた天守は、一九八二年に二の丸跡に建立された模擬天守のこと。城の中は郷土資料館になっているが、時間も遅く閉まっていた。そして雨が急に降り始めたので、慌てて宿に引き返した。

夕食後に屋内の温泉に行った。大浴場には人は居らず、貸し切り状態でゆっくり温泉気分を味わった。外のペランダのところは露天風呂があり、暗い空を見上げながら心地よい湯加減を暫し楽しんだ。

翌朝は曇りだったので、山寺、即ち立石寺に行くことにした。奥羽本線で山形に出て仙山線に乗り換えて、約一時間で着く。あいにく山寺駅に着いたら雨が本降りになっていったが、来たからには上まで登ることにした。

駅を出て立谷川に掛る橋を渡り、右に曲がって少し行

くと左に山寺への登山口が見えてきた。石段を上ると根本中道があり、左側に松尾芭蕉の句碑とその奥に清和天皇御宝塔がある。芭蕉の句碑は、有名な「閑さや岩にしみ入る蟬の声」の碑である。その前を通って山門につき。その頃になって、大勢の高校生がやってきた。登山口近くの駐車場に何台かの観光バスが止まったのを見たが、それに分乗してきたらしい。がやがやとしやべりながら私たち二人を追い越してゆく。雨も小雨になっていて、男子も女子も傘も差さない高校生が多く、足元が滑りやすいのも気にせず、つづら折りの階段を勢いよく登っていく。階段を五百段余り登ったところに、せみ塚なる石塚がある。芭蕉が詠んだ「閑さや……」の句を認めた短冊をここに埋めて塚を立てた由。

さらに少し登ると弥陀堂といわれる岩壁があり、凝灰岩が風化した壁面に阿弥陀様が見えるそうだ。その下には岩塔婆と呼ばれる陰刻がいくつもあり、たくさん卒塔婆が置かれていた。この辺りから見る仁王門は、まわりの紅葉と相まって美しい眺めだった。

千余段の階段を登り切ると、左側に開山堂と納経堂、

奥の右手に五大堂がある。反対側の岸壁にたくさんの洞があり、僧が修行したという。五大堂からの展望は良いのだが、まだ雨が降っていて遠くの山並みは煙っていた。そこにはまだ多くの高校生がいたが、付き添いの先生がもう降りる時間だと声を掛けると急に居なくなった。

そこから奥の院に向かったが、途中に真っ赤な四角い郵便箱が設置されていて、住所と配達時刻が記されている。こんな高いところまで郵便配達するのかと、驚いた。

奥の院の左に大仏殿、前には奉納された大きな金灯籠、さらに鐘楼まである。奥の院と大仏殿の屋根は銅板葺なのにも驚いた。奥の院の正式名は如法堂で、山寺開山の慈覚大師が中国から持ち帰った薬師如来と多宝如来が本尊だそうだ。

奥の院を拝観しているうちに雨が上がり、百丈岩の上に建つ納経堂が主題となり、その左に遠くの間々や下の家々を見渡すことができ、まさに一幅の絵を観る思いだった。(巻末のペン・フォト句③を参照)

帰りの電車の時間になり下山を急いだ。途中で雨にも会わず、来てよかったという感慨を深くした。

あの時私は生きたウイルスを見た

細谷 博

この二年というもの、新型コロナウイルス禍で世界は騒然としておりますが、その姿の写真は新聞、テレビなどいずれも同じ写真ばかりで、ウイルスの生きている姿を静止画像に記録するのは極めて困難と言うことらしい。

しかし私は、その稀なウイルスの生きた姿を半世紀も前に見た、世界で最初の数人の一人だったのです。

人より六年も遅れて「外国語に堪能で理数に強い」という詐欺師の触れ込みで一九六三年に入社した私は、適任者不在で困っていた理化学機器海外担当のポジションに只一人はめ込まれました。まずは製品勉強のためにと送り込まれた工場の応用研究室で、DNAとかRNAとかの用語が飛び交う不思議な世界に接し度肝を抜かれていますところへ、「これが君にこれから世界に売り出したい製品だよ」とサイズの異なるための金属製の円筒をテーブルに積み重ねて置いたような不思議な機械を

紹介されました。これが電子顕微鏡との出会いでした。

今では皆さんもご存じのごとく、光粒子の波が大き過ぎて倍率が二千倍程度に留まっている従来の光学的顕微鏡に対し、電子顕微鏡（以下「電顕」と呼ぶ）は加速した電子を光の代わりに利用して、なんとオンゲストローム（一〇〇億分の一メートル）単位で微細な物体の観察を可能とする最新の計測装置だったのです。

それまでは米国のPE社のOEMで細々と売り出していた電顕を世界規模で自社ブランドで拡販する遠大な計画を実施したいが、市場が限定され、単価も小さいので人員を割けられない。そこで、君ひとりで頑張ってくれとの過酷な要求であったのです。

新入社員の私にとってはとんでもない過大な要求でしたが、肺結核で人生が大幅に遅れてしまっていた私にとっては、ここで一気に挽回するチャンスと捉えて、持てる限りの知能を絞って全面戦争を開始したのです。

アメリカに限られていた市場を全世界に広げ、ゲームス、フィリップス、RCA、さらに国内三社も含めた先行メーカーに、海外マーケティング、特許、学会を

主とする論文発表、展示会参加など思いつく限りの対抗を開始しました。自社の海外法人は拡販には役に立たないので、総合商社を主体に各国毎の代理店候補を探して適性を審査の上で選定し、後発のハンディを挽回すべく直接相手国の政府保健省とか保険組合を直撃して名前を売り込むとか、あらゆる手を尽くしたが、なんと行って最も有効な手段は、「それまでに誰も見たことのない画像」を見せることでした。

そのための超分解能画像は、自社の中央研究所の他に東北大、東大、名大、阪大などの協力を得て、神がかり的な技術と努力で実現した、金をはじめとする元素の配列を写した写真や金属疲労を捉えた写真などでしたが、この時点で最も求められながら入手不可能だったのは生きたウイルスの写真でした。

電顕での撮影には超薄い切片を真空内で試料皿に固定して、映像面に仕掛けられたフィルムに感光させる必要があるが、その数秒の間にウイルスは電子線で破壊され、フィルムには無残な死骸しか写らないのです。ところが、その電子線が超高速であれば、石なら割れるガラス窓が

穴が開くだけで済みます。普通では一〇〇kVの電子銃加速電圧を一、〇〇〇kVに昇圧すればウイルスが焼き切れる前の姿がフィルムに撮るはずです。

一九七一年九月にフランスのグルノーブルで開催の世界電顕学会に最新の二〇〇kVの電顕を筐体内部を宇宙真空度に保持したままで現地に送ろうという斬新な手段を思い付き、東京からニューヨークまでをJALのジャンボ機で、それからパリまでをエアフランスで運んで即日通関の離れ業を実現しようとしていました。展示リーダーの私が離日する前日に、中央研究所に急遽呼び出されて必死で懇望されました。「昨日一、〇〇〇kVで撮った世界で初めての生きたウイルスの写真です。これを是非グルノーブルで発表して下さい」

学会でのセンセーションの様子は説明の言葉がありません。結果としてカリフォルニアバークレイ校、マックスプランク研、英国原子力研(UKAEA)など次々と一、〇〇〇kVクラスを納入、世界の超高压電顕時代を招来したのです。そうです。私が生きたウイルス画像を世界に紹介したのが全ての始まりでした。

机の上の愛読書

藤原 道夫

机を今の位置にセットしたのが凡そ十年前。そこに数冊の本が積んであり、折に触れて読んできた。以下は現在置かれている四冊の本についてのコメント。

＊『日本の七十二候を楽しむ』（白井明大、東邦出版）

候のことが簡潔に書いてあり、美しい挿絵入りで旬の野菜、旬の魚介、行事などについて説明されている。この本で候に初候、次候、末候があることを知った。例えば小満のところ。いのちがしだいに満ち満ちていくところのこと。草木も花も、鳥も虫も獣も人も、日を浴びてかやく季節。初候として「蚕起きて桑を食う」、旬の魚介はきす、野菜はそらまめ、虫はてんとうむし。次候は「紅花菜う」、旬の魚介はクルマエビ、野菜はしそ、草花は紅花。末候は「麦秋至る」、旬の魚介はべら、果物はびわ、などである（名称は原著のとおり）。その折々に読んで

楽しむ。次の年も同じところを読んで、初めて読んだ時のように「なるほど」と感心してきたのかもしれない。

＊『論語』（金谷 治訳注、岩波文庫）

前にも持っていた筈だが、紛失しているのに気付き、机をセットした後求めた。この文庫本は一九九九年十一月十六日改訂第一刷発行、入手した版は二〇一〇年一月二十五日第二十刷。最新の版を調べたところ二〇二一年一月十五日第三十三刷、今も読み継がれていることが分かる。大変古い語録は、時代により国によりさまざまに受容されてきた。日本では特に江戸時代によく読まれたようだ。現代でも、道徳ないし教養として受容されているのだろう。訳者が述べているように、「老人には安心され、友達には信ぜられ、若ものにはしたわりたい」とする楽天的でたくましいまでの人間肯定の精神に裏打ちされた語録は、蘊蓄に富んでいる。断片的に読んでも、その通りだ、これを遵守していこう、と思う言葉がちりばめられている。また、引用された言葉を見聞きするたびに、本を開いてそのありかを確かめる。具體的な言葉については、改めて考察してみたい。

＊『歴代天皇一二五代総覧』

(歴史読本編集部、新人物文庫)

天皇の名前に疎く、あまり関心を抱いていなかったのだが、天皇の名を知るとその時代のことにより深く理解できると悟り、数年前に求めた。ざっと見ると、古代天皇については神話の世界だ。継体天皇あたりから歴史の時代へと移行していくようだ。この天皇の名は能「花筐」に出てくる。『万葉集』を読むうえで、必須の知識になることも分かった。巻一の一は雄略天皇が詠んだとされ、天皇が庶民の女性に名を問うおらかな歌。巻一の二は舒明天皇の歌で、天の香具山から国見をおこない、自ら治める大和の国を称賛している。日本国の原型が見えてくるようだ。額田王が登場する頃、皇位継承をめぐって凄惨な争いがおこる。この時代に万葉集初期を飾る秀歌が多い。『平家物語』には史実も残されており、天皇の世事への関わりが生々しく伝わってくる。江戸時代初期、後水尾天皇は紫衣事件などをめぐり徳川幕府との確執に嫌気がさして退位し、時代文化のリーダーとして活躍す

る。桂離宮の完成に貢献し、徳川家から入内した東福門院とともに修学院離宮の創設に熱中する、などなど、参照するたびに面白い。この本は今後もじっくり読み込んでいこう。

＊『寝るまえ5分のモンテニユ』

(A: コンパーニユ、山上浩嗣ら訳、白水社)

モンテニユの代表作『エッセー』(『随想録』)は文庫本で五冊になる大作。著者が生涯にわたって加筆・訂正していった文章は、自然体だが長々と展開し、読むのに根気がある。一通り読んでもさっぱり覚えていない。今ある本は、その筋の第一人者がフランスのラジオ局の依頼で五分間解説した講演をもとに、四十の表題にまとめたもの。原文の引用は少ないが、著者の簡潔で明快な説明が元の文章をひきたてる。まがりなりにもエッセイを書いている身にとつて、原文も解説文も大変参考になる。とはいえ、なかなかうまく書けず、まとめるのに苦労するばかりである。

最初の本を除き、三冊には友人が深く関わっている。その方と交わす本についての会話は、読む以上に貴重だ。

二枚の絵

原田 信

小学五年の授業で課題の楽器を描いて色を塗り始めた
ら「教員室へ行ってチョークを取ってきてくれないか」
と先生に言われた。その日の帰りもY君と一緒に帰った。

「先生が好きなの」と急にきかれて「うん、好きだよ。
字も絵もうまいし、いつも明るいし。四年生のときはひ
どかった、やなヤツだったな」彼も「唄も楽器も上手で、
めったに怒らない」と応じたが「でもね」と声を細めた
から、急な質問に隠された「ヒミツ」のにおいを嗅ぎ取
った。「先生は君のいない間に君の絵を取り上げて『こ
んな色を塗ってはいけない、まねをするな』と言ったん
だ。こういうのはいやだな」「そうか、そうだったのか」
授業の途中でチョークが足りなくなるなどこの先生では
ありえない。でも色遣いはあえてしたことなので、次の
時間も押し通して完成させた。楽器は当時のことだから
安物の西洋太鼓で、上下のリングはただの青、胴にはピ

ンクの花柄のセルロイドが張ってあった。リングの青に
は緑と黒を混ぜた。これが問題にされた。花柄も色を濃
くし影を付けて、全体的に存在感を出した。不透明水彩
絵の具なので色の重ね方で微妙な色になるし重厚な感じ
にもなる。先生はいつも「見たように描け」と教えた。
先生が描いた赤坂から四谷にかけての紅葉の並木は見事
であった。

でも、見るからに安物の楽器をそのまま写実するのは
ばかげていると思ったし、描いても楽しくない。その頃、
父が毎月取り寄せていた西欧の画集を見ていたが、静物
画の多くは重厚な印象で、とくに分厚い書物を三冊重ね
た絵は、皮の表紙に金文字が刻まれ、それはまさに「書
物」であった。

楽器の作品は区の展覧会に出されたが、みんなと行っ
た会場には見当たらず、その理由をきいても先生は無言
であった。何事にも率直であった先生には珍しい反応で
あった。しばらくして、実は都の展覧会に格上げ出品さ
れ、賞を得て額縁入りで返されてきたが、経緯はその後
も知らされなかったし、会場にも行っていない。

その一年後、焼き物の褐色の壺を描いた。壺には幾筋か縦の掘り込みがあり、その間に棚状の刻みがあつて一段毎に白釉が施されていた。これも見かけより厚重な感じにした。その写実性が買われたのであろう、先生にはいたくほめられ、教室の後ろの壁に額縁入りで飾られた。

それから二十年。卒業した小中高校を訪ねてみたいと思ひ立ち、妻を誘つた。三校とも東京・赤坂に近い。小学校の門をくぐつたとき、校舎の配置が変わつていないので、「あの絵がまだあのままあるかもしれない」そんな予感がした。確かに同じ教室の壁にあつた。懐かしい再会であつた。事情を話すと、担任も校長も引き取りを快諾してくれた。その絵を壁から外すのは惜しいとも思つたが、二十年も前の卒業生の作品が漫然と飾られているのは不遜に違いない。妻は「こういう絵を描いていたのね」と言つた。少しは感心したのかもしれない。小学校は間もなく廃校になつたから、このとき行かなければ再会はできなかつたはずだ。でも、「壺の絵」はしばらくして行方がわからなくなつた。転勤や引越して取り紛れたのであろう。その「壺の絵」よりもさらに懐かし

い「楽器の絵」はもつと前からわからなくなつていた。

さらに約三十年が過ぎ、定年退職直前に父母が相次いで他界した。しばらく週末を実家で過ごし、後片付けをやつていた。ある日、元の子供部屋の天袋から丸めた十数枚の画用紙とともに額縁入りの絵を見つけた。その額縁の絵こそ、あの「楽器の絵」であつた。実に久し振りの思いがけない再会に身が震えた。額縁には金色のラベの貼り残しがあり、小さな賞状もあつた。絵筆の感触が戻るように感じた。丸められた画用紙にはもつと幼いころのものも多く、黄色をバックにしたナスの鮮やかなあの紫色は忘れ難い。一枚一枚に思い出があつた。「こんな風に取つておいてくれたんだ」と感謝の念が湧いてきた。間もなく先生が亡くなり、葬儀に十人余りが集まつた。二枚の絵は授業でみなが見ているけれど、もう覚えてはいないだろう。ましてその後の軌跡なぞ知るはずもない。「楽器の絵」は自分の部屋に掛けなかつた。懐かしさとは別になぜか心が騒ぐからだ。いまま、元の部屋の本棚に、丸めた画用紙の絵と一緒に置いたまま、取り出すこともなく、すでに二十年が過ぎようとしてゐる。

景德鎮の女体

浜田 道雄

半世紀近くも昔のことになるが、ある年の夏山形県米沢盆地の西北にある川西町の「掬粹巧芸館」を訪れたことがある。この街の酒造家「樽平」の一〇代目の当主井上庄七氏が収集した日本、中国、朝鮮を中心とする陶磁器のコレクションを展示する私設の美術館である。

この美術館は優れた陶磁器を所蔵することで知られており、なかでも高さ六〇センチほどの景德鎮の染付「飛鳳唐草文八角瓢形花生」は元代陶磁の逸品として有名で、民間では唯一の重要文化財に指定されている。

そのころ私はタイで学んだスワンカローク焼（日本では「宋胡祿」として知られている）に触発されて、中国をはじめとするアジアのさまざまな陶磁器を勉強していた。なかでも白磁に呉須で絵付けした「染付」にはとくに心を惹かれていて、どこかの美術館にいいものが展示されていると知ると、機会を求めてはそこを訪れて鑑賞

し、勉強するのを常としていた。その夏の東北旅行も、掬粹巧芸館でこの景德鎮の大きな花生けを見せてもらうことが目標のひとつだったのである。

「樽平」を訪れ、店先で来意を告げると、すぐに「ご隠居さん」という着物姿の粹な方が出て来られて、店の向かい側にあるどっしりとした石造の建物に案内してくだされた。そこが掬粹巧芸館であった。

館内には六〇〇点を超える、陶磁器を主とした美術品がすぐ手の届くところに展示されていて、見るものを圧倒する。そのなかをご隠居の軽妙洒脱な解説を楽しみながら進んでいくと、やがて展示室の一番奥に飾られているお目当ての「染付」の前に立った。

花生けは想像以上に大きい。その端正な姿、染付の鮮やかさは眼を見張るばかりだ。私は思わず嘆声をあげた。そんな私を見てご隠居も喜んでくださったのだろう、花生けの説明をされたあと、この大きな焼き物を撫でながら、

「かまわんからそばに寄って、触って、撫でて、それから抱き上げてみなさい」

といわれる。

焼き物は「手にとつて、触つてその感触で学ぶ」というのが最高の勉強法である。私もこれまでいろいろなところで名品を見てきたが、そうしたときその名品を手のひらに乗せてもらったことが少なくない。

だが、この一抱えもある花生けは重要文化財だ。そんな貴重な品を持ちあげて、万が一落としたりしたいへんなことになる。傷をつけたただけでも取り返しがつかない。

そう思つて私がつめらつてしていると、ご隠居さんは、「気にせんでいいから、持ち上げてみなさい」となおも勧めてくださる。

こんなチャンスはめつたにあることではないと思ひ直して、私は花生けに近づき、その滑らかな肌をゆつくりと撫でながら、ドッコイシヨと持ち上げた。

優れた白磁だけがもつ特有のひんやりとした手触り。首から胸元へ広がるふつくらとした張り。そこから腰に向かつてキュツと細くくびれ、さらにどつしりと尻へ向つて膨らんでいく形状。腕に余るずしりとした重みもなんともいえない。

「これが世界的にも貴重な元の染付か！」

身体全体で名品を抱きとめているという満足感が心を踊らせる。これまで手にした多くの名品とはまったく違つた強い刺激が手のひらから、腕から、そして胸や腹から身体全体に染み込んでくる。

「どうです、おわかりでしょうか？ 焼き物はオナゴと同じですがな。抱いてみなければオナゴも焼き物も本当の味はわからないのです」

ご隠居はサラツと言ひ捨てた。



私は花生けをそつと元の場所に下ろして、身体のあちこちに残る花生けの艶やかな肌を感じと重みの余韻を楽しんだ。それがご隠居のいう「オナゴの肌の味」なのかどうかはわからなかったが、焼き物の良さはこうして「触つて、撫でてみる。そしてその感触で覚えるものだ」というご隠居の教えはしっかりと身についた。

この日案内をしてくれた「粋なご隠居」が、巧芸館のコレクションを集められた井上庄七さんその人ではなかったかと気づいたのは、その後大分経つてからだつた。

和倉温泉

浜口 須美子

私たち女子大生四人組は、卒業を記念して、能登半島一周の旅に出た。四人の思い出作りの一ページ目は、大阪駅発「雷鳥」の列車内から始まる。車内狭しとトランプに興じ、大笑いの声を響かせてのスタートであった。

砂の海岸をバスで走る千里ヶ浜、輪島の朝市では、道をタコが歩いていた。半島先端の禄剛崎ののろし灯台は雪に埋もれ、真っ白い灯台から見た日本海は、暗く重たく眼前に広がっていた。能登半島を海岸沿いに辿った旅は、冬の海のドラマを見るようだった。和倉の旅館の宿泊客は私達のグループだけで、商店街の「歓迎」の幕も心なしか色あせて、街は淋しく、ますます北陸の旅のムードを盛り上げてくれる。

冬の海を満喫した旅も金沢で最後、折よく大雪が降り積もり、金沢の街は雪景色である。兼六園は真っ白に塗り込められ、雪の似合う、雪降ればこそその庭園であった。

旅は景色を見てその土地を知るといふ醍醐味がある。そして心に刻まれる人との触れ合いや出会い、また旅をした者同士の心の交流といった「心」が旅の思い出をよきすばらしいものへと導いてくれるものである。

数々の出会いと思い出を胸に、四人は夕闇迫る金沢の地を離れた。卒業記念旅行だから、これから四人別々の道を歩むのだから、四人別々の席に座ろう。

教師となるもの、結婚するもの、企業に就職するもの、それぞれの思いを胸に、暗闇の車窓を見た。窓に映る顔は、旅によって友と心をひとつにできた喜び、そして新たな出発を決意した心の高まりで輝いていた。

その時に書いた作文である。あれから四十五年近くの月日が流れた。

「死ぬまでに一度行ってみたいね」という言葉が、六十路を過ぎた頃から、なんだか重みを持ち始めた。

二人の子供達は結婚し、それぞれに子供が生まれ、親としての任務が一段落したことを記念して、私達夫婦は

和倉温泉「加賀屋」に宿泊する金沢の旅に出た。

私が死ぬまでに一度体験したいと憧れているいくつかの場面がある。

まずは「お隣のお部屋にお布団のご用意ができました」と、仲居さんが告げて出ていく場面。そして、「君にいいものをプレゼントするよ」と、部屋の障子を開けると、燃えるような紅葉。庭の紅葉はもちろん、借景の山々も紅葉している場面。どちらも小説の一場面である。

加賀屋は旅館の老舗。素晴らしいおもてなしと聞き、私の夢を叶えてくれるに相応しいと計画した。寝室はベッドルームで、「お布団の用意が……」の言葉は聞けないと諦めていたが、「和室にお布団をご用意しましょうか？」との仲居さんの言葉に、アラ、私の心の声が聞こえたのかしら？　と思いつながら布団をお願いした。さて、障子を開けたら借景の山々の紅葉とは季節柄無理だけれど、そこは「障子を開けたら、眼前に広がる海」で充分満足した。数々の課題をクリアして、旅の思い出は達成感で満たされた。

和倉の街の七福神めぐりスタンプラリーも、見知らぬ

人達が三々五々に笑顔を交わし、旅での出会いはさわやかだ。館内の美術館巡りも高級感を盛り上げた。

翌日、和倉から金沢に抜け、兼六園は生憎の大雨。雨宿りのつもりで行った二十一世紀美術館は休館日。二日目の不完全燃焼が、夢が叶った前日を余計に思い出深いものとする。帰りの車窓には、辿り着いた今の幸せと、次なる旅への期待に胸を膨らませて、にんまりする私の笑顔が映っていた。

女子大生の卒業旅行が、四十五年近くの月日を経て、夫婦のフルムーン旅行となった。あの時の四人は今も交換ノートを書いている。オンラインの時代に、郵便で送るノートは貴重だ。

「雷鳥」が「サンダーバード」に代わり、かつての私は、心の交流、そして、未来への希望を胸に旅を終えたが、今の私は、「死ぬまでに一度」を合言葉に夢や憧れを現実にして、今を楽しもうとする術を身に着けたのだと思いたい。

東京オリンピック雑感

長谷川 修

「東京2020オリンピック」は、緊急事態宣言のさなか無観客試合となり、自宅禁足で無聊をかこつ筆者には、専らテレビ観戦となった。開催中の二週間余、陸上、水泳、球技と次々にテレビに映るままに観ていた。伝統的な競技だけでなく、スケートボード、スポーツクライミング、空手等、今大会から採用された競技は、ルールや見所も分からず初めはとまどったが、観ているうちに楽しめるようになった。

新規競技では、スケートボードが特に印象に残った。競技は、持ち時間内に選手各自でアピール度を考え、スピードあふれる華麗な技を披露し、速さや高さ、難易度を基に採点される。選手はおおむね十代の若者で、危険に委縮することなく、笑顔で次々と難しい技に挑む。

女子パーク部門で、日本勢は金、銀をとり好成績だっ

たが、筆者には四位に入った十五歳の岡本碧優みずさんの場面が印象深い。世界ランキング一位の岡本は、最終ランに逆転を狙い大技に挑戦するものの転倒し、泣きながら引き揚げた。そこへ各国の選手たちが集まり、彼女の勇気を称え抱き上げ肩車すると、笑顔に囲まれた彼女の顔は泣き笑いに変わった。選手たちは国に関係なく、みんな仲が良い。女子ストリート部門で金メダルに輝いた十三歳の西矢柁えびさんも言った「ライバルはいません。みんな仲間です」と。

彼・彼女らが笑顔で競技を楽しんでいるのを見ると、四半世紀前、水泳の千葉すぎさんが大バッシングに遭ったことが思いだされる。彼女がアトラント大会の代表に選ばれた際に「オリンピックを楽しんでいます」と発言すると、日本水連の幹部はメダルを目標としていないことに不快感を示し、一部マスコミからは税金泥棒との声すら起きた。時代は大きく変わったことを感じる。

伝統競技では、古代オリンピックにその発祥を持つ男子マラソンで、思わぬ出会いがあった。

当日の札幌は朝から気温が高く、脱落者の多い過酷なレースとなった。そんな中、世界記録保持者のケニヤのキプチョゲの二大会連続優勝、大迫傑君の六位入賞は立派である。面白かったのはオランダ、ベルギー、ケニヤの三者による二位争いで、最後まで激しい競争の結果、二、三、四位はそれぞれ二秒の僅差で次々とゴールに入った。不思議だったのは、残り五百米ほどで前に出たオランダの選手が何度も後ろを振り返り、手で合図のようなことをし、またゴール後は二、三位のオランダとベルギーの選手が抱き合って喜んでいた。

翌朝の新聞をみて疑問は氷解する。二人はともにアフリカのソマリア出身で若い時から一緒に練習していたとのこと。ゴール直前での不可解な動きは、後ろを走る友人がメダルに届くよう、計算し激励していたのだ。

柔道を初め多くの競技において、ヨーロッパ勢には旧植民地の出身者やその子女たちが目立った。二重国籍を認める国が多いからだろうか。また、日本でも混血児の大坂なおみさんや笹生優花さんの場合、自ら出場する国を選び、大坂はテニスの日本代表で、笹生はゴルフのフ

イリピン代表で出場した。

このように、オリンピックもグローバル化が進むと、国別のメダル獲得競争や国旗掲揚、国歌吹奏はほとんど意味のないものとなる。IOC（国際オリンピック委員会）ではブランデージ会長時代（一九五二年～七二年）に国旗・国歌不要論が真剣に議論されたが、その後立ち消えとなっている。民族紛争や人種差別が激しさを増す昨今、改めて議論されて良いと思う。

IOCはオリンピックの価値として、三つの理念を掲げている。エクセレンス（卓越）、リスペクト（敬意・尊重）、フレンドシップ（友情）である。一年延期のうえ無観客で開催された東京大会は、当初唱えられた「震災からの復興のシンボル」からも、昨年春の感染拡大から言われた「コロナに打ち克った証」からも、程遠いものとなった。しかし終わってみると、アスリートの鍛えられた技量と若者たちの笑顔が記憶に残る、オリンピックの理念を具現化した大会だった。

「資本主義」って何だ

野瀬 隆平

「新しい資本主義」という言葉をしばしば耳にするが、従来の資本主義とどこが違つてどの様に新しいのか、今一つよく解らない。

これまで、資本主義が持つ矛盾を抱えながらも何とかやって来たが、格差の拡大などその弊害が無視できなくなつてきたのは確かである。

そもそも「資本主義」とは何なのだろうか。十三世紀にローマ教会が利子を認めたことをもつて、資本主義が実質的に成立したと考える学者もいるが、やはり十九世紀の末にマルクスが『資本論』で展開した理論がベースになるのではなからうか。重要な論点の一つを「商品と貨幣」と題するところで次に述べている。

社会にある物やサービス「商品」は、二つの異なった意味の「価値」を持っている。一つは、それを所持している人にとつて、どれほどの利便性があるかという使用

価値。もう一つは、その商品を他の商品と交換しようする場合の商品の値段（価値）である。市場で商品を交換する場合、商品(1)↓貨幣↓商品(2)で売り買いが成立し、そこで本来の目的が達せられ満足していた。ところが、単なる交換の媒体であつた貨幣をより大きな額の貨幣にしたいという欲望が生まれ、それが目的となつて、貨幣(1)↓商品↓貨幣(2)と考えるようになる。

より大きな差額（利潤）を得ようとするこの活動は無限に続き、その為に新たな商品と需要を生み出そうと無理しても拡大を目指す。その商品が社会生活にエッセンシャルなものであればまだ良いが、人間の欲望を掻きたてて際限のない拡張運動を起こすこととなる。これが、地球の環境破壊をもたらしつつある現在進行中の危機の元凶なのである。

社会に必要な富を生み出すために自らは汗水を流すことなく、利潤を得ようとするこの考えは、先述の働かずに利益が得られるという利子の概念と同じで、これこそが資本主義の根底にある問題と云つてよからう。

十六世紀にイギリスで始まったエンクロージャーにより、土地を奪われた人たちが、やむなく都市に出て自分の労働力を「商品」として売るしかなくなった。これが始まりだとするならば、資本主義は今や収奪の対象を人から地球という自然にまで広げて行ったのである。

そんな事を考えているとき、ある興味深いデータが目に留まった。アメリカの調査会社が行ったリサーチの結果である。

「今日ある資本主義は世界にとつて善いことよりも害の方が大きいか」という問いにどう答えるかを調べたもので、その回答には国によってかなりの差がある。

ヨーロッパ大陸の諸国では「害が大きい」と考える人が多いが、英・米や日本では、逆にこのシステムを肯定的に捉える人が多いことが分かる。具体的に云うと、フランスでは70%近くの人が害の方が大きいと考えているが、アメリカでは47%、そして注目すべきは、パーセンテージの一番低いのが日本であり35%と断トツに低いことである。

要するに、資本主義を肯定的に捉えている人たちの割合が世界で最も多いのが日本なのだ。何故なのだろう。

江戸時代から日本には商売について特有ともいえる倫理観があった。例えば、近江商人の「三方良し」の考え方である。今日の言葉で云えば、資本家（株主）だけでなく、会社の従業員や取引先、更には取り巻く社会の皆に利益が行き渡るようにしなければならぬという考えである。

また、日本の資本主義の生みの親とも云われる渋沢栄一は、当初よりこれには負の側面があることを理解していた。故に、その弊害を無くすべく資本家には「私」よりも「公」を大事にする道徳的な規範が求められると、著書『論語と算盤』でも強調している。

日本においては、「新しい」ではなく従来あった資本主義に立ち返れば良いということなのか。

一方、ベストセラーとなった『人新世の資本論』の著者は、資本主義そのものを否定し、そこから脱却しない限り、根本的な問題の解決にはならないと力説しているが、さてどんなものだろうか。

『評伝 福田赳夫』を読む

野上 浩三

『評伝 福田赳夫』を読んだ。福田元首相は私と同じ県出身の代議士であるが、三八歳の年齢差もあって、政治家としての実績を知らなかったためである。

読み始めたなら止められないくらいに面白かった。現在再評価されている渋沢栄一に対して感じるのと同じ感動を覚えた。

首相になる以前の記事については二つのことが強く印象に残っている。

一つは、群馬の田舎の篤農家の生まれであったこと。祖父や両親から近隣の人々を大事にすることや農業の重要性を教えられ、自身も農業の苦労を体験している。

一つは、大蔵省入省の翌年から三年間英仏に派遣され、国際感覚を身に付けたこと。この時にイギリスの二大政党による政治の在り方を見ている。海外経験の重要さはいつの世も変わらない。

首相になってからのことは、記事が豊富過ぎて取り上げるべき事柄の選択が難しい。是非とも挙げておきたいのは、公を大事にした無私無欲の人であったこと、経済・金融・財政のエキスパートであったことである。その他については、序章の最後に西独元首相ヘルムート・シュミット氏の素晴らしい弔辞が載っている。それを引用することで代替させたい。

(引用はじめ) 過去二五年間に多くの人と知り合いましたが、福田赳夫氏は傑出した友人でした。私たちは同じ時期に蔵相をつとめたばかりでなく、のちには二人とも首相になりました。この偶然の一致のおかげで、両国は協力関係を強めることができました。

一九八〇年代前半に、福田氏は、全世界の元国家元首や政府首脳で構成されるOBサミットを創設されました。福田氏はこのサミットの名誉議長でした。OBサミットは毎年会合を開き、各国の政府に対して助言を与えています。急増する世界人口、それを養う必要性、世界平和を維持するために宗教や信条の違いを乗り越えること

……我々は同時代の人々にこのような問題に目を向けるよう訴えてきましたが、それも福田氏が我々を精神的に導いて下さったおかげです。

福田氏は、総理在職中に「福田ドクトリン」を造り、日本が二度と再び軍事大国にならないことを表明されました。そして、アジアの近隣諸国、特に中国との和解と平和的な関係の構築を追及されました。ドイツは——現在のドイツ政府も同様ですが——福田氏が日本国民に奉仕する姿を遠くから見てきました。その他、福田氏の多くの活動を高く評価しています。(引用おわり)

この他に興味を引かれたのは、福田赳夫の造語の旨さである。「世界の中の日本」「昭和元祿」「世界のために二人はある」など、あまた存在する。

「昭和元祿」に関しては、三島由紀夫(平岡公威)との交流が面白く紹介されている。二人は東大卒の大蔵省入省同期である。三島は入省翌年に「役所勤務と物書きは両立し難い」と大蔵省を辞めてしまう。二人が再会したのは、約四〇年後の大蔵省創設一〇〇周年の一九六九

年。この時に、昭和元祿が論じられたという。

三島は前年に『文化防衛論』を発表しており、次のように論じている。

「昭和元祿などというけれども、文化的成果については甚だ心もとない元祿時代である。近松も西鶴も芭蕉もない昭和元祿には、華美な風俗だけが跋扈している。情念は涸れ、強靱なりアリズムは地を払い、詩の深化は顧みられない」

執筆者の一人、長瀬要石氏は「福田も三島も抜群の秀才であった。この二人が揃ってみていたのは、浮かれ調子の繁栄に酔って華美な風俗だけが跋扈する『昭和元祿』のその裏に潜む危機であった」とコメントしている。

この評伝を読んで痛感したのは、福田以降の総理大臣の資質の乏しさと名誉欲の酷さ、誇りの無さである。

岸田新総理には是非とも福田赳夫に近づいて欲しい。

六八〇ページに及ぶ充実した評伝を編集された執筆者と監修者の五百旗頭真氏にも敬意を表したい。

京都の山散歩

新田 由紀子

十一月と年末年始と続けて京都を訪れた。コロナも収まっていたし、やりかけの「京都一周トレイル」を先へ進めるチャンスだし。

数年前に始めた目からウロコの古都の山歩き。「東山」「北山東部」「北山西部」「西山」の四つのコースマップを頼りに、ぐるりと市街を囲む山々を歩いて繋ぐ。寺社の裏から山道を登って古都を見下ろす醍醐味。自然と歴史の両方を味わえる。

で、十一月は「東山コース」の続きから。紅葉には少し早いですが、山の上から下まで微妙な色づきが見られるだろう。山歩きの中日には京都迎賓館見学も入れてある。

まず、伏見稲荷神社のお山巡りからスタート。東福寺裏、泉涌寺門前、新幹線のトンネルを越えて阿弥陀ヶ峰の深い森を歩き、国道一号をくぐって清水山まで。秀吉

廟裏のジメジメと暗い山道を抜けて、明るい林の清水山頂に着き、ホッとしてお弁当を食べた。

翌日は京都市民の高尾山ともいえる大文字山へ。前回 は銀閣寺裏から登ったので、今回は平家打倒の陰謀の地 鹿ヶ谷から。急斜面の谷を行くと、滝修行の遺構や史跡 が現れて、すっぱりと歴史の中にいるようだった。

次の日はトレイルから外れて、秀吉の花見で有名な醍醐山へ。醍醐寺奥から一時間ほどジグザグに登った頂上部は「上醍醐」と呼ばれる。ひっそりと開けた場所に、いくつもの古い伽藍が晩秋の陽を浴びていた。

年末年始には西山と北山コースを繋ごうと計画した。三列シートの女性専用夜行バスとやらを予約したものの、大雪予報に慌てて新幹線に切り替える。

スマホアプリ「YAMAP」の実踏投稿を見ると、ルート上には雪があつて心配になる。真冬の京都で高齢者が山歩きなんてアホか、宿に籠って過ごす方が身の為かな。京都駅に着くと、すっきりと晴れ渡って山々も手招きしている。阪急線の上桂からスタートして苔寺裏の赤茶

けた山道を登る。幸い雪は消えている。松尾大社の裏山まで来ると、古代祭祀跡の磐座や古墳らしき石組みが現れて、思わず興奮。山頂からは比叡山や愛宕山を望み、嵯峨野と渡月橋を眼下にして、嵐山駅に降りた。

翌日は北山の終盤と西山の始めを繋ぐルート。高雄から清滝川沿いを戻り、山越えして嵯峨野から嵐山まで。ところが、バスが周山街道に入るや小雪が舞い始めた。梅ノ尾で降りる頃にはまさかの銀世界。ま、防寒は万全だし、ニット帽にゲイターとストックで装備を固め、まずは高山寺、西明寺、神護寺の三山を巡る。清滝川まで下ると雪はさらに激しく、この先一時間は山と川以外のものはない。持病の白内障で視界が霞み、雪の幕がかかり、メガネは曇る。足元は雪か川か。♪京都オ梅ノ尾高山寺イ雪で遭難女がひとりイ♪では、さまにならない。諦めて街へひと戻り、錦小路で熱燗におでんで暖まっているうちに今年も暮れていった。

翌日元旦の都大路は晴れている。初詣もよかろうかと鞍馬寺の奥の貴船神社へ向かった。街の北端でバスに乗り継ぐやまた雪がちらつく。やられた。京都は魔界だ。

貴船口まで来ると、あたりは水墨画さながら。それはそれで美しいが、ずぼずぼと雪を踏んで参道を行くと、ご神託のように、御神木からどうつと雪が降りかかる。水占いのおみくじをひたす手が凍える。早々に退散して叡山電鉄で街まで戻ると嘘のような青空。宿に帰ると、連泊の中国人女性が鍋で骨付き羊肉を煮込んでいる。「オカエリ。コンバンパ〜テイヨ」と誘うので、夕食用に買い込んだ食材を渡してから、しばしベッドへ。

最終日。早めに帰京するか、のこのこ出かけてまた雪魔にやられるか。思案の末、南ならいいかもと、いざ、名勝大山崎は天王山へ。山崎といえ、秀吉・光秀の天下分け目の合戦の舞台。懇切丁寧な案内板を辿っていくうちに、難なく標高二四七呎の頂上に着いた。向かいには石清水八幡宮の男山。淀川の先には大阪のビル群が霞む。地元客に紛れて名利宝積寺と山崎聖天の初詣もバッチリ済ませた。

京都駅に戻り、再訪を期してビールで打ち上げると、暮れなずむ底冷えのホームから初春賑わう新幹線に乗り込んだ。

無言館と父

西川 知世

無言館

槍穂高連峰日和稻架日和

秋天に頂数へハヶ岳

山峡の刈田を急ぐ日脚かな

鳶一羽高舞ひ千成柿の里

大花野戦没学徒の絵無言

享年の若し自画像露けしや

天窓に秋の木洩れ日資料室

濁酒をまづ酌みてより峡の膳

水音を近々と寄せ夜の外湯

連峰の星と眠れる稲架襖

水引草の緋を奔放に栄螺堂

零れ来し光もろとも葡萄狩

長月のロープウェイに山女

秋の旅ミレーの大き絵に果つる

秋落暉記憶に父の絵の具の香

私の父は戦前に日本画の画家を志していた。祖父の実家は淡路島にあり、祖父の兄弟三人は成人になっても、故郷に帰らず神戸の町に住んでいたそうだ。父は淡路島に住んだこともなく、神戸生まれの母と結婚し、戦前は不在地主の息子として画家になるべく京都に通っていたらしい。絵はことごとく神戸の上空襲で失くしたそうである。父は痩せていたらしく丙種合格だったそうで、兵役にはつかなかったそうである。

戦後の農地改革で、働かなければならない境遇になり、生活のために絵筆を捨てたが、父の部屋には絵筆や画材があった。戦前、母と結婚したころはずっと絵筆を握っていたとよく話していた。

私たちが育つころには、自動車の車体に絵や文字を描く会社を持つことになり、時流にも乗ってなんとか私たちを育てあげてくれた。晩年は若いころの繊細な筆を持つことはなく、趣味で風絵を恃まれて描いていた。楽し

そうであった。絵の具の匂いが部屋にしていた。

二〇一二年にペン俳句の一泊吟行でメンバーと小諸に行った。二日目に解散、有志が志村良知さんの車に便乗して、上田市に足をのばした。その時に無言館という戦没画学生慰霊美術館に案内してもらった。上田市にあるこの美術館は、窪島誠一郎が館主で、美術を専攻した学徒で戦没者の絵を収集、展示している。

その美術館の存在を其時まで知らなかった私は館に一歩入って衝撃を受けた。父と会ったような気がしたこと覚えてる。父の絵や絵の具の匂いや雑多な思い出が蘇った。その感覚はずっと私に付きまといていて、もう一度行ってみたいと思いつつ、すでに十年近く経っていた。

コロナウイルスが収まりかけた九月の中頃、夫と二泊の旅行に行こうという話を持ち上がった。私が行きたいところは決まっている。是非にも夫と無言館に行きたかった。無言館に行くために一泊目を別所温泉に宿をとっ

た。大勢の人が押し寄せているとも思えなかった。午後の日差しのなか、十年前と同じようにコンクリート造りの美術館が静かにあった。訪問者は私たちのほかに四五人である。人声もしなかった。存分に時間をかけて絵を見た。十年近く前に来た時と同じように父の息遣いに似た気配を感じながら絵の前に立ち、二つの建物を回り終ったころは日が傾いていた。着いた別所温泉は松茸にはまだ早かったが湯も地酒も申し分なかった。

翌日は、晴天の駒ヶ岳のロープウェイに遊び、連峰の尾根を見ながら山梨県側に足を伸ばし、一泊して山梨美術館で旅を終えた。絵画鑑賞三昧の旅である。

このコロナウイルス騒動を何年か経って思い出すとき、ウイルス騒動より、この旅行を思い出すことだろう。文頭の作品はこの旅行の記念に作った連作である。

悠悠閑閑

西川 武彦

コロナ禍で閉じ込められて一年近く経ちました。そう
でなくても在宅時間が増えている八十路半ばの筆者には
ラストレーションがたまるばかりです。

パソコンでメールを交換する、ニュースなどに目を通
す、文章を綴る等々も、少しやりすぎれば、それでも
でも衰えている心身に響きまますから、悲しい。

で、ペン川柳では、「メール打つ 恋でないのに 手
が震え」(酔雅)などと詠んでいます。

それだけではありません。「八十路入り 打ったメー
ルをすぐ忘れ」というわけで、同じ内容のメールを同じ
相手に二度送ることもあります。良くしたもので、相手
も同じ状況だと、また返事が来ることもあるから可笑し
い……。

悠悠自適とはいえませんが、それに代わる、似たよ

うな言葉を辞書で探ると、標題の四文字が見つかりまし
た。その意味は、三省堂国語辞典によれば、「ゆっくり
かまえているようす」とあります。そう言われると、そ
のとおりかもしれませんが、どうもしっくりしない感じ
は拭えません。

とはいえ、年金は定期的に振り込まれて、借金もな
く、まずは生活に窮することはありません。かなり年下
の「老妻」が家事を仕切ってくれており、足腰も歳の割
にはしつかりしているようなので、これ以上を望むこと
は分不相応でありましょう。

「卒サラ后 命じる役は老妻に」という状況ですが、
「命じても 耳が遠くて 空まわり」と詠んで、自ら慰
めている有様です。

飲み会が消え、もっぱら晩酌が欠かせませんが、飲め
ない老女相手では、酔いの進むのが早くなります。黙々
と杯を重ねるうちに酔っぱらいます。

で、「コロナ禍で 悪酔い重ね 呆け進み」という状
況ですから情けない。

「あら、またこぼしたわヨ、ダメじゃない」と、メゾプラノが響きます。酔っぱらって、追いつてられるようにベッドに倒れ込むのが、夜八時前です。

数時間経ち、老妻が、距離を置いて隣り合わせた別のベッドに潜り込む頃、なにか怖い夢を見たのか大きな声で絶叫するようです。

「悪い夢 八十路の今も つきまとい」というわけで、また叱られます。

悠々自適ならぬ悠悠閑閑な毎日ですが、いつまで続くやら…、と首を傾げることもあるこの頃ではあります。



わが会社人生

新井 良侑

高度成長の時代、会社生活が人生そのもののような社員の時代に、会社は生活の糧を得る場所と割り切つて、ややこしい人付き合いはできるだけ避け、気ままな会社生活三十二年余りを過ごしてきた。退職してからも二十一年弱が過ぎるのに、忘れられない思い出が尽きないのは驚きである。

研究所に配属されたら、直ぐに研究補助員がついた。年齢はわたしより二十歳年上の五十才ほどで、周りから「和吉さん」と呼ばれていた。工場のある新潟県出身の実直で温厚な人で、研究所のもろもろのことをよく知っていたので、頼りになった。

しかしながら、定年退職が数年後に迫っており、もう評価も気にならないらしく、残された期間を無難に過ごそうという気持ちがみえみえだった。人を使った経験が

ないわたしには、かえって研究の足手まといになりそう
で、正直なところ気が重かった。実際に、わたしのこと
を何かと気遣つてくれ、いろいろ配慮してくれてありが
たいのだが、「気を使うより、頭を使え」というのがわ
たしの流儀なので、余計な気遣いが煩わしかった。なん
とかやる気を出してもらおうと腐心しているうちに、わ
たしの気持ちが少し通じるようになったのか、だんだん
と仕事に対しても前向きになってくれた。三か月ほどが
過ぎるころには、「お互いに頑張つて、良い成績を取り
ましょう」と言い交わすようになった。

ある時、いつもは翌朝に実験結果の報告があるのに、
三日たつても報告がない。こちらから結果を聞いたら、
しょんぼりした顔で、「いくらやつても、良い結果が出
ないですよ」とすまなそうに言う。「それでいいんです
よ。うまく行かないことの確認実験ですから」というと、
びっくりした顔で、「えっ、そんな実験は初めて！こ
れまで良い結果を報告すると研究員が喜ぶので、今回も
とにかく良い結果を出さなくてはと思って、何度も繰り返
返していたのです」と。

お互いの気心が通じ合うようになるにしたがって、わたしが細かく指示をしなくても、自発的に工夫しながら実験をするようになった。期末には、予想以上の成果があがったので、成績評価もこれまでできなかった加点をすることができた。「今期は頑張ってくれたので、成績が少し改善できましたよ」と言うと、まんざらでもない顔であった。

ところが、夏季のボーナス支給日の翌日に出勤したら、和吉さんが休憩場所の椅子にどっかりと腰をおろし、昨日までとは別人のように、うわの空でぷかりぷかりと煙草をふかしていた。側に座ると、「もういいんですよ。もういいですよ」と、つぶやくようにわたしに言う。「どうしたの?」と聞くと、「もういいですよ、わたしは」と言うだけ。ふっと、「ボーナスが期待外れだったのかな」という思いが浮かんだ。夏季のボーナスは旧賃金基準なので、新賃金基準で計算すると成績評価が低くなる。勘違いしていることに気づいたので、「和吉さん、夏のボーナス基準は旧賃金だよ」と言いかけると、「あつ、そうだ!」と言って、急に目を輝かせ、慌てて手にしていた煙草を

灰皿に押し付けて、飛ぶように実験室に消えていった。

研究所に勤め始めた頃、同僚たちから良く言われた言葉がある。それは「話す前に三つ数えろと言うが、これは普通の人のことで、新井さんは、十まで数えた方がいいですよ」である。しかし、わたしは数を数えても数えなくても変わらないので、話し方を変えることなくずっと過ごしてきた。

会社時代の最後のころのある日、顧客先に同行したわたしより二十才ほど年下の同僚が、「新井さん、話があるんですけど。怒らないで聞いてくれますか?」と言う。「怒らないよ。何でも言いなよ」と言うと、「新井さんは、人に何かを聞かれたら、すぐ答えてしまいますが、もともとつたいぶって言った方がいいと思います。わたしは分かっているからいいですけど、知らない人には、新井さんが口から出まかせを言うるように聞こえます。もつたいぶっていいですよ」と忠告され、絶句した。

縁は異なるものと言うが、生活の糧を得るために勤めた会社での経験が、わたしの人生そのものであったことに思い至った。

八十二歳の回想、そして今を思う

安藤 晃二

「お目出とうさん」。四十年前、父が八十歳で他界した時に上司から言われた。その親の歳を二歳も超え、随分長生きしたと喜びが湧く。終戦時に五歳児の人生は、五歳上の「軍国少年」の兄の訓育の下で始まった。

十二月のTVは「真珠湾」一辺倒。三船敏郎の名優振りから「軍艦マーチ」へ。それはこの世で聴いた最初の音楽として幼児の記憶の底で響く。音楽に誘われ、夕刻の「大戦果」のラジオへ殺到する。時が流れて七十年代、ドイツでビアホールへ。着席と同時にバンドの指揮者が笑顔で、なんと軍艦マーチの大音響と共にサインを送る。ここぞナチスゆかりのミュンヘン。現代史が思い浮かび妙に納得する。両国とも敗戦により全体主義的体制と訣別したが、大戦時のトゲが心を痛める。我が世代の幼稚園児は防空壕で息を潜めた。小一で戦後教育が始ま

る。朝礼でくずる生徒を全校生の前で往復ビンタという、戦時の名残りの先生も居たが、大方は豹変し優しくなった。四年間の習字教育撤廃が我が世代には悔やまれる。

六十年安保の大学三年生、全員が反政府運動に繰り出した。デモの東大生が一人死亡。しかし、国会では「安保改定」は強行採決から自然承認で終わる。時代の必然であったのだろうか。運動は当面尾を引かず、時代の子供達は静まった。

その後商社で米国駐在、彼の国の主導力に打ちのめされる。七十一年八月十五日、ニクソンショックである。ドルの金との兌換停止、円・ドル為替相場のフロート。全米の購買部長が休暇から呼び戻された。米国への輸入に課徴金十五%課税というオマケが付いた。その負担責任をめぐり多くの顧客との交渉では、「大統領が悪い、いや日本のせいだ」と紛糾し、日本側に損失が重なる。年表の裏側で泣いた人々の物語が埋もれる。

その十四年後のプラザ合意然り。米国は国益優先の通

貨政策に積極性を發揮する。プラザホテルからのライブを見た。記者達にヘッドホンを促す蔵相の、何故か清々しい笑顔が、不可解ながら印象に残る。二百五十円のドルが百五十円となるローラーコースターに乗る超円高は更に七十円台を窺う高進となる。米国は課題のインフレを抑え、日本との貿易摩擦の是正が実現する。日銀の低金利政策下で土地神話が狂乱のバブルを招来する。その後健気な輸出企業の努力が負の要因に耐え、円高基調が続く。日本は世界市場開拓に余念がなく、グローバルに地歩を固めた。しかし、今日では「反グローバルリズム」の筵旗じよんがたが毎回の国際会議場を取り巻く現実がある。

中国の台頭ぶりを見る。天安門事件を乗り切った鄧小平の『改革開放』政策の下、市場経済の展開が進む。私 は九十年代後半、中国を足繁く訪問した。知り合いの中国人の母親が建築家で、上海で行政へのアプローチを懇切に助けてくれた。プロの差配と、歴史の重みを感じさせるその人の人間性の素晴らしさに動かされた。深みのある国である。中国の先端技術はいま、米国と肩を並べ、

その開発競争にしのぎを削る。

習近平政権は、香港を力で押さえ、ウイグルの人権問題で西側と対立する。台中関係の先鋭化が米中間のこの上ない緊張要因だ。明けて二〇二二年、早や三発の実験弾道弾が朝鮮半島の隣国から日本海へ飛来する。地政学的リスクの真つただ中、日本の安全保障は米国に大きく依存、安閑としては居られない。昨年、イージスアショア導入頓挫の後、「敵基地攻撃能力」の議論が温められていると聞く。「専守防衛」との両立が確保され得るか、論点となる事は想像に難くない。斯かる戦術論はさて置き、憲法問題をも視野に入れた、この国の防衛の枠組は斯くあるべきと根本を見直すべき国民的議論が急がれる。同時に、古い先が短い今、一有権者として、また機会を得て、その議論には鋭意参加したい、戦前からの歴史のうねりを体験し尚意気軒昂な先輩世代と共に。湾岸戦争時、ブッシュ大統領よりの日本の自衛隊派兵要求を断固拒否した海部元首相の訃報が、奇しくも、忍び寄る事態へのウエークアップコールとなった。

ホモ・サピエンスとして

池田 隆

山荘での夜、薪ストーブの火に当たり今朝届いたばかりの本を取り出す。生物人類学者リチャード・ランガム著（依田卓巳訳）『火の賜物』（二〇一〇年、NTT出版）である。まさに今、厳寒の季節にこの火を唯一の暖房源として心地よく過ごしている。副題に「ヒトは料理で進化した」。昨今もっぱら調理の腕を磨き、妻に喜ばれているところなので、ますますわが意を得る。

著者は本の主題となる仮説を先ず提示する。ホモ・サピエンス（私たち現生人類）が出現する以前のホモ属（ヒト）の脳はすでに肥大化し、顎は小さく、消化器官が短くなっていった。火を料理に使っていた証拠である。高カロリーの肉や固い植物を加熱し、効率よく体内で消化し、脳に回せるエネルギーを数倍にも増やしたからだ。同時に獲物を追うための走行持久力や腕の筋力も強くなった。食物の採取や咀嚼の時間が減り、余裕が生れる。

ホモ属の一人がたまたま山火事で焼死した動物の肉を食べ、加熱の効果を知ったのが発端であろう。焼けた肉を食べた動物は他にもいただろうが、ホモ属のみが火をおこす術を心得ていたのだ。このような仮説を生物学や考古学の立場から立証していく。

先に歴史学者ユヴァル・ノア・ハラリ著（柴田裕之訳）『サピエンス全史』（二〇一六年、河出書房）を興味深く読んだ。二十万年に及ぶホモ・サピエンスの歴史のなかで大きなエポックとして、七万年前の認知革命、一万二千年前の農業革命、四千年前から始まった人類統一、五百年前の科学革命、二百年前の産業革命を取り上げる。

認知革命で虚構の概念や言語を考え出し、神や祖先を敬い、好奇心を高め、百人規模の集団行動を取るようになった。ランガム説に従えば『火の賜物』がその革命を可能にしていたことになる。

農業革命で安定した食料確保と定住化が進み、文字が発明され、世代間の経験伝承が容易となった。一方で生産物の蓄積が可能になったことから貧富の格差や階層社会が生じた。だがハラリは「農業革命でヒトは小麦の奴

隷になった」との逆の見方を述べる。「平凡な野生の植物の一種にすぎなかった小麦がヒトを朝から晩まで働かせることで世界各地へと繁殖していった」というのだ。

翻ってホモ・サピエンスの一人である私自身に、思いは及んでいく。八十年以上も生き、子三人孫五人に恵まれ、生物として個体と種の保存を無事に果たした。

ホモ属最大の特徴である直立二足歩行については、足元に気を使いながらも一日八千歩の日課をこなしている。自ら作った道具を使うというホモ属の特徴についても、独自に工夫した調度家具を作り、DIYを楽しんでいる。

加熱料理が認知革命を生み出したという仮説からは大切なヒントを得た。現在の最大の心配事は脳が収縮し認知症に陥ることだ。食事の嗜好が刺身やサラダなどあっさり系になってきている。ハム作りなど、いろいろな肉料理にも挑戦してみよう。

ストープに入れておいた薩摩芋がホカホカに焼けてきた。芋の太く固かった根も火のおかげで脳へのエネルギー供給に役立つことだろう。おう美味い！

三十坪の畑を借りて一昨年から生まれて初めての農作業に勤しんでいる。農業革命というには大袈裟だが、五月から九月にかけてはトマトやナスの下僕となって、ご主人様が花を咲かせ、沢山の大きな実をつけるようにお任せしよう。太陽や大地の恵みを実感しながら。

農業革命を受けて考え出された文字や文筆については、OBペンクラブでのエッセイ書きを今後も続け、恩恵を享受していくつもり。

人類統一の主体である国家については、その存在意義を根本から問い質してみたい。統一の主要成果である貨幣は、私にとり一生縁遠い存在だったと諦める。

科学革命、産業革命の更なる促進と後始末が渦巻いた二十世紀に人生の大半を過ごしてきた。発電効率を上げることにはやや貢献したが、それが皮肉にも石炭火力への業界や政府の執着心を高めることになってしまった。自身の功罪は相半ば、自らの出る幕はもうない。

輪廻転生、そろそろ次は何に生まれ変わるかを考えておこう。ホモ・サピエンスは核や温暖化で絶滅危惧種だ。最も持続可能な生物種になりたいものだ。

スコットランドのお産事情

池松 孝子

数年前の事、エジンバラの大学で研究職を得て赴任していた娘の初めての出産に付き添うべくスコットランドに向かう準備をしていた。出産予定日から計算して一か月の滞在予定であった。準備に慌ただしくしていた時、婿から「予定より一週間早く今朝、女の子が生まれました」と連絡が入った。母子ともに元氣との知らせに安堵したものの少々張りつめていた気が抜けたような気分になった。

送られてきた赤ちゃんの写真を見ると、産院のイニシヤルの入ったバスタオルに包まれて眠っている。この世に出てくるといふ人生最初の大仕事を終えて安心しきっているように見える。

成田に向かう日の早朝、母子揃って退院し、自宅で休んでいるという連絡。異国でひとり出産に臨んだ娘はどんなに心細かったろう、一刻も早く飛んで行って労って

やりたいと胸が張り裂けそうに苦しかった。

エジンバラへの到着はかなり遅れたが婿が車で迎えに来てくれていた。空港を出ると、九月のエジンバラの空は高く空気が清々しい。数分も走ると、見渡す限り緑の丘に牧場が広がる。傾斜して広がる緑の中に白と黒のツートンカラーの羊が、また隣に黒い牛がただのんびりと草を食んでいる。三年ぶりの景色がうれしい。

娘のフラットに着くや荷物を車に残したまま一気に階段を駆け上がり部屋に飛び込んだ。娘は今か今かと、玄関に立って待っていた。そして娘の腕の中の小さな小さな孫娘と対面した。彼女は「世はすべてこともなし」と穏やかに眠っていた。

それから一か月の家政婦生活が始まった。当時のブレア首相の例を出すまでもなく、出産後の二週間は婿も「父親産休」である。彼は慣れない手つきで沐浴させたり、おむつを替えたり、ミルクを飲ませたりと懸命に「新米パパ」をやっている。

そのうち、日本にはない素晴らしいシステムがあることを知った。それは助産婦さんの家庭訪問である。その

地域を担当している助産婦さん、看護婦さんが退院当日から新生児と産後のママの健康管理などで家庭訪問をしてくれるというもの。最初は二日おきくらいだったろうか。新生児用の体重計、もちろんパソコン持参で訪ねてくる。母子の妊娠中から出産、退院するまでのすべてのデータが入っている。母のような落ち着いたまなざしで色々情報を聞き取り、記録する。母乳、ミルクの量、回数、赤ちゃんの便、泣き声、全身の肌の状態など、細部にわたって観察する。

産後のママの精神状態も細かく観察し、具体的にひとつひとつの質問に丁寧に答え、アドバイスしてくれ励ましてくれる。

さらに自宅近くで同じころ出産した母子を紹介してくれる。教会、集会所で新生児を対象にした催しに参加するよう情報を持ってきてくれる。

例えば、近所で出産後のママのためのヨガ教室に赤ちゃんを連れて参加し、ママ友を作るようにと。またベビーカー、洋服、おもちゃなどママ友同士で貸し借りして使うのが普通なので、そういったグループに入りやすく

するような配慮もあった。出産後の母子を孤立させないような工夫が自治体、地域でよく考えられていると感じた。

日本の特に都会で暮らす新米ママがアパートでひとり子育てをしていたり、そのために起きる悲しいニュースを見聞きすることもあった。実家も遠く、友人もない母子にこうした助産婦さんの家庭訪問をぜひ日本でも取り入れてほしいと思ったものだ。

日本への帰国直前、二か月後からお世話になることになっている保育園を訪ねた。なんとご縁のありそうな「チェリーブロッサム」という名の保育園である。明るい大柄な保母さんが、腰に赤ちゃんを載せて対応してくださった。娘の腕の中で眠っている孫娘に「はい、待ってますよ。早くいらっしやいね」と声をかけてくださった。この保母さんのおおらかな笑顔、明るい声に安心して帰国したのだった。

八十路を前に

市川 忠夫

後期高齢者の仲間入りする一年程前、孫の誕生があり、同時に超高齢者（九〇歳以上）支援が必要になりました。人生の両極の人たちと深く関わることになったのです。ところが、幼児や超高齢者との交流であたふたしているうちに、自分の歳をすっかり忘れてしまいました。

一昨年秋、突然心臓病に襲われ、大手術を受けました。「これでこの世とお別れか」と思いましたが、幸いにも難事を凌ぐことができました。

昨年秋、「悠遊」の今号特集テーマ候補に「八十路前後」が上がっていることを知りました。今年の夏には私も大台に乗ります。久しぶりに近くの本屋をのぞくと、「終活」についての本が平積みになっています。

そうだ、私も「終活」に取り組まなければ、と気づいた訳です。

常用の古い電子辞書には、「就活」は載っていますが、「終活」は載っていません。「しゅうかつ」と聞くと、若い人は「就活」を浮べ、老いた人は「終活」を思うのだと気づき、妙に得心がきました。「終活」というと、延命処置、葬儀やお墓、遺言等々、人生の終りに向けての仕度が浮かびます。しかし、そのような「終活」はひそやかに進めればよいと感じます。私は、「就活」の気持ちで、「終活」に思いを巡らすことにしました。

「就活」は、これまでの勉強や経験を活かせる、未来の新しい働き場を探す活動です。私は、大上段に振りかぶって、幼児の未来に役立ちたいと思ったのです。

私たちの前途には難問が山積していますが、最大の問題は「食住」の確保でしょう。今のままで文明が進むと二〇三〇年や二〇五〇年には、間違いなく大変なことになるってしまいます。しかし、今保育園や幼稚園の庭で楽しく遊んでいる幼児たちは、二〇三〇年にはまだ小学生、二〇五〇年でもまだ三〇歳前後なのです。

今の「自然」↓大量生産↓大量消費↓大量廃棄↓啞然」

の自然破壊サイクルを、これからは自然の摂理に則った「自然↓加工↓活用↓復元↓自然」の自然回帰サイクルに戻さなければなりません。さて、どうしましょう？

自然破壊サイクルから抜け出すためには、今の物質文明を大きく見直さなければなりません。私の生きてきた時代は、産業革命以来の物質文明の頂点（最終期）と情報文明の始点（黎明期）が重なった時代です。これから、情報文明の原動力である様々な情報技術を駆使して、物質文明の原動力である科学技術を融合制御しなければなりません。ところが今も、情報技術は物質文明の一助のような位置付けです。どうしてこうなるのでしょうか？

それは、人々が社会の仕組みの要は「政治経済」だと思っているからです。実は、今の「政治経済」は物質文明にしか関心を向けていないのです。

思い出してみると、私が子供の頃、祖母がよく「仏様の教え」を話してくれました。そこには、物質やお金のよくな卑俗的なものとは異なった何かがあったのです。

地球の上に永続的な社会を作るためには、「政治経済」という柱と、もう一つの柱が必要なのです。もう一つの柱は「○○◇◇」です。○○や◇◇には、宗教、哲学、道徳、正義、幸福、等々の言葉の一部が当てはまるでしょう。今注目されているAIやIoT等は、狭義の情報技術です。「○○◇◇」に関心を向けた、もう一つの情報技術にも取り組まないと、今の文明社会から抜け出すことは難しいと感じます。

終戦直後の「衣食住」不足の時代に物心ついて以来、ずっと物質の時代を歩んできました。コロナ禍の今は、「衣食住」が大事、と言う人もいます。しかし、幼児の未来を想うと、本当は「意食住」が大事なのではないでしょうか。「意」は私たちの「意識」や「意志」です。

こんなことを思い浮かべていると、「さてこれから先、私は何をすればよいのだろうか？」とハッとしました。しかし、「八十路」の門をくぐるまで、まだ半年程あることに気がつくくと、なぜかホッとします。

世界あれこれ

稲宮 健一

戦後十年、少し世の中が落ち着いてきた一九五五年京大農学部の本原均団長のもと、多くの分野の専門家が参加した学術探検隊がアフガニスタン、パキスタン、インドおよびイランへ調査研究に行った。この中に梅棹忠夫がいた。梅棹はこの体験を通じて、ユーラシア大陸全般に亘る視野の広い人類史を披露した。

そこで、梅棹はユーラシア大陸を俯瞰して、文化の類似性に基づき、大陸の両端にある日本と西欧を第一地帯、それに挟まれる広大な地域を第二地帯と分類した。第一地域の東側の日本は高度な資本主義国であり、西側の英仏独伊も同様である。両者の共通点として、この地域は産業革命の洗礼を受ける前に長い封建制度の社会があり、近代の自治とは異なるものの、自ら自身を治めた安定した社会があった。第二地域では、ソ連、中國、インド、

ユーゴスラビアからモロッコまで、様々な国がある。そして、第二次世界大戦以降に独立した国が多くあり、過去三〇年間に多くの革命を経験したが、革命によって得られるのは概ね独裁体制であり、それ以前は専制君主制か植民地体制である。高度資本主義に達した国は一つも無い。これらの考え方をまとめて「文明の生態史観」で発表したのが一九六〇年代である。

それから現在まで半世紀近く経ち、この間に起きた世界を変えた事柄は一九八九年のベルリンの壁の崩壊と、二〇〇一年の同時多発テロであった。前者は東西冷戦の終結であり、後者は西側社会とイスラム原理主義の社会の争いが顕在化した始まりであった。前者の意義をF・フクシマは『歴史の終わり』で新しい社会の幕開けと謳いあげたが、彼が描いたようにはその後の歴史は動かなかった。一方後者の動向は現在も続いており、悩ましい状態である。梅棹はこのイスラム原理主義の社会の生活域の乾燥地帯はなぜ破壊的であり、暴力的なのかという感想を述べている。

かつての秀作、黒澤明監督の「七人の侍」を思い出す。収穫の頃の村に無頼な盗賊集団が豊穡の実りを奪い取るうと押し寄せてくる。村人は三船敏郎扮するお雇い浪人を頼りに盗賊共をことごとく追い払う。荒くれの活劇が多くの観衆を魅了した。豊穡の実りが農耕の汗水の結晶であるから映画は共感を呼ぶが、これが広大な草原の牧草と羊の群れであった場合はどうだろうか。十三世紀のモンゴル帝国はユーラシアの広大な平原を席卷したが、遊牧文化は乾燥地帯の生き方として受け継がれているように思われる。インド以西、アラブ諸国は石油産出以外に豊かな耕作の情景は見受けられない。

昨年、タリバンがアフガニスタンを支配し政治権力を握った。タリバンの兵士の一団がトラックに乗っている映像が映っている。まさに、かつて草原で馬に乗り弓矢を構えている姿が、馬がトラックに弓矢が銃に代わったように思える。農耕の民が長い時間をかけ、近代化の基礎となる文明の蓄積を行ってきた文化を彼らも習得しない限り、銃口で近代文明を獲得することはできない。彼らが学ぶべき姿は道半ばで命を落とした中村哲医師によ

って示されている。中村は医療奉仕だけでは彼らの社会を変えられないとして、不毛の地に水路を開き、耕作の実りを実感できる社会改革を示した。それが社会に定着する前に消滅させられたのが残念である。

緑のない荒野に救済を待つ難民の姿には心が痛む。現在には国連の支援が行き渡ることを祈るしかない。しかし、この地帯は荒野でも太陽光は豊かだ。長い目で見た時これは天から与えられた資源だと思う。エネルギーは豊かにある。後は水だ。エネルギーがあるから海水から普通の水が得られる。また、砂漠の緑化を提案している人もいる。世界には極寒の地でも生活している人々もいる。

それに対して、豊かなエネルギーが獲得できる地域で、普通の生活ができるはずだ。



八十になったら

上田 信隆

私は昨年五月で八十になった。私の父は六十三でこの世を去ったことを考えれば、まあまあなんとか生きてきたことになる。人はだんだん年をとるにつれ、より長く生きたいという欲が出てくる。私も最近九十と言わず百まで生きられるような気がしている。なぜかというと五年ほど前から毎月かかりつけの医者に面倒をみてもらい、気がかりな体の欠陥を克服しつつあるためか、若干の自信らしきものが出てきた。健康を自分でコントロールできれば、不慮の事故は別にして寿命の限り長く生きることができると気がする。

大事なことは、全てのことに通じる問題だが、いかに目標に向かって自分をコントロールできるかにあるような気がしてならない。コントロールとは自分の限界を知ることである。

趣味一つにしても自分の実力を見極めて、そこそこ楽

しむことが大切だと思う。世の中に出て自分がどうであったかを考えれば私は自分を過大評価してきたのかもしれない。若いときには情熱なくして生活をするとはやや悲劇であるが、多分に自分の実力以上の結果を望むと結果的には期待に反することが多いと思われる。

自分を律すれば済むほど世の中は甘くない。それは世の営みは多くの人との付き合いをなくしてはなりたたないからである。特に親戚縁者のかかわりは自分の思うほど単純ではない。近ければ近いほど厄介なものが多い。考えるにこれもコントロールのしづらいことが原因のひとつだと私は思っている。特に情という人間関係はコントロールのできないことが多い。

一例をあげれば、同じ家族のなかでも少々の好き嫌いがでてくるのはしかたないことである。等しく人を愛することは結構難しい。そこで私は最近できるだけ等しく家族を愛するように努力をしている。多分にその結果は吉と出ているように思う。

楽しく長生きをするのはそう簡単ではない。健康問題にしても、人との付き合いにしてもそれなりの努力を要

求されるのである。この種の努力は、世の中からの課税なのかもしれない。税金は好むと好まざると払い続けなければならぬ。よく父がなぜ俺はこんなに家のことで苦勞をしなければならぬのかと言っていたのを想い出す。父の齡が六十三であつたからそれも致し方ないと思うが、もう少し長生きをしていたならそんなボヤキは口にしなかつたと思う。

さて、これからの私にとって大事なものは、どうすれば楽しく余命を過ごすかにある。税金を払いながらこれから先にあるであろう負債をできるだけ取り払うことをまづしたい。

ひとつは無論健康問題である。この克服はまず今の自分の体の状態で弱点の箇所を直せる範囲で潰していくことが必要だ。私は今歯医者に通っている。正直齒を治療するのは実に億劫なことであるが、思い切つて門をたたけばそれ程のものではない。機器の不安な音との付き合いはおすすめではないが、今までさばつた付けを払うと思えば仕方ないことである。次に耳鼻咽喉科にお世話にならうと思つてゐる。

あと一つの厄介は人とのかわりをこれからどうするかである。自分だけのペースに持ち込まないのが人との付き合いだと思ふ。もし自分のペースにするのなら多分に秀でた才能があるか、もつて生まれた人格が備わつてゐるかであるが、そのような人は一握りだと思ふ。自分たちのように多くの凡人は、果実を手にするにはやはり人一倍の努力をしなければならぬし、この世はその努力を要求し続けるだろう。大概の人はこの努力に嫌気がさしたり、それから身を引くようになるものだ。

努力することは才能だとよく言われる。スポーツの世界でも、練習は嘘をつかないと言われる。多分私たちは長生きするためには、それなりの努力を要求される。それを私はこの世から課せられた税金と考へている。

よく縁の下の力持ちということを聞く。街を歩いていれば熱心に塵を片づける人に出会う。町会のお祭りに精をだす人も多い。同窓会やクラス会を楽しむ若者も少なくない。人を楽しみますことと同時に自分を楽しむことも立派な行動だと思ふ。

人に迷惑をかけぬよう振る舞うことから始めよう。

乗り鉄一人旅の至福

内田 満夫

いつかやろうと思っていた「乗り鉄」旅が遂に実現した。昨年の秋口から年末までの期間、JR西日本が「どこでもきっぷ」を発売していたのである。三日間有効で、管内の新幹線全車種、在来線特急が乗り放題だ。料金も破格の二万二千円。「青春18きっぷ」とは一味違った乗り鉄が楽しめそうである。

JR西日本のエリアは広大である。北は新潟県の北陸新幹線上越妙高、西は福岡県の博多、南は和歌山県の新宮。これをすべてカバーしたい。理由^{わけ}あって山陰本線も外せない。

さっそく時刻表と首っ引きで旅程のプランにとりかかったが、観光の余裕などまったくないことが判明する。早朝から夕刻まで一日に十二時間前後、ひたすら列車を乗り継ぐだけだ。

宿泊地は、現役会社員の頃に仕事の拠点だった小倉と

新山口（旧駅名小郡）に決めた。三十年前の記憶にある街や駅周辺の変貌ぶりを見たかったし、元同僚や知り合いと再会したいとの思惑もあった。

アルバイト勤務の合間をぬって、十二月二十三日出発の二泊三日の旅程を組んだ。大寒波襲来の予報もあり天候が心配だったが、何とか持ちこたえそうだった。

第一日。六時過ぎの始発で新神戸を出発。北陸本線特急、北陸新幹線を乗り継いで十時半には上越妙高に到着。二十分の待ち合わせでとって返す。

再び特急と山陽新幹線を乗り継いで、十八時に博多の一駅手前の小倉に到着。元同僚S氏と合流し、駅構内の居酒屋で昔話に花を咲かす。彼は耳が聞こえにくくなったと嘆くが、何と頭髪は羨ましいほどふさふさのまままだ。

第二日。朝、懐かしい駅周辺を一回りしたあと、小倉から新幹線でフリーエリア西端の博多までいったん戻って、折り返す。岡山で十一時過ぎの特急に乗り換え山陰へ抜ける。

鳥取で十三時過ぎの特急にふたたび乗り換える。この「スーパードキ」、たったの二両編成ながら、私が再会を夢見てやまない女神のいる終着駅・新山口を目ざして、五時間半の長丁場、山陰本線をひた走る。

女神というのは、山口勤務時代に工場での秘書役を務めてくれていた、才色兼備の地元N女史である。当時アラフォーだったが、今もその色香はまったく衰えていないはずだとなぜか確信している。今回は再会の絶好のチャンスだったのだが、無残な禿頭を見られたくない気持ちに先に立って、声をかけるのをためらっていた。列車に乗ってからメールを打ったが、時すでに遅しだったようだ。

第三日。女神に会えぬ「失意」のうちに、早朝新山口を発つ。九時前、出発点の新神戸を通過。新大阪で特急に乗り換え、南紀へ向かう。

十四時前新宮着。小一時間、駅近くを散策して折り返す。あとは自然体で列車の走るがままに身を任せる。新大阪で乗り換えると一駅で新神戸だ。二十時過ぎには帰

宅した。

三日間の戦績は、乗車距離三、四三四キロ、乗車運賃八六、一三〇円相当。日本列島を北から南までの距離を乗り鉄したことになる。料金二万二千円の四倍分の乗車ができ、お得感いっぱいで大満足だ。

旅を終わっていつも感じる疲労感が、今回はまったくないことに気づいた。車窓に見入るでもなく、回想に浸るでもない、一人旅ならではの自在さ。高速で走る空間に身を置きながら、思い切りゆったりした時間をくつろぐ至福。現役の頃の慌しい移動とも、かつて楽しんだ列車旅とも違う、鉄道旅の新しいかたちを見つけたのかも。しれない。

三日間好天だった。ツアーを終えた翌日から寒波が襲来し、北陸へ抜ける琵琶湖一帯も大雪となって連休も発生した。誰かの言葉ではないが、「我が去りしあとに大雪は来たれ」の結果とはなったのである。

「神」縄文祈りから 廃仏毀釈 薩摩藩を経て

大越 浩平

一万六千五百年前、原日本人は無文土器を作り、採取狩猟漁撈の移動生活から定住化が始まった。大森貝塚で発見された土器に縄文文様が見られたことから、弥生時代までの約一万年を一括して縄文時代と名づけ、人々を縄文人とした。

温暖な気候に縄文文化は広がるが、再び氷河期を経るから、温暖化が始まり、縄文海進があり、関東平野は霞ヶ浦あたりまで海だった。また鬼界カルデラの大爆発により、九州から近畿辺りまでの縄文文化は壊滅状態に置かれた。

縄文人は優れた航海術を持ち、太平洋や日本海を北上し、関東地方や、秋田青森まで、途中下車しながら内陸へ移住した人々がいた。

その時代を一括して縄文時代と呼ぶには無理があるが、一万年間共通した定住化の難題は食料の確保だった。

縄文人は、太陽が昇り沈む位置による二至二分を心得、それを境に季節が変わり、動植物が多様化することを知っており、採取狩猟漁撈の範囲が格段に広がった。旬の食材を追い求め食料を確保した。

縄文人の平均寿命は一五歳程度で三〇歳なら長寿である。合計特殊出生率が五人を超えないと集落を維持できないといわれており、新生児は感染症で死亡率が高く、成人も含めて、集落では毎日のように生と死を迎えていた。縄文人の精神に大きな影響を与えた事象に、満月、新月の循環の自然現象がある。「滅びるものは甦る」である。出生を喜び、死を悼み再生を願う祈りがあつた。祈りは採取した動植物にも及び、恵みを与えてくれる自然を畏怖し収穫を感謝し、命の再生を願い、自然と共にある様々な「霊」「神」に祈りを捧げた。背景の端麗な山や、磐座、巨木、海岸の奇岩、洞窟等に「神」が宿り部落にも降りてくると信じた。縄文人は祭場を作り、様々な祭祀を行った。「カミタ」「多神」への信仰だ。

六世紀、仏教が伝来する。修行布教のためには寺院が必要になる、目を付けたのは、縄文人の神々を祭祀して

いた地域だ。「神」は「仏」に従うと位置づけ、そこに寺院を建立し神社を神宮寺とし並立する。神仏習合だ。

近代、外国からの開国要求に攘夷の気運が高まるが、長州も薩摩も下関戦争、薩英戦争でこっぴどく敗れ、攘夷路線から列強に勝る国づくりの舵を切る。錦の御旗を掲げ抵抗するのは賊軍として、大政奉還をもぎ取った。

薩摩は琉球との密貿易で資金の余裕もあり、最新型の兵器、鉄砲等を購入し、幕府との武力の差は歴然としていた。最新の兵器は長州にも供給されていた。明治政府は天皇のみを「神」とする神道国強化を目指した。そして神仏分離令を布告し、廃仏毀釈が全国的に始まる。天皇のみを「神」とする思想には寺院の勢力、国民の支持は邪魔になる。

縄文時代以来、神は自然と共にあり特定の神を支持せず、自然界八百万の神と共存していた国家が消えた。

天皇のみを「神」とする「一神国家」への大変革が始まる。廃仏毀釈が熾烈を極めたのは薩摩である。鳥津の菩提寺はもとより、千以上あった寺院は全て廃された。

押収した金属は鑄潰して兵器や、天保銭を作っていた。

贋金作りである。

平安時代以来、天皇、皇族の霊は、宮中の御黒戸に祀られていた。民間の仏壇である、そこには位牌が置かれ仏式で祀られた。葬儀は天皇家の菩提寺である泉涌寺で仏式にて行われた。然し明治元年以来葬儀は神式に改められた。修験道、山岳信仰「権現」「牛頭天王」を祀ることも禁止された。

明治天皇は史上はじめて伊勢神宮に参拝し、天皇は「現人神」となり、日本は「一神教国」となる。

一神教化した日本は、国政は天皇の命であるとし、反するものは逆賊として、異論に対し強烈な弾圧を始め、世界大戦に突入する。国民の多くは政府の捏造した情報を信じた。戦争に負けること等思いもよらなかった。

世界大戦に敗れ、天皇は神から人間に変わり縄文時代以来の多神を容認する国家に戻る。

令和二年、愛知県の神社でコロナウイルス感染症退散の祈願があった。祀る神は「牛頭天王」である。牛頭天王は疫病除けの信仰の対象だ。禁止した信仰は減びていなかった。

想い出の祖父母

大津 隆文

自分が歳を重ねるにつれ、子供の頃接した二人の祖母（母方の祖母と父方の祖父）が無性に懐かしい。

私は口数も少なくとくに可愛げのある子供ではなかったが、何故か祖母には可愛がられた。祖母の家は自宅から歩いて小一時間で、中学生になる位まではよく泊まりに行っていた。寝る時は祖母と一緒に布団だったが、何故かそんな時に限っておねしょをして恥ずかしかった。あれあれと呆れられたが叱られはしなかった。

祖母にはおはじきや坊主めくり、それに花札などで遊んでもらった。戦後の物のない時代だったが毎日お八つも出してくれた。ある時祖母が拾ってきた銀杏を煎って出してくれたが、あれは苦手だった。他方、お使いに出て行った時に、氷屋さんでサイダーに削った氷を入れて飲ませてくれたことがあり、お婆ちゃんはどうしてこんなに美味しいものを知っているのかと感心した。

小学生仲間で将棋が流行っていた頃、祖母が将棋の駒を買ってくれた時は天に昇るほど嬉しかった。その次の日だったか、祖母の家の隣に住んでいた伯母から「隆文、お婆ちゃんにオネダリしたらしいね」と言われ驚いた。そう言えば、友達で将棋の駒を持っていないのはボクだけ、と何気なしに言ったのは確かだ。あれがオネダリだったのかと少し恥ずかしい気がした。

母に頼まれてお金を借りに行ったことがあった。出発が遅くなり月の皓皓と照る夜道を辿り、祖母の家に着くと玄関にはもう鍵が掛かっていた。こんな夜遅くにと驚かれたが、布団の中で祖母に母から預かってきた手紙をそっと渡した（同居の伯父夫婦に分からないように渡せと言われていた）。次の朝祖母から封筒を受け取ると、伯父夫妻がゆっくりしていきなさいというのを振り切つて失礼した。母も家計のやりくりが大変なんだと実感した。祖母から教えられた、物を大切にすること、とくにご飯は一粒も粗末にしないこと、悪いことをすると罰が当たること等は、今でも自分の心の中に根付いている。

他方、祖父が住んでいたのは名古屋から瀬戸電と呼ば

れる電車で終点まで乗り、バスに乗り換えていく瀬戸市の郊外の農村だった。たまに泊まると五右衛門風呂に緊張し、夜中に家の外の便所へ行くのが怖かった。

祖父は百姓で名前は伍左衛門と古風だったが、温厚で「仏の伍左さん」と呼ばれていた。ただ、お酒が大好きで、そのためもあって暮らしは楽ではなさそうだった。

農閑期には長男である名古屋の父の家に来て、しばらく滞在し毎晩お酒を飲むのを楽しみにしていた。そんなある日夕刊が配達されたので持参したところ「わしはアキ×××だから」と言うので驚いた。字が読めないのによく電車やバスに乗って来れるものだと感心した。

毎年年末には祖父が搗いた餅を父がもらいに行っていた。普通の餅の外きび餅とかこわ餅とかがあり、正月の大きな楽しみだった。一家で訪れた際には飼っていた鶏を絞めてご馳走してくれ、鶏肉がこんなに美味しいかと感激した。また、卵の黄身が大きいのから小さいのへ連なっているのを見て命の神秘に触れたような気がした。

祖父が亡くなった時の葬式の記憶は一幅の墨絵のようだ。お棺を中心に葬列が畑の中の道を墓場へ進んで行く。

先頭の人は竹竿を持っていて、竹竿の上には小銭が沢山入った竹箒が結びつけてある。十字路に来ると竹竿で地面をトントンと打ち箒の小銭をこぼし落とす。待ち構えていた子供達がわらわらとそれを拾う。小銭にはそれぞれ小さな綺麗な色紙が貼ってあったが、祖父はそれを生前自分で用意していたと聞いた。

祖母や祖父には世話になるばかりであったが、一度だけささやかな恩返しをしたことがある。就職して間もない頃、敬老の日に五百円ずつ送ったのだ。千円札にしようか迷ったが、幸い五百円はまだ紙幣だったし、安月給ゆえ勘弁してもらうことにした。

大分経ってから伯父から手紙が来た。お婆さんが大変喜んで大切に仕舞っていたが、どこかへ仕舞い忘れてどうしても出てこない、ついてはもう一度送ってくれないか、とのことだった。お蔭でお礼を二度言われた。

祖父については近所に住む人から、祖父が床屋で孫が小遣いを送ってくれたと嬉しそうに話していた、と間接的に聞いた。あの無口な祖父が喜んでくれたと心が温もった。続けられたらもつとよかったのだが。

企業OBペンクラブ一五年

大月 和彦

二〇〇六年に旧知の会員、野瀬隆平さんの紹介で企業OBペンクラブに入った。当時、会員だよりに載せた新入会員の弁から。

「サラリーマンの生活三〇年、地方勤務や出向など猛烈社員や企業戦士とまではいれないが、それなりの使命感を持って走り続けた。バブル経済がはじけたころ、定年退職者の燃え尽き症候群、粗大ごみ、濡れ落ち葉などのことが飛び交っていた。会社を辞めたサラリーマンが、暇をためあまして在職中の夢を忘れられず鬱の状態に…。周囲から冷たくあしらわれる濡れ落ち葉と椰揄されていた。

在職中に第二の人生の設計―趣味を持つこと、資格取得、奉仕活動などの準備をすべきとも言われていた。もともと趣味や特技などはないし、最後の計画を立てる器用さや余裕を持ち合わせず、山歩きや旅などと

漫然と考えているうちにフリーに。縁あってOBペンクラブに入れていただく…」

気がつくともう一五年余。公務員として在職した期間の半分になった。この間、多い時は月に三、四回代々木のオリンピックセンターに通ったことになる。OBペンクラブと切り離せない生活が続いた。濡れ落ち葉として嫌われることや無聊をかこつこともなく過すことができた。「何でも書こう会」のほか「フォト句会」と「何でも読もう会」に参加した。作品の発表と合評会での議論、アフターファイブ活動や合宿勉強会を通じてお互いをすぐに理解し合い、友人というより親密な仲間になった。

二〇一一年の東日本大震災は大きな出来事だった。原発事故で放射能の拡散が懸念されていた同年三月末に、オリンピックセンターで何でも書こう会が開かれた。出席した一九人が震災当日のことを話し合った。都心において帰宅難民になった会員の報告や、石巻の大学勤務の会員が連絡の取れない同僚や学生の安否を気遣う報告など

があった。会終了後まだ余震の揺れがある中「とき」で飲みながら議論が続いた。

何でも書こう会には、その後も震災・原発事故関連の作品が続けて発表された。家族の当日の記録、原発事故の恐ろしさ、東電や政府の対応、内外からの救援活動、三陸地方津波の歴史、放射能への対応など。

国の未曾有の危機に際しては黙ってられないという情熱と気迫があった。技術的、科学的立場からの批判や提言も多く、貴重な記録は後世への証言になるはず。

入会当時の書こう会には、クラブ創設時からの大先輩会員ばかり居られ、随分緊張した。元新聞記者の会員から、文中に助詞「が」が多いと何回も指摘される。本来の使い方ではなく誤用、多用されているというのだ。以来、文章を作るときはこの指摘を意識するようになった。

文章を継続して書くのは簡単ではなかった。温めていたテーマはすぐ使い果たした。江戸後期の旅行家菅江真澄の旅日記『遊覧記』に飛びついた。生涯の大半を旅で過ごした真澄は、東北地方の庶民の生活と風俗習慣を克

明に記録している。秋田県、津軽地方、下北半島、三陸海岸や一関地方など真澄の足跡をたどった旅を楽しみ、『遊覧記』をなぞった駄文を書くことができた。この旅では、江戸時代の鉾山町、出羽院内銀山の医師門屋養安の日記を知ったことなどの副産物があった。

文章を作ること―テーマを考え、メモなどで記憶をたぐりよせる、辞書、文献やネットで調べる。現地に足を運ぶ。パソコンに原稿を打ちこむ。合評会での意見や批評に耐える―。刺激的で緊張感をともなう作業だ。締め切りが迫っても書けない時の苦しさもあるが、書き上げた時の充実感是他の何物にも代えがたい。一連の作業は頭の体操になり、ボケの防止に効果があるといわれている。

濡れ落ち葉にならず、素晴らしい仲間恵まれて米寿近い今日まで楽しませてもらっていることに感謝せずにいられない。

ありがとう「企業OBペンクラブ」

伊藤博文の無念

大平 忠

伊藤博文は一九〇九年に暗殺された。六十八才だった。あと十年生きていれば、日本の国の運命は大きく変わったに違いないと、痛恨の思いが湧いてくる。

日露戦争が終結して八ヶ月経った一九〇六年五月二十一日、朝鮮統監だった伊藤博文は、国の中枢を担う全員を集めて、「満州問題に関する協議会」を開いた。伊藤が招集したのは、山縣有朋、大山巖、西園寺公望総理、松方正義、井上馨、陸軍・海軍・大蔵・外務各大臣、児玉源太郎参謀総長、桂太郎、山本権兵衛である。

伊藤がこれだけの会議を開いたのは、よほどの危機感からであろう。協議会の議事録を読むと、冒頭の演説に伊藤の国の将来を憂うる気持が横溢し胸を打つ。

「……本年二月……外務大臣加藤高明君ヨリ満州問題ニ関シ各国ヨリ種々ノ照会を受ケ之ニ対スル回答ヲ為ス

ノ必要アリト雖モ軍部ト外務省トノ交渉容易ニ解決セザルヲ以テ遷延セル事情ヲ聞キタルカ故ニ……」

「……三月末頃ニ至リ米國政府ハ満州問題ニ関シ我政府ニ嚴重ナル照会ヲ寄セ來リ英國ニ於イテモ議會ノ問題ニ上ル等……余ハ甚ダ憂慮セリ……日本人ニ同情ヲ寄セ軍費ヲ供給シタル國々ヲ全ク疎隔スル日本ノ自殺的略略ト評スル外ナシ……諸外國ノ日本ニ軍費ヲ供給シタルハ日本カ『門戸開放主義』ヲ代表シ此主義ノ為ニ戦フヲ明知シタルカ故ナリ……」

これは、ポーツマス条約締結後、各国からの輸出が再開されたが関税を取られ日本品だけは関税が無い事実について英米各国から相次いだ抗議の照会を意味している。その上日本国内では、軍部の関税存続、外務省の条約履行との両者の主張が割れ、釈明が遅れていた。

日本は戦後、旧ロシアの持っていた満鉄の權益を引き継いだ。満州は清国の領土であり満州に軍政を引く権利は無い。軍部は戦争終結後もその軍政の拠点を廃することなく存続させたため、清国とロシアの疑惑と不満を招き、日本が戦争目的の大義とした「清国の領土保全」

を守らず条約違反であると明言するようになっていた。

伊藤は、清国の人々の日本に対する信頼感の乖離が朝鮮の人心にも影響することから、日朝関係の悪化を懸念した。さらにロシアを日本への復讐戦へ駆り立てる一因になるとも恐れた。

なかでも、伊藤が最も恐れたのは、日本が「満州の門戸開放」と「清国の領土保全」に疑いを生じる振る舞いをすれば、英米から非難され国際的孤立を招くことであった。軍部の条約違反の行動は、即刻中止し、各国との信頼関係を取り戻さなければいけない。さもなくば、「……興国ノ同情ヲ失シ帝国の威信ヲ傷ケ将来ニ於テ回復スベカラサル不利ヲ招クニ至ラン……」と、日本の将来を強く憂慮していた。

協議会は伊藤の主導のもとに進められ、全員一致で全て伊藤の意見通り対処するとの議事録が残された。

協議会の三年後の一九〇九年十月、伊藤博文はハルビン駅で大韓帝国の民族運動家安重根によって暗殺された。死の直前、伊藤は「馬鹿な奴だ……」と呟いたという。

この呟きは、「俺がいなくなつて、朝鮮と日本は果たして大丈夫か」という無念の叫びに聞こえる。

数年前に広島県廿日市市で見つかった伊藤の書いた文書には、朝鮮がもつと近代化され豊かになった暁には独立国となるのが望ましいと書かれてあったという。

しかし、「満州問題に関する協議会」の決定内容は、伊藤の死を契機に、伊藤の憂慮した方向へと流されていく。残された元老も、山縣は世界の動向が日本に与える影響を洞察できず、さらに議会政治を嫌った。最後の元老西園寺にも伊藤のような一身を投げ打って流れを押し戻す覚悟と力はなかった。

もし、伊藤博文があと十年生きていればどうなったか。日中戦争の勃発は無く、英米協調路線を敷いて大東亜戦争に踏み出すこともなく、朝鮮は近代化が進んで独立し、国内では議会制民主主義も進んだかもしれない。

世界を俯瞰してその潮流を見定め、国の舵取りをしようとした伊藤博文の死は、我国にとつてその損失はあまりに大きく、その後の国の運命を暗転させたのであった。

私の旅

大野 昶

人は何故旅をするのか。

我々の祖先の代表的な旅人と言われる西行と芭蕉について考えてみましょう。

「月日は百代の過客にして、行かふ年も又旅人なり。」
ではじまる『奥の細道』の冒頭の文章は余りにも有名です。

そこで偉い先生方が「人生は旅である」などと有難い言葉を述べられることになります。

しかし、この二人の先輩の和歌や俳句を何の先入観もなしに眺めると、旅の目的がどうもはっきりしません。

本当の旅の目的を和歌や俳文でほかしているような気配すら伺えます。

西行の奥羽への旅には、頼朝の依頼で義経の動静を探るためとの噂が絶えないし、芭蕉に至っては、伊賀者で公儀隠密の世を忍ぶ姿が俳諧師だ、と小説にまでなっ

ています。

一方、西洋に目を向けると、この点は実にクリアーです。ゲーテはこの世のアルカディアを求めて、イタリアに旅立ちました。本物のギリシャ・ローマの文化を求めて、ルネサンスの花の都フィレンツェも僅か三時間で素通りし、アッシジではサン・フランシスコの大聖堂を姿が悪いと寄り付きもしません。

ところが、スパイ容疑であわや監獄に入れられそうになるのは、西行や芭蕉ではなくてゲーテですからたまりません。

ワイマールの宰相であるゲーテは商人に身をやつし、偽名を使っていました。将に嫌疑は真つ黒でした。それにも拘わらず、読者はゲーテの求めたものが、あの「ミニヨンの詩」の「シトロンの花咲く南の国」であることに疑いません。

では私の旅はどうでしょうか。

私の旅は、ゲーテ、ハイネ、ロレンスといった先人の見た国々を追体験することです。

「洋魂非才」と自称する私が、どこまで西洋かぶれに

なり切れたか、を測るのが私の旅の目的です。

こんな旅をはじめたいと考えた動機はもう四十年前も前の体験です。

ハイデルベルクの有名なお城への登り口に一つの銅像を見た時でした。それはハイデルベルク大学のブンゼン教授のものでした。化学の実験には欠かせないあのブンゼンバーナーの発明者です。

日本のどこの街角を歩いたとしても、自分の学間に繋がった、これほどの人物と巡り合うことができるでしょうか。国文学や日本史を専攻する学生は別として、日本の学問が明治以前の日本とは無関係だ、と知った一瞬でした。

その延長線上と言っても良いかも知れません。

時代順にゲートもハイネもインスブルックからブレンナー峠を越えてイタリアに向かいました。最初の街と言ってもよいシユテアテイングをそのまま通り過ぎますが、ハイネは綺麗なお嬢さんに惹かれます。ロレンスはここに来るのにミュンヘンからアッヘンゼーを通ってチラールをマイヤーホーフェンまで、そこから山越えでこ

の街にたどり着きます。ここからメランへの近道を選ぶのですが、道を間違えて戻ってきます。結局他の二人と同じ道をたどって、最後はガルダーゼーに落ち着きました。シユテアテイングの街を歩きながらこんな昔のことを思い起こすのはとても楽しいことでした。

パリではこんな経験もしました。

丁度フランス革命二百年祭の時でした。当時のフランス首相はミッテラン、ここにイギリスからサッチャー首相がやってきました。

この時の記念のプレゼントが何とチャールズ・ディッケンズの『二都物語』の初版本でした。

これほどフランス革命をけなした本は他にありません。私としては将に我が意を得たりの心境でした。

私が西洋人並みの「物の見方」をやっと身に着けたと感じた瞬間でした。

日本人でフランス革命をここまでコケにする人は極めて稀だと思います。

私が日本人には馴染めないと感じ、遠くを見るようになったのもこの時からでした。

パンデミック、世の変わり目

大森 海太

今から七千年前、地球上の各地で乾燥が起こり、緑のサハラは砂漠と化した。このため人類は水を求めて大河のほとりに集まり、限られた水の有効活用を図ることから、文字が生まれ四大文明の発祥になったという。

紀元前五〜四世紀、洋の東西で鉄器の普及により農業生産力が飛躍的に向上し高度成長で人口が急増した。

そんな中からソクラテスをはじめとするギリシャの哲学者たち、インドのお釈迦さまやヴァルダマーナ（ジャナ教の開祖）、中国では孔子を筆頭とする諸子百家が相次いで登場した。

二世紀後半からの四〇〇年間、ユーラシア大陸は寒冷期に入って農業生産が低下したため、ローマ帝国や漢のような大国は国を維持できず、西ではゲルマン民族の大

移動、東では五胡十六国の時代に入った。

混乱の末に誕生したフランク王国のカロリング朝と、鮮卑拓跋部を出自とする隋、唐王朝は、似たような背景によっている。

時代は下って十五世紀末、東ローマがオスマン帝国に滅ばされたことにより黒海や東地中海がイスラムの海となり、ジェノヴァなどイタリアの商業都市の活動が西地中海から大西洋に移り、大航海時代の幕開けとなった。

このように、ある出来事がキツカケとなって世のなかが大きく変わるといふ例はいくつもあるが、パンデミックが引き金となったのでは黒死病（ペスト）を忘れてはならない。

十三世紀、モンゴル帝国のもとで東西交易が盛んになったことが遠因とされ、イスラム世界を経由してポスプラス海峡を渡り、十四世紀末ヨーロッパで大流行して、人口の三分の一が死亡したといわれる。

このため農民の数が激減して中小の封建領主や教会で

は莊園の経営が成り立たなくなるいっぽう、自営農への転換が進み、中世封建制度が崩壊して次の絶対王政につながった。

このことはある日突然におこったわけではなく、それまで溜まっていた世のなかの諸々の矛盾（マグマ）が、パンデミックを機に一気に噴き出したのだと考えられる。と言うのも、今回のコロナ禍を契機として今の世界が大きく変わるのではないかという漠然とした予感がするからである。

産業革命を経て世界の七つの海を制した大英帝国によるバックスブリタニカは、二次にわたる世界大戦の結果衰退し、代わってバックスアメリカーナの世界となった。私の若いころ、飛行機の尾翼のようなテールフィンの子ヤデラックがハイウェイを悠然と走り去るという、アメリカンドリームは皆の憧れの的だった。

でもそれもベトナム戦争あたりから変調をきたし、湾

岸戦争や同時多発テロなどを経るいっぽう、中国経済が急成長してGDPでもアメリカに迫る勢いとなった。

加えてまったく価値観を異にするイスラム原理主義が抬頭し、昨年はアフガニスタンを席卷するという予想せぬ事態まで発生した。

また地球温暖化に対する危惧が高まり、資源多消費型のリッチな生活エンジンスタイルから、つつまじやかな省エネ文化への転換が喧伝されるようになった。

このようなマグマの圧力が高まる中で新型コロナの流行が始まり、それを契機に問題がどっと顕在化したのではないか、今まさに世の変わり目にさしかかっているのではないか、そんな気がする今日この頃である。

これから世のなかはどう変わっていくのか、バックスシノワーズになるとも考えにくいが、そもそも歴史はあつげの結果論。それを見定めるには、我々に残された時間はあまりにも少ない。

不要不急の外出

川口 ひろ子

コロナ感染予防の為に「不要不急の外出は控えて」の呼びかけの下、我慢の日々も三年目に入った。クラシック音楽ファンの私にとって音楽会に行くことは「不要不急の外出なのか」といつも思い、過ぎた日の、音楽と自分との関係を整理して、この疑問への答えを探ってみた。

★戦中戦後の混乱期

昭和十年代後半、音楽はSPレコードをセット、手回しハンドルで回転させ、針を落とすと音の出る蓄音機で聴いていた。父親は歌舞伎、母親は長唄や清元、私と弟は童謡をよく聴いた。太平洋戦争の末期、「青い目の人形」や「赤い靴」など外国人を歌った曲の禁止令が出た。父親は子供が誤って聴かないようにと、表面に火箸で傷をつけた。悲しかったが仕方がない。八月十五日、敗戦だ。私たちは、辛うじて空襲を免れた富士山麓の宿場町に住

んでいた。東京は焼け野原となり、両親の旧知の長唄師匠栄次郎さんは一座を組んで地方巡業を始めた。食料事情最悪のこの年の秋、ご一行を我が町に迎えて両親は大喜び。楽屋見舞いのお届け係は小学生の私だ。庭で育てた薩摩芋を蒸かしお重に詰めて差し上げると大変喜んで下さった。子供心に「東京の人にお芋なんか……」と心配した私はほっと胸を撫で下ろしたのであった。江戸の空気をそのまま受け継いだ邦楽鼈員の両親の下で長唄のお稽古などして成長したが、敗戦後、多くの日本人は「和」を捨て「洋」に移り、私も方向転換した。

★悩み多い青春時代に助け舟

私と弟が成人した後、我が家は東京に転居した。失敗続きのこの頃の私に、「愚痴ばかりでなく、貴方も何か特技を生かしなさい」と、助言をくれたのは藤原歌劇団のソプラノ歌手のSさんだ。大活躍のSさんの舞台衣装作りに参加した縁で親しくさせて頂いた。勧められるままにオペラやコンサートに通っている中に、すっかりファンになった。劇場の椅子がどん底にいる私を助けに来

てくれる小舟のように見えてくる始末。小舟にしがみついて二年余り右往左往している中に前途が開けた。小さなファッションメーカーからお声がかかり、プレタポルテ（高級既製服）のデザイナーとして働くことになった。

★高度成長とモーツァルトブーム

高度成長をした日本がバブルの最盛期を迎えたのは三十五年程前のこと。皆が豊かな生活を満喫していたかのようだ。しかし、「物」から「心」へ時代の価値観は変わる。渋谷に Bunkamura が誕生したのは丁度この頃だ。モーツァルト没後二百年の一九九一年の夏、Bunkamura は、「モーストリーモーツァルト・フェスティヴァルイン Bunkamura」を開催した。ニューヨークで企画開催されたものがここで再演された。八月末の一週間、ほぼモーツァルトの音楽のみが国内外のアーティストによって演奏された。イヴェントは九年間連続して行われた。好きな作曲家の膨大な作品を生で聴く機会が、海の向こうからやって来たのだ。喜んだ私はこの間全公演に通った。

特に印象深かったのは、正確無比、楽譜通りの几帳面な演奏を心がける日本人奏者に対して、欧州系、ロシア系、アフリカ系と様々なルーツを持つアメリカ人たちは、自分たちの個性を最大限に打ち出して強烈に表現することであった。この頃仕事面も好調で、能力以上の仕事がどっと押し寄せて来る毎日に小心者は興奮状態だ。残暑厳しい中、「バブルでグチャグチャにされるのは御免だ。劇場の椅子に身を沈めて自分を取り戻すのだ」とばかり、納品を終えた私は必死に Bunkamura に駆け付けた。以来ほぼ三十五年、心の不調もスッキリ晴れて、国内外の名人達による沢山のオペラ公演やコンサートに通い、潤い豊かな毎日を送ることが出来て感謝している。

★コロナ禍終了の先

どのような日々がやって来るのだろうか。何れにしても私にとつて音楽会通いは「不要不急の外出」ではなく、バランスの良い心身を保つために「絶対必要な外出」であることは間違いない。

後期高齢者の運転免許事情

川村 邦生

先日、後期高齢者運転免許証更新の認知症テストを受けた。認知症テストなんてとバカにしていたが、念のためインターネットでそのテスト要領を調べて驚いた。記憶力が試されるのである。会場で十六枚のイラストを見せられ、動物やラケットなど、そこに載っているものを書き出す方式だ。正答数により、三ランク分けされ、七六点以上は全く問題ない。

良くしたもので、この出題問題集が一般に売られている。ただ、四パターンがあつて、そのいずれが当日に出題されるかわからない。よし、四パターンすべてを丸暗記しよう。

丸暗記するために、日課としている朝夕の散歩時、老犬を引張りながらぶつぶつ口に出し、トイレに入った時は、壁に張った六四枚（一六枚が四パターン）のイラスト図を暗唱した。

試験前夜、何回も繰り返し声に出し、ノートに書き、目、耳、手で覚え、それを翌日まで忘れないようにした。幸い前日の感覚が残っている状態でテストを受けられ、無事に満点でクリア出来た。

最近全国各地で後期高齢者の運転による事故が頻発している。二〇一九年に池袋において、母親と幼児が巻き込まれた死亡事故が発生し、九十歳の後期高齢者に運転ミスの判決が下された。昨年後期高齢者が起こした死亡事故は全国で三三三件となり死亡事故全体の十三・八%を占めた。特にアクセルとブレーキの踏み違い等による人為的原因が多いようだ

事前予習をしつかりやれば合格できる現在の方法では、認知症による事故防止は難しきだろう。いつそのこと、テストでイエローカードが出た高齢者は、オートマティック車禁止とし、マニュアル車のみ運転可とする限定免許としたらどうか。マニュアル車の運転では、アクセルとブレーキの踏み違いは起こりにくいのでかなり改善され

るはずだ。

つまりマニュアル車の運転はクラッチを左足で使うのでかなり複雑で面倒な操作になる。車の運転が簡単な操作から難しくなり、煩わしさも加わり車の使用回数が半減するだろう。その結果、乗らない高齢者が増えるのではないか。

団塊の世代がいよいよ後期高齢者に入りつつある。二〇二一年九月時点で約一八八〇万人、総人口の一五%を占める状況となった。これは二〇四〇年には二〇%まで続くことが統計で発表されている。今後約二〇年は団塊ジュニアも加わり比率は減少しない。逆ピラミッド型人口構成となる。すなわち高齢運転者数も同じ傾向である。高齢者の事故件数増加を止める為、国とメーカー共に対策を検討している。後期高齢者向け免許の厳格化を国が行い、踏み違い用の自動停止等防止装置の開発をメーカーが行っている。

小生、後期高齢者入りしたこの時、これからの生き方の参考になる書物を見つけた。

小椋佳著『もういいかい まあだだよ』（双葉社二〇二一年十二月刊）である。

以下引用する。

「今日は残された人生の、ともかくスタートだ……いつまでもそんな気持ちで、一日一日を過ごそう」「もうと思えば下り坂、まだと思えば上り坂」

後期高齢者の仲間入りする年齢になり、車の運転を通して第二の人生の心構えを再認識することとなった。

車が好きで、まだまだ行きたい場所も沢山ある。安全運転に徹し、これからも楽しいドライブを心掛けたい。明日に向けてスタートだ。



土に還る

宮原 由利子

冬ざれや土に還らぬ物いくつ

宮原の家の菩提寺は安養寺といって、日野の万願寺駅が最寄り駅になります。

かつては墓参にも不便な所で、家の車がない時は、京王線の高幡不動駅から安養寺までバスかタクシーで行っていました。

平成十二年に多摩モノレールが開通し、万願寺駅が高幡不動の近くにできました。そこからは徒歩七分ほどの距離で、大変便利になりました。

ちなみに高幡不動は新選組の土方歳三の生地で、彼の菩提寺は高幡不動尊です。安養寺はその縁にあり、四百年ほど続く古いお寺です。

お墓は一畳位の広さで、墓石の下を開けると何段かの

棚があり、二十個余りの壺を置ける広さがあります。そこに、宮原の先祖と姑、それに主人が納められています。

いつか私もここに……。

主人と姑の間で安心したいと思っています。

生前のあの頃のように。

一方、私の実家の菩提寺は、新潟県糸魚川市の青海という、海の見える丘にあります。

私は四人姉妹で、姉と二人の妹がいます。四人とも他家に嫁いでいる為にお墓を継げる人がいませんでした。その為両親は、親族のお墓が周りにあるこの地に先祖とともにずっと眠ることに決めたのです。東京にお墓を移す事はしませんでした。

数年前に母が亡くなった時、納骨に行きました。墓石の下を開けると、中は大きな洞穴のようになっていました。それは、東京ではありえない程の大きな穴で、怖いぐらいでした。

そこへ壺から出したお骨を直に投げ入れたのです。

「何という事を」と大変驚きましたが……。間もなく、「嗚呼、これで父と一緒に土に還るのだ」と納得し、安堵しました。

そういう私も全てのものと同じように、いつか土に還るのだと、諦観した穏やかな気持ちになりました。

海見ゆる父母の墓にも桜東風

青海の丘の近くには、父の妹家族が暮らしており、墓守をしてれています。東京で暮らしていると新潟は遠く、なかなか墓参にも行けません。それでも、悲しい時はもちろん、雪が降る時も、また桜の季節も、折に触れ父母の眠る海の見える丘を思います。

我死せば父母も死す銀の河

昔読んだ、福永武彦さんの作品の中の言葉に、「人の死は二度あって、その人を記憶している人がすべていなくなった時に本当の死が訪れる」と。

人は、誰かの記憶に残っている限りその人の中で生き続けるのだと……。

そんなふうに思えたら素敵なことです。



ボニファティウス8世の棺の前で

松浦 俊博

二年近くイタリアから足が遠のいている。何となく物足りない。もちろんウエブカメラを通して、ローマの現在の様子を見ることはできる。昨年『悠遊』に書いたカンポ・デ・フィオリには相変わらずジョルダノ・ブルーノが立ち、ヴェネツィア広場からの映像には頻繁にバスが走っている。40番か64番のバスだろうか、目を凝らしても番号は読み取れない。テルミニ駅始発のこれらのバスで何度もヴァチカンに向かったものだ。

毎週日曜日の昼にローマ教皇は「お告げの祈り」を行う。それを聞きにサン・ピエトロ広場に集まる多くの人の様子は、ヴァチカン・ニュースで見られるし、大聖堂の中で行う特別な行事についても映し出される。それでも、その場にはいないという物足りなさは残る。

ミケランジェロが建築に携わった大聖堂は公開され、

その中には数えきれないほど多くのローマ教皇や聖人たちの彫像がある。近代の国王が立派な宮殿を建てて威厳を世に示したのと同様に、ルネサンス期のキリスト教会も立派な建物と芸術作品を獲得し保持した。

聖ペテロの弟、聖アンデレの彫像もある。彼は十二使徒の一人で「最後の晩餐」にも描かれているが印象は薄い。この彫像の横に地下に通じる階段がある。降りていくと、ローマ帝国でキリスト教信仰を公認したコンスタンティヌス帝が四世紀に建てた最初の聖堂の遺構がある。これも歴史的に貴重だが、私のお目当てはローマ教皇の棺だ。全てのローマ教皇がここに眠っているわけではないし、公開されている棺も一部である。しかし、時代を動かした教皇に会えると考えただけでわくわくする。

教会のために尽力した教皇の棺がこの大聖堂にあるのは当然のことだと思いが、教会にマイナスのイメージを与えた教皇の棺もここにあるのには違和感を覚える。

私がそう思う教皇はボニファティウス8世である。

「どうしてここにいるのか」と棺に話しかけてしまう。

もちろん、聖職者養成のためにローマ・サピエンツァ大學を建てたことは教会法に詳しい彼の功績である。また、今に続く聖年を定めたことも業績である。普段は開けない「聖なる扉」を教皇が開け、人々はその扉のある入り口から大聖堂に入る。また最後には教皇が自ら閉め、数十年先の次の聖年まで開けられることはない。教皇の威厳を感じる瞬間だ。私も二〇一六年の聖年には、ローマにある四つの大聖堂の「聖なる扉」を全て通った。

しかし、ボニファティウスは、どうしてもアナーニ事件やダンテの『神曲』と結びつき、富と権力の亡者というイメージなのである。そもそも聖年を考え出したのもお金集めのためだった。フランス王フィリップ4世が教会に課税したことから対立し、国王の手先によりアナーニで襲撃を受けて憤怒したまま亡くなった。明確な形で国王に敗れた最初の教皇である。

また、昨年がちょうど没後七百年のダンテは、自分はボニファティウスの策略のためにフィレンツェから追放されたと考え、『神曲』では九圈ある地獄界のうち重い

方から二つ目の第八圈に彼を入れた。この「悪の第三の囊」はローマ教皇専用の穴で、聖職を汚した教皇が逆さまにされて燃える足をばたつかせ続けるのだ。次の教皇がやって来ると、前の教皇は岩の裂け目深く押しつぶされ、今度は新たにやってきた教皇が足をばたつかせる。

ボニファティウスの前には教皇ニコラウス3世が入って二十年以上にわたり足をばたつかせていた。一族を相次いで枢機卿にして教皇職を私物化した人物だからだ。

また、ボニファティウスはいえ、卑怯な手を使って教皇の座を手に入れた人物として描かれている。前教皇を精神的に追い詰めて辞任させたい幽閉して獄死させたのだ。だから、教会を騙した罪で、次にフィリップ4世に操られた教皇クレメンス5世がやって来るまで、十年以上足をばたつかせることになった。やはり、「どうしてここにいるのか」と聞きたくなくなってしまふ。

ボニファティウス8世もダンテも一三〇〇年という聖年に生きていた人物である。七百年後に『悠遊』に書かれるとは思ってもみなかったであろう。

猿田彦の鼻

首藤 静夫

猿田彦を知っている人は、「ああ、祭の行列を先導する天狗のような」と言う。

『日本書紀』（以下、書紀）には、鼻の長さが七咫（二二六cm）、背の高さ七尺（二一〇cm）というから尋常でない。また、口の端が明るく光り、目は八咫鏡のようで……とある。

この神は、伊勢の猿田彦神社に祀られているが、全国の白鬚神社の祭神として有名だ。

猿田彦は「導きの神」である。ニニギ以下の天孫一行が天上界から降臨する際、彼は途中で待ち受けて道案内した。一行を高千穂に送り届け、感謝されて故郷の伊勢に帰り、そこで死んだとある。

アマテラス以下始どの神様が名前や系譜、役割などの説明だけ、リアルなイメージに乏しい中、猿田彦は体の特徴からその最期まで詳しく記される。一体何者なのか。どの神話もそうだが、書紀の神話も奇想天外だ。しか

し勅命による史書であり、編集者は当時のインテリたちだ。奇想天外には理由があるのだろうか。

書紀が完成したのは八世紀前半の奈良朝初期。大和王権が倭国を代表する王朝として唐の承認を得ようとした時期である。王朝名を「日本」に決め、大宝律令を作り、唐に倣った都を築き、かの国の承認を取付けることに腐心した。史書で新生日本をアピールしたかったのだろう。その中に猿田彦を登場させた意味は何か。

以下は私の推理である。

猿田彦は本来、神話の世界の人ではない。その次の章に記される「神武東征」に登場させるべき人である。

何故なら彼こそ神武集団を道案内して、近畿の山々に水銀朱を探し求めた探鉱のリーダーだったからだ。

別稿に述べているが、神武集団は水銀朱を探して九州から一山、又一山と東に移動してきた山師の集団だと思う。水銀朱の「ゴールドラッシュ」の時代である。神武集団もその一つで、しかも後発組だった。

水銀朱は一般に「丹」と呼ばれ、各地で採掘された。

丹生という名称にその名残がある。紀伊、伊勢、大和の辺りに最大の鉾脈があった。

当時、丹は水銀として、また赤色顔料としても大変貴重で、わが国が中国、朝鮮と交易する時の戦略物資だったと思う。これと引き換えに鉄鋼原料他の物資を輸入したのである。丹は中国でも稀少、朝鮮ではまったく出ない鉾物だ。水銀朱の採掘に関する情報はマル秘にした。一方、先祖の苦難と栄光の歴史は描きたい。そこを神話の中に折り込んでカムフラージュしたのだと思う。

神武集団が畿内にたどりついてからの苦闘は書紀に詳しい。先発組に各所で撃退され、紀伊半島を大回りして熊野から山中に分け入った。何度も遭難しそうになる。どうしても土地に詳しい者の案内が必要だ――。

ここで登場したのが猿田彦だ。彼は天孫降臨とは無関係の、現世の人だった。彼が神武一行を道案内し、畿内の鉾脈探しを先導したと思う。

ところで、七咫の鼻・七尺の背の、人間離れた大きさは何なのか。私の勝手な推測では――

・鼻の異常な長さは、岩肌をつついていて棒だ。

・背の異常な高さは、脚立状のものに乗っているからだ。少し離れた所から見ると、長い鼻、高い背丈と見紛うばかりである。

・天狗のように照り輝いている目、顔は朱の粉である。

同様の奇妙な記述が神武の道中に幾つかある。

吉野で、光る井戸の中から人間のような三本足の生き物が出てくる。また、岩を押しつけて出てきたのも三本足。おそらく採鉾中の縦坑と横坑の鉾夫であろう。三本目の足は暗い坑道での命綱だと思う。

このように要所要所で、水銀朱情報を荒唐無稽な話に作りかえている。

その後の猿田彦は、伊勢の海岸でシャコ貝に手を挟まれ溺れ死んだとある。この謎解きは難しい。彼の長い鼻は男根の象徴という説もあるし、不思議な死からエッチな想像もできる。神として祀り上げておくには惜しい男である。

リンダちゃん

高橋 由紀子

その犬と飼い主さんとはとてもよく似ていた。犬種はテリア。面長の顔立ち、少し上目についた優しい目。物は腰はゆつたりと上品だ。

散歩で行き会うと、うちのトイプードルはピコンピコンと跳ねながら走り寄る。リンダちゃんというその犬はしずしずと近づいて来る。二匹は暫くじゃれあつては突然何事もなかったように左右に分かれる。

ある日、その飼い主さんは憂い顔でおっしゃった。「うちの子、病持ちなんですよ。今は薬で抑えてますが」。血液のがんだという事であったが、見受けたところ元気そうで、私にはあまり心配は要らないように思われ、その時はただその薬の高額さに驚いただけだった。その後も二〜三か月はいつも通りお会いしていたが、ある時か

らばったり行き会わないことに気が付いた。お宅の前を通っても門はびつたりと閉ざされている。元々閑静な佇まいの家であったが妙に寂しさが感じられる。

季節が秋から冬になってもどなたのお姿もみえない。日が暮れてから通りかかると奥にほんのり灯りが見えるから家人の方はご健在と伺われるが。

今日も私は犬を連れて散歩に出た。我が家の愛犬君はクイクイとリードを引っ張りながらリンダちゃんの家の方に道を曲がる。時折りリンダちゃんが遊んでいたそのお庭の芝生は今朝のひとしおの寒さのせいで一面霜に覆われ真っ白に広がっている。隅には大きな柚子の木。取り残された黄色の実が、眩しい冬の朝陽を浴びてキラキラと光っていた。



夢を追った男 鶴飼直哉君追悼

大平 忠

鶴飼君に初めて会ったのは小学校四年の時だった。頭が大きく、クラスでは「仮分数」というあだ名がついていた。この頃から真空管のラジオを組み立てており、大きな頭は「数理の頭」だったのである。彼は、その道を一直線に進み、東工大では学生として第一号となるコンピュータを製作した。

その後、彼は富士通に入社する。コンピュータチームのリーダー池田敏雄さんを慕ってだった。しばらくして池田さんは日本のミスターコンピュータと言われるようになった。いつの頃からか、鶴飼君に会うと、世界一のIBMに追いつき追い越すのだと話していた。富士通はアメリカ・アムダール社との共同開発を始め、彼はアメリカチームのリーダーになった。帰国したとき一杯飲んだ。共同開発はたいへんだ、決裂しそうに何度もなる、でも、なんとかするさと明るく元気だった。

一九七四年十二月、富士通のコンピュータ四七〇V―六は遂に完成、翌年IBMに勝利してNASAへ納入

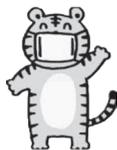
された。世界一のコンピュータであることが証明されたのだ。しかし、池田さんはこの日を見ることなく早世された。これらの池田チームの苦闘と成功の物語は、二〇〇二年NHKのプロジェクトXで紹介され、鶴飼君は生き証人として登場している。プロジェクトX白眉の作品である。

二〇〇四年、彼から「企業OBペンクラブ」という面白いクラブがあるから入れと誘われた。「何でも書こう会」に連れて行かれた。彼は、「僕は額縁屋だ」と、A4用紙の割付やら、フォントなどについてよく意見を言った。『悠遊』の原稿を書くに当たったのテンプレート第一号は彼が作ってくれた。

当クラブの活動に加えて、六十六才の仲間たちでルート66を完走。さらに、岩倉具視使節団の『米欧回覧実記』を片手に、使節団の回った各国を回り、二〇一九年最後の国スウェーデンで病に倒れた。見事な一生だった。

鶴飼君の功績は、目下世界一である日本のスーパーコンピュータ「富岳」へと受け継がれ、我がクラブでは、『悠遊』作成の土台として残っている。

最近のクラブ活動より



コロナ禍を工夫で乗り切る
OBペン

対面+Zoomで「何でも書こう会」
対面リアル好みは会場に集合
遠隔地参加、リモート派はZoom

遠隔地参加



木村さん夫妻



会場参加者(ウェブカメラ)



大平さん



池田さん



「俳句会」の跨行 新宿御苑にて 昨年11月



創作短編



水彩 八木 信男

鬼の舌震い

大塚 喜子

「夏休みは何処に行くの？」九歳の息子が食卓に身を乗り出して両親の顔を見比べながら言った。妻は

「奥出雲の溪谷に行きたいわ。『鬼の舌震い』に行きましようよ」観光冊子を広げながら息子に奥出雲の話を始めた。

東京生まれの妻が転任地の出雲を気に入ってくれているのが嬉しかった。翌日私は五日間の休暇を申請した。

結婚して十二年になる。私は中央省庁の事務官で、去年から島根県庁に勤務している。次年度の県予算案について、連日部下と話し合いを重ねてきた。財務省及び各関連省庁に説明する為に、今週末には東京出張を命じられていた。

深夜に帰宅すると妻は寝ていたが、気配に気づいて着替えを手伝ってくれた。

「出張の準備ができたヨ……」

普段は家で仕事の話はしないようにしているのに、気がつけば上機嫌でスラスラと喋り始めているのではないのか。

一言二言とはいえ、妻に仕事の話をしたことを悔やんだ。仕事は自分が家族を支えるためにやっている事で、妻に褒めてもらいたくてやっているのではない。自分は家族の支えであって、支えられる立場ではない。眠ろうとしている妻に仕事の話をするのは、自身の美学に反すると思った。

風呂に入って、頭のとっぺんまで湯につかり、目を瞑ると、数ヶ月来の疲れを忘れて、心底心地よかった。

翌日上司が

「出張の日程が決まった。再来週の火曜日だ」

「ずいぶん先に延びましたね」

「その日に君は夏休みを取っていたね。家族と旅行なんだろう」

「宿はキャンセルしますよ。財務省への説明にご一緒します。任せてください」

「頼りにしているよ。無理させて悪い！」上司に肩を

叩かれて、何とも言えない充実感が背筋を心地よく駆け上がった。

息子は不満を口にしたが、妻は

「宿はキャンセルしますね」と言つて付箋や切り抜きを貼つてある観光冊子を取り出した。

二日後、いつも通り起こしに来た妻に「体調が悪いから今日は休む。九時になったら役所に電話するから起こしてくれ」とだけ言つてもう一度寝ようとした。ドアの向こうで「お父さん起きないの?」と言う息子の声が妙に甲高く聞こえた。

「九時になりましたよ」妻の声で意識は目覚めたのに、眠りから抜けだせない。妻の声も自分の意識も、現実なのか夢の中なのか混沌としている。周りの全ては闇で、その先に鬼火のような明かりがぼんやりと浮かんでいる。「何処を見ているの。視線が……」妻に言われて、瞼を擦ると、激痛が脳天を襲った。

数分で到着した救急車に乗せられて病院に運ばれた。長い検査の後で、医師から

「網膜動脈閉塞症……」と病名を告げられ、「視力の回復はない」と診断された。

勤務先に事情を説明して、先ずは半年間休職した。息子の世話を両親に頼み、妻と二人で六十日間の盲人生活訓練の合宿に参加した。妻は「一緒に勉強する」と言いながら気丈に振舞っていたが、時折不意に声の嘎れることもあった。

合宿を終了して、視力を失った辛さや悲しみに、少し慣れてくると、気になるのは仕事の事だった。

来年度の県の予算はどうなったのだろう。私は堪らなくなつて役所に電話した。上司は東京に出張していて、電話口に出たのは四月に県庁に新卒で採用された職員だった。当たり前障りのない世間話をしてから同僚に代わつた。

「久し振りだね。こうやつて電話で話していると元氣そうだが色々大変なんだろう?」

「お陰様で元氣にしています。ラジオが手放せなくなりました」。無邪気な会話は心地良くて、許されるなら、

いつまでもこうした雑談を続けたいと思ったほどだ。

「例の予算の件ですがどうになりましたか」

「アア、本省にあがってるよ。だからお前は余計なことを心配せずに自分の事に集中していればいい」

彼の口調は断定的だった。既に別の部署に配属される事が決まっている自分に、詳細を話す必要はないのだから。

数日して岡山県庁に勤務している、同期入省で同窓でもある友人が見舞いに来た。

「サポートしてくれる家族がいるから安心だ。奥さん相変わらず奇麗だね」小声で言った。醜くしまりのない彼の顔を思い出して不愉快になった。

「妻が美しいかどうかなんて私に関係ないよ」

「お前、少し卑屈になったな」「少しだなんてとんでもない」と言おうとしたが、それこそ卑屈の極みだと思ひ直した。

「気分転換に何か始めたらどうだ」

「そーよ」と言いながら妻が茶の用意をして部屋に入ってきた。

「息子も父親に遠慮して何も言わなくなったわ」

「子が親に何を遠慮する。遊びたければ自分から寄ってくるさ」

「だってこの前も……」言いかけて妻はやめた。

「どうしましたか」友人が妻を促した。

「息子がお父さんとお母さんの絵を描いたのよ。平凡な家族の絵だったわ。先生に褒められたと言って嬉しそうだったけど、『お父さんには見せない方がいいよね』って言うの。あの子なりに遠慮しているの。運動会に来てほしいとも言っているのに。あの子はカケッコが得意で去年は一等賞だったのよ」

「なんだ！ 運動会に行つてやらないのか。仕事の都合なら兎も角、仕事してないんだから」

「暇にしているから行けというのか。見えないのに行くことなんて嫌だ」

「子供や奥さんにこれからも世話になることが多いんだからサ」

「私はこれから一生家族の世話になりながら、時々家族の都合でペットのようにアチコチ連れまわされるとい

う訳か」

張り詰めた空気に動けずにいた妻が立ち上がり、台所に駆け込んだ。

「お前なあ」

「分かるよ。泣いているんだろう。呼吸が乱れているからね。伊達に休職してないよ」

「お前の気持ちは分かるよ。でも奥さんの気持ちにもなれよ。卑屈にならない方がいいよ」

「卑屈にもなるよ。私と妻はもう対等ではないんだ。世話をする者と世話を受ける者だから」

「しかし、お前が奥さんに与えられるものだって必ずあるよ。今すぐではなくても見つかる時が来るよ」

「そんなものがあるというなら、それが見つかるまで精一杯控えめに卑屈に生きるよ」

妻はこの夜、何時もより早く布団に入った。私は妻が寝入のを待とうと居間の椅子に座り、友人が言った「私が妻に与えられるもの」について考えたが、結論は出なかった。恐る恐る音をたてないように寢床に入ると

「貴方は私のペットなんかじゃない。貴方は私の夫よ」とだけ言つて妻は私に背を向けた。

例えば私が家族のペットだとしても、私の行動や感情を支配する紐を持つているのは妻ではなく、私自身に違いない。妻にどう言えばいいのか考えている内に妻の穏やかな寝息が聞こえてきた。妻がいてくれるのが心の底から有難かった。

復職してから半年になる。心配する妻を説得して、私は単身で、松江始発の山陰本線に乗った。宍道で木次線に乗り換え、三成駅からタクシーで『鬼の舌震い』に来た。車外に出て耳を清ますと、山々を通り抜ける湿った風の中に、枝や葉が擦れる渴いた音も混じっている。此処は溪谷なのだ。三年前に視力を失つて以降、私はこうして風の音ですら慎重に聞き分けることができる。車を降した運転手に

「ここが『鬼の舌震い』だろうね？」

「勿論ですよ。ここは吊り橋の手前の駐車場ですよ」
「人の気配がないね」

「夏休みも終わったし、紅葉には早いし、こんな田舎の溪谷に誰も来やしませんよ」

白杖で地面を数回叩くと、やはり、此処に立っているのは運転手と自分だけだ。ポケットの中でスマホのGPSが鳴った。妻が私のいる位置を確認しているのだ。鳴り終わるのを待って、運転手が

「ヤツパリ溪谷に行きますか？ 遠くはないけど、それなりに険しい道もありますよ」

「盲はダメだと案内板に書いてあるのかい？」

「口が悪いな」運転手が笑った。

「盲なんだ。口が達者で当然だよ」

「目も口も悪いジャン！」

自分の障害を率直に話題にしてくる人は少ない。気遣われるよりずっと心地いい。

「話をしながら私の前を歩いてくれればいい」

運転手が前を歩き、私はその足音を追いながら白杖を衝いて歩いた。その私の姿を、目が見えていた頃の自分が上空から見ている映像が脳裏に浮かんで消えた。吊り橋を渡り終える少し手前で、大きな滝が現れた。

豪快な音をさせて、山上から大岩に落ちた飛瀑が、そのまま、大小の岩の隙間を哀愁漂う音をさせながら滝壺に向かつて流れていく。三年前だったら見ただろう映像をイメージしながら

「なあ、これは、滝の流れの組曲だね」先を歩く運転手に言ったが、答えはなかった。

「おい、どこにいる」私は運転手の気配を探した。吊り橋のロープを擦る音がして

「はい」運転手が振り向いて答えた。

「何だ、そこにいたのか？」

「ええ」

「どうして黙っているんだ？」

「私も目を瞑って滝の音を聞いていました。私には、出雲の神々の祈りのように聞こえましたよ」

私達はその後一言も喋らず暫く佇んだ。

「……帰るよ。この先の溪谷は息子と一緒に来る」運転手に礼を言っ、宍道駅まで送ってもらった。早く妻と息子に会いたかった。

悲しみの果てに

内藤 真理子

「何ゆえあなた様がそのような咎を受けねばならぬのでしょうか。あなた様が申されたことなのですか」

「いや、私はなにも申してはおらぬ」

左大臣の源高由に向かってこのような口が利けるのは、皇女であった妻の篤宮しかない。

篤宮は、高由の美しい北の方である。切れ長の目は知的に輝き、一見冷たく意地悪そうにも見えるが、その内に秘められた優しさと強さが高由の心を捉えて離さない。

いずれの御時にか、豊かに国を治めておられた帝が急な病で崩御された。皇太子の冷貴親王が天皇に即位されたが病弱で子を成していない。

新しい皇太子には亡き天皇と皇后との間の和平親王、幸平親王のお二人が候補にあがった。

関白の藤木鯨鯨は、この機に帝の周りを藤木氏で固め

てしまおうと虎視眈々と画策している。とはいっても、鯨鯨には娘がないので帝との姻戚関係を持つに至っていない。摂政の藤木鯛衛門とて同じである。摂政と関白、同じ藤木氏はこのところ、何やらこそこそと密会を重ねている。

「左大臣の源高由殿は、源姓を賜り皇族を離れたといえ、亡き帝の弟宮、その上、娘は皇太子候補である兄の和平親王に嫁いでいるではござりませんか、今のうちに何とかしなければ、和平親王が皇太子に、更には天皇に、ともなれば、左大臣は天皇の外戚となり、大きな権力を手に入れて、藤木一族を脅かす存在になってしまう」

鯛衛門が言うのと、鯨鯨も我が意を得たりとばかりに、「左様。せっかく摂政関白を藤木で可り、右大臣も藤木鮎之助となつて、藤木一族の地固めが着々と進んでいるというのに……でも手は打つてござる」

鯨鯨は意気揚々と話を継いだ。

「先日、左大臣の所に出向いて、自分の間謹慎をするように申し渡して参りました」

「ほー、何か不都合なことでもありましたかな」

「いやいや『源高由に於いては、即位された冷貴天皇を亡き者として、娘婿の和平親王を天皇にするという陰謀を企てている』という密告があった。事実かどうか検分するまで当分の間、謹慎をするように、つてね、いや、作り話ですよ」

「そうでありましたか、さすがは関白殿、悪知恵に長けておられる。それでは、このことを噂として、巷に流すというのは如何かな」

「人聞きが悪うござるよ鯛衛門殿。でもそこに抜かりはございません」

「はあ？ では、もう」

鮫鱈は、分厚い唇を空洞のように開いてクワクワツと、下品に笑った。鯛衛門として、してやったりとばかりに赤ら顔を満足げにゆすっている。

噂はたちまち都中に広まった。

「邸の周りに人だかりができております」

篤宮の邸では家の者が大騒ぎをしている。高由は生き心地がしない。

関白から、真偽のほどもわからないまま謹慎を言い渡されたばかりだというのに、密告の話が早くも巷に知れ渡り、物見高い見物人が押し寄せているのである。

「篤宮は怖くないのか」

高由は平気な表情をしている篤宮に驚いている。

「根も葉もないことで騒ぎ立てる人々の何が怖いものですか。うちには家来もおりますし、左大臣には近衛兵が就いているではございませんか」

「私は怖い、どこかに逃げてしまいたい」

「まあ高由様、ほほほ、まるで童ではございませんか」

「ほほほか、そうであった、篤宮の申す通りじゃ、根も葉もないことがわかれば謹慎も解かれるであろう」

だが、翌日には、西の京にある左大臣の屋敷に火がかけられ、左大臣邸は全焼してしまった。

こんな大事に近衛兵は何もしようとはしなかった。

ここに至ってこれまでの一連の出来事は、藤木氏による身勝手な政治の力が働いた、左大臣の源高由を失脚させようという動きではないだろうかと思いついた。

「これは関白の陰謀ではあるまいか。左大臣の私の家が焼かれているのに近衛兵が何も出来ないというのは、私に無実の罪を着せて政治の中心から追い出そうとしている関白のたくらみであろう。近衛兵に対してそのような力を持つものは、帝を除くと摂政と関白だけであろう」

「まあ、なんと卑劣なのでしょう！」篤宮がお腹の底から怒りを絞り出すような低い声で叫んだ。

「馬鹿げた密告をでっち上げて、鯨鯨殿は恥ずかしいとは思われないのでしょうか。これが真つ当な政治と云えましょうか。近衛の兵士は神聖な仕事を放棄してまで、関白の意向を守ったのであれば、陰謀に加担したのも同じではございませんか」

篤宮は胸の内を高由殿に言ってしまうと、真一文字に口をつぐんで高由さまのお顔をひたと見つめたのであります。高由さまは小さく震えておられません。

「篤宮よ、私は怖い。私の力ではどうにもならないのだ。私はどこかの寺に逃げて出家をするつもりだ。そなたは、父帝からもらい受けたこの邸でつつがなく暮らすのだ」

高由はそう言うのと、篤宮の顔をじっと見つめて、思い

切ったように彼女に背を向け、わずかばかりの供のものを連れて夜陰に紛れて出て行った。

だが、時を置かずに高由は捕らえられてしまった。

高由が天皇を亡き者としようと企てたという、関白が考え出した偽りの密告が事実であったと為され、高由は都を追放され大宰府の権の帥としてかの地に流されたのであった。権の帥、というのは二度と政治に関われない役職であった。

高由は出家することを望んだが、聞き入れられなかったそうだ。何としても、捏造された罪の償いをさせられたいのだ。

子供たちも例外なく、次々に失脚して都から追放された。藤木氏の成し遂げた摂関政治とはなんとむごいものであろう。

新しい左大臣は、藤木鯖生氏が仰せつかったとか。藤木氏以外の者には住みにくい世の中になったものだ。篤宮の胸にはやりきれない諦めの思いが広がった。

※安和の変(969年)を元にしたパロディです。

人生の岐路

福本 多佳子

ゴールデンウィークの初日、従妹の絵里が受験校で知られる女子校へ入学した孫娘の香澄を伴い、美希の新居を訪れた。「制服姿を見せたいんですって」と微笑んだ。香澄は爽やかな笑顔で「学校大好きなの。授業も、クラブ活動もとっても楽しい」と言う。「あら、良いことね。学校が好きなら勉強も好きになるはずよね」卒業したカソリック女子校に親しみを持ってずに終わった美希と絵里は顔しながら顔を見合わせた。卒業後の美希は学校関係者とは没交渉、付近に行くことも皆無だった。

人は生きていく間に何回もの人生の岐路に立つ。美希が二十代だった七十年代には「就職か、結婚か」の選択に悩む女性たちがいた。「子供を産むか、産まないか」「転職すべきか否か」「親と同居か否か」「海外転勤時の選択肢」「離婚、再婚」それぞれの人生に様々な選択を促さ

れる時がある。岐路に希望通りの路が開けていることもある。周囲の人々のことを慮りながらの決断、悩むことなく自然と足が一方へと進んで行く。いずれであれ、大人であれば、最終的には自分自身が決定したものとして受け止める。けれど十二歳の少女にも親の勧めを快く受け入れ難く感じる時があった。中高の六年間は大切な思春期・青春期であったのに、ほとんどの期間を眠ったように過ごしてしまったことを美希は勿体無いと思うのだ。後になって母、法子は「この子は学校の話を一言もしない」と思いながらも、問うことを躊躇っていたと語った。ただ、その間、美希はこの六年分の無為な時間をいつか穴埋めしなければ、取り返さなければと考えていた。

美希が入学した学校の選択は両親が思いがけなく、あるカソリック女子校を見学したことで決定された。車でいくつかの私立女子校巡りをした両親が帰り道で、ふと先生の一言、「近くにも良い学校があるんですよ」を思い出し、立ち寄ったからだ。まさにヨーロッパの雰囲気そのものの校舎、花文様の鉄門から入ると、校庭にいた生徒たちが一斉に挨拶し、廊下の木の床はピカピカに磨

きこまれていた。ヨーロッパの雰囲気魅了されたのである。母が気に入ったのは女性として解るが、何故、父までと感じていた美希は卒業前にその理由がわかった。父が地方にある自分の母校の隣のカンリック女子校のことを口にしたのである。(お父様でも、やはりヨーロッパの雰囲気を漂わせる学園から出てくる女学生に憧れていたんだ)と確信した。

結局、美希は親の考えに反論する理由も見つけられず、入学となった。ところが、小学六年生で始まったクラブ活動で美術とダンスを楽しみ、中学では美術とテニスクラブに入学と計画していたのに、この学校にはクラブ活動も生徒会も無いとわかり、がっかりした。女子校特有の雰囲気にも強い違和感を感じた。一日一日と「公立中学に移りたい」という願望が強まったが、両親を説得できる自信も無く、小学時代のクラスメートに退学させられて、転校して来たと思われるのでは？ などと馬鹿なことまで考え始め、段々暗くなっていく自分を感じながら、毎日を漫然と過ごす習慣ができてしまった。そして誰とも交流する気になれずに過ごしていたわけだが、公

立中学から高校へ入学してきた数人の友人とは一緒に外出するようになった。彼女らから外の世界、自由な雰囲気を感じ取ったからだ。

後年、仕事に励みながらスポーツに旅行にと周囲の人々が驚くほど行動的になってからの美希は、よくあの六年間を眠りこけた猫のように過ごせたものだといふことながら信じ難かった。人との関わりを極力避けていた中学生以来、身体の鍛錬は自分でと、毎日、自己トレーニングに励んでいた。それに合わせ、料理に凝りだした以外は、怠惰な暮らし、先生の話もまともに聞かず、教室では空想の世界に没入する日々だった。ある日、たまたま、かじり読みした『ウォルター・ミティの秘密の生活』に笑ってしまった。

学校では祈禱書を手に出して朝の祈りから始まり、昼食前、そして授業後の祈りで一日が終わる。始業式、終業式は隣の教会でのミサから始まり、聖体拝領を済ませた信者の生徒たちが教室で朝食を済ませるのを待ち、式が開始された。当時は金曜日は肉食禁止、中学時代は担任修道女がランチ時に見回っていた。夕方になる

と、何人もの白い作業服を着た修道女たちが校庭を樂しげに散歩する姿を見かけることがあった。若い修道女の白い肌とピンク色の頬の素顔の美しさに見惚れてしまうこともあった。

倫理の授業はスペイン人修道女による公教要理の勉強から始まった。子供達にもキリスト教がわかるように、大事な場面の挿絵が載っている。全てが真実ですと強く言われると、中学生としては沈黙しがち、異文化の日本人には布教のための本と考えがちだ。けれどカソリックの学校に入学した以上、誰もそれを口にはしない。「貴女方は死ぬ前に洗礼を受けなければ天国に行けないのですよ」。誰も答えない。ある日「皆さん、人間は神により土から作られたものです。その証拠があります」「あら、証拠って？」と思っていると「皆さんが亡くなったら、身体は土に戻ります。それが証拠です」と微笑んだ。「日本人の修道女だったらどう言うのだろう？」と考えてしまった。日本史の先生も修道女。彼女は「ダーウィンの進化論」の記述に対し、「これは本当ではありません」と一言述べただけで先へと進んだ。「そうね。日本人だ

ったら、やはりそうでしょうね」

夏の宿題は十一歳で純潔を守るために殺された聖女伝。九月最初の授業で「皆さんの中にこの本を読んで、批判的意見を書いた人がいます。聖人を批判することは許されません」と怒っていた。翌年の夏休みの課題は各自が選んだ聖人伝。「この中に『マルチン・ルター』を選んだ人がいます。彼は聖人ではありません。悪人です」と断言。「カソリックの立場では、そうだけど……」と思いながら、また誰も何も発言しなかった。

勉強への熱意が見えない娘を見ていた母、法子は「大それた学になんて行ってくれなくて良い」と言い出した。けれど本人は「就職する為にはどこでもいいから大学に入らないと」と考え始めた。このまま無為に過ごして良いのだろうかと心の中で自問自答しながらも「将来ヨーロッパに住むと決めているなら、キリスト教文化を知るのには良い経験」と自分に言い聞かせていた。高校の学年担当は明るい女性で「私が修道女になったのはとても素晴らしい男性を好きになったからです。彼とこの世だけで結ばれるより、永遠に結ばれることを願って修道院入りを

決めたのです」と目をキラキラさせて話していた。彼女は美希が高三になった年、布教のためにポリビアへ向かった。しばらくすると太平洋上の船で知り合った男性と結婚したと言うニュースが伝わってきた。次の担任修道女は透けるような肌に縁無し眼鏡、物静かな女性だった。彼女は終身請願のためにローマへと飛んだ。けれどヨーロッパで修道女を辞めたと言うニュースが伝わってきた。しばらくして「東京の大学で教え始め、日曜には教会のミサにいらっしやる。おしゃれで、とても同じ女性には見えない」。程なくして、彼女も結婚したと聞いた。担任修道女二人が修道院を去ったわけだ。彼女たちの人生の岐路での決断は、人間味に溢れていて素晴らしいと思っただ。その頃、修道服も変わった。それまでのくるぶし丈の長いローブ状の衣装に黒い頭巾から、髪の毛が見え、ひざ下丈のスカートというシンプルで活動的な服装に変わり、修道女をスペイン語でなく「シスター」と呼ぶことになった。教会でのミサも日本語で執り行われることになった。ラテン語のミサが懐かしいと感じる人もいた。高三になると、もう少しの辛抱で閉じこもっていた巢穴

から出られると感じ始めた。卒業前のクリスマススイブは学校に泊まりがけでの深夜ミサ。卒業式には出席した美希だが、謝恩会に出る気にはなれなかった。

大学を卒業、念願だった就職が実現すると、やっと自分の世界が開け始めていると感じ、新鮮な空気に包まれた。新入社員の合宿先ホテルで中高時代の同級生と出会うと、「卒業してから学校へいらしたことがある？」と尋ねられた。「一度も」と答える美希に「学校からの依頼で受験の話をする為に行ったけれど、あそこはいまだに東京に残る中世ヨーロッパの遺物でした」信者で優等生でもあった彼女も同じ感覚で過ごしていたのだ。その後一年ほどで退職、ドイツへ行ったという話を聞いた。

念願のヨーロッパ独身生活も体験、少女時代の想像以上の経験を積んだ美希は、友人宅で気があう男女数名での食事を楽しんでいた。同窓会に参加したことが無いと言うと「小学校のクラス会が一番面白いよ」と彼女にも言う。そこで卒業後ほぼ六十年、初めてクラス会に出席した。同じクラスに小学校近くの文具店の息子がい

た。その店に立ち寄ると、応対してくれた女性が「年齢からして、義兄のことですね。このビルの三階に住んでいます」という。翌日には彼からメールが届いた。「今年是我々の古希を祝してクラス会が予定されています。担任の先生も九十年代でまだ矍鑠かくかくとしてお元気、先生も参加ご希望です。来週、幹事から詳細メールを送ります」予約されたレストランに着くと、先生の懐かしいお顔、九十年代とは思えなかった。やはり教師だった奥様といらしていた。先生がクラスの問題児との思い出を話して下さった。すると美希と仲良しだった山川恵が口を挟んだ。「私、十何年前かにタクシーに乗ったら、運転手に『山川さんだね。僕、石田だよ』と言われてびっくりしたの。子供の頃と変わらぬ温和な顔立ちと優しい口調の恵だけに、彼もすぐわかったのだ。更に「美希さんとはずっと同じクラスだったわね。貴女が転校してきた日の洋服覚えてる。モスグリーンのセーターだったわ」そう言ったのには、美希もびっくりだった。

奥様の体調を憂えた先生が先に失礼しますと立ち上がった。別れ際に「僕らは知人のおかげでK女学院の教会

で結婚式を挙げました。素晴らしい所だった」とおっしゃった。(えっ?) あのお御堂で結婚式を挙げるのが出来たの? でも、それが母に良い学校があると言った理由?) あの時代、先生も母もヨーロッパ世界の雰囲気きふきに包まれ、幻惑されたに違いない。「多感であるべき思春期の六年間:その後の人生の岐路での過ちよりずっと重く感じる、悲しい」。その夜、ベッドに入ると、アルプスの村のチャペルで結婚式を挙げた友人の顔が浮かんできた。ウエディングドレス姿の彼女の満面の笑顔。お嬢さんをスイスの寄宿学校に送ったと言っていた。英仏独といった語学を身につけ国際人となることを願っての留学と聞いたが、結婚式での感動が留学先決定の大きな理由では?(そういえば、カンリツク小学校へ絵里を送り込んだ公立校出身の叔母は、母の代理として私の学校での式典に参加した後、学校が企画した社会人用の語学・料理クラスに参加していた。あれもヨーロッパの香りに惑わされたの? それが後に絵里ちゃんをカンリツク校に入学させたキッカケとなったの? あらあら……) 様々な想いに包まれたクラス会の夜だった。

活 動 報 告



素描 福本 多佳子

何でも書こう会

昨年は新型コロナウイルスのため、一昨年に引き続き年初からZoomでのオンライン書こう会を余儀なくされましたが、皆様に慣れていただいてスムーズに進められましたうえ、遠隔者の方も加わって、毎回多くの方が参加されました。関係者のご尽力に対して、改めて厚く御礼申し上げます。

テーマにつきましては文字通り何でも書こう会で、森羅万象、内外の政治経済、科学技術、歴史、文化、絵画、音楽から法話、紀行文、食談、雅文、戯文にいたるまで、様々な800字エッセイがよせられて、それに対して皆で喧々諤々、楽しい半日を過ごしております。

文章の内容に関することもさることながら、自分の言いたいことを、如何に相手に分かりやすく表現するか、ということを重視したいと考えております。

あるときは簡潔に、またあるときは比喩や諧謔を交えた、個性豊かなウイットに富んだ作品を追い求めていきたいと思っております。

昨年何人も新しいメンバーが参加されましたが、今年もお知り合い、お友達などお誘いいただいて、一人でも多くの方と文章を書く楽しみを共にしたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

何でも書こう会は毎月2回開催で、プロマネは原則として前半の部は志村、兎玉、後半の部は大森、三春が担当しておりますが、昨年中央、三春から吉田真人に選手交代致しました。引き続きよろしく願います。

また昨年十月からの緊急事態解除に伴い、十月後半の部から待望のオリンピックセンターでの対面型書こう会を再開いたしました。

これにつきましてはこの一年半の実績をふまえ、遠隔地の方にも引き続きご参加いただくを考え、当面月二回、対面型、Zoom併用スタイルで行っておりますが、今後の対応につきましては皆様方からの忌憚ないご意見、ご要望をたまわりたく、よろしく願います。

(プロマネ 大森・志村・兎玉・吉田)

掌編小説勉強会

コロナ感染症の拡がりや緊急事態宣言が続いたりしたため、やむをえず、前年同様、Zoomを使つてのリモート方式で勉強会を実施してきた。リモート形式での参加が難しいメンバーもいて、参加者が限定されたことは残念だった。しかし、幸いなことに、コロナ感染拡大が下火になったので十一月度だけは一年十月ぶりにオンラインピクセンターで開催することが出来た。勉強会後の懇親会も久しぶりに賑やかに行えた。計六回の開催で三十七作品が投稿されたが、コロナ禍で外食を控えた反動か、グルメを題材にした美味しそうな話もいくつか見られた。恋愛小説、心理小説、時代もの、サラリーマン小説、家族物語などジャンルは多岐に亘った。

いくつかの投稿作品を紹介する。(作者五十音順)

「中国今昔物語」内田豊文作

九十年代から今世紀初頭の中国の発展ぶりを語る。

「ひょうたん島の歌」大塚喜子作

夫と死別した孤独な女が出会った男、心の葛藤を描く。

「宝くじ無情」小道周帆作

下町の庶民のつましい生活、老後の楽しみを綴る。

「バリさんの夢」喜多川雅人作

主人公は靴箱の靴たち。靴の持主の行状を語り合う。

「太か男 前・後編」今日あした作

三人の男兄弟を取り巻く家族の戦前・戦後の物語。

「不思議な南の島」とんだ玉三郎作

原始的な暮らしをしている島に迷い込んだ夫婦の話

「B級グルメ」中村アキヤ作

商社マンの呑み会では世界各地の旨いものが話題。

公開サイトに二八五作品が新たにアップされた。

(プロマネ 児玉・内藤)



サロン21

昨年もうイルス騒動のあおりを受けて、本分科会は各回ともオンラインで開催いたしました。

会合後の一杯飲みながらの反省会ができないのは物足りないのですが、地方在住の方、遠方への外出が難しくなった方も参加できるメリットがあり、今しばらくは、オンラインでの開催を続ける予定です。

パンデミックの歴史、財政出動の是非、環境問題、明治維新の英傑の人となりなど幅広い分野にわたって意見交換を行いました。エマニュエル・トッド、マイケル・サンデルなどの知の巨人たちの主張についても勉強し、また、岸田新政権の課題についても考えてみました。

令和四年は益々激動の年となりそうです。米中対決が先鋭化し、しかも、米中とも国内に権力闘争と社会の分断という爆弾を抱えています。翻って日本でも難題が山積しており、引き続き情勢を注視しつつ、会員間で意見交換し、研鑽を重ねていくこととします。

令和三年の各月のテーマとプレゼンターは左記のとおりです。(敬称略)

一月	地球に住めなくなる日	杉浦 右藏
二月	大分断	下山 健夫
三月	Cancel Culture と Wokeness	森田 晃司
四月	新しい世界	
五月	世界の賢人十六人が語る未来 財政赤字の神話	大平 忠 野瀬 隆平
六月	Hidden Hand 見えない手	下山 健夫
七月	西洋の侵略を防いだ 日本の戦意と外交	浅井壮一郎
八月	夏休み	
九月	大久保利通に学ぶ	大平 忠
十月	パンデミックの正体	
十一月	ウイルスとワクチンの歴史 衆議院選挙について	森田 晃司 下山 健夫
十二月	実力も運のうち 能力主義は正義か	野瀬 隆平

(プロマネ 下山・森田)

前年に続くコロナウイルス禍の中、前年度同様のオンライン句会が十月まで休まず続いた。メンバーの熱心さは私にとって学ぶところが多い。プロマネのもと参加者が画面の句会に慣れてきていたが、句座を纏める私がかなかオンライン句会を使いこなせずにメンバーをひやひやさせ、困らせていたことは否めない。

ようやくオンラインピックセンターに集まることが叶った十一月四日に吟行地を菊花展開催中の新宿御苑として、晴天の日に恵まれ敢行できたことは嬉しい収穫であった。何より顔を合わせて句会することは楽しく、その後のビールも美味しかった。以降は年末まで代々木オンラインピックセンターでの句会を続けている。コロナ騒動の早い終息を祈っている。

新入会は土屋しおんさん。四月からの参加であるが、八月以降、ご自身の執筆の都合で句会を休まれている。

水底の影に恋してあめんぼう
裸婦像の視線を追へば夏燕
浮かみきて秋の陽喰らふ鯉の口
菊を守る若き庭師の寡黙かな
着膨れて地酒選りをり香に酔ひつ
五輪塔に地の湿り伸び冬めける
焚火果つ闇の深さを漲らせ

.....

花匂ふ河畔の灯りともる頃
鐘の音や蟋蟀限りなく産まれ出づ
梅雨宿し青竹のみな傾けり
地図帳をなぞらふ旅や夏灯
床の間の花整へて今日の月

森田 元斐

一句目、俳句では花と句にあれば桜を指す。桜の香は繊細で幽遠。五句目の花は仲秋の満月を季語として秋に

咲く花、竜胆とか菊を部屋に整え月の出を待つのである。
二句目、蝌蚪はおたまじゃくし。水の中に群れ重なり蠢
いている。春の生命力に溢れて生命力そのもの。

春めきて信号待ちのストレッチ

宮原 風

片頬に薄荷ドロップ昭和の日

フランスパン抱へ踏切待ち薄暑

八月の教室に架けよゲルニカ

桐一葉戸籍一人になりにけり

春めいてくると縮こまっていた体を伸ばしたくなる。

信号待ちの時間も活用したい。春の躍動感。四句目、季
語八月は動かない。ピカソのゲルニカの絵である。反戦
の象徴。生徒がどの世代かは読み手に任されている。桐
一葉の句にはきっぱりと境涯を諾う作者がいる。

新田ゆふき

一步前へ吾を引く力春兆す
片頬に陽の戯れや春寝覚め
恒星の燃え尽くる日か春残照
誰が魂か肩に触れたる蛍かな
蛸の寄せては返す山の潮

なにかちょっと元氣や勇氣が欲しいときがある。今日
の近づく春の氣配がそれなのだ。四句目、蛍は光の動き
を見るもの。魂を連れて飛んで私の肩に触れた、とは作
者の感度。五句目、蛸の声を寄せ来る波のように感じた
作者。山自体が海のように蛸を懐に入れている。

木の芽風村営バスのレストラン

中村 晃也

風に舞ふ花びら午後のミルクティー

サヨナラの声風になる蛍の夜

夕入日に灼ける樹肌や百日紅

伏せて待つ盲導犬やるのこづち

俳句は一見関係のなさそうなもの、と季語を合わせ、確かな映像のある俳句にすることが大切。晁也俳句はそこが上手い。木の芽風の吹く場所にストライキの看板、桜が舞う下の紅茶、蛍の光の中のさよならの声、伏せている盲導犬の鼻先に牛膝。句の中の二物は相乗効果を持つ。

寒雀軒を跳ね跳ぶ音せはし

長尾進一郎

水溜りの乾くに足らぬ梅雨晴間

梅雨明や空を取り合ふ雲の丈

店の軒借りて信号待ち炎暑

目の合ひし団栗ひとつ手に取れり

句に実在感がある。二句目、夕立とは違って、また降り出しそうな湿気やさつきまでの雨の強さが表現されている。三句目には入道雲の大きさや勢い、四句目、日差しを避けつつも、目の前の交差点の強い日差し……と句の中の光をレンズを通すように句に落とし込んでいます。

星冴ゆる望遠鏡に土星の輪

内藤あした

駅中のワゴンセーラーは春の色

ぬめぬめと蠢く光沼の蚪

ヤモリの子窓に張り付く指五本

引き出しは俳句三昧秋麗

明るい句柄が特徴。また、句の材料の範囲が広く楽しい。駅の春着のワゴンを見て、沼の光の中を蠢くおたまじゃくしをのぞき込む、窓に張り付いたヤモリの子の指を見つめる。どの句にも作者のリアルな視線がある。俳句関連の物が増えて句が生まれ出る抽斗は私も欲しい。

廃校を見下ろす丘の八重桜

土屋しおん

風薫るペダル心地に買ひ忘れ

乾燥機音を背びらに梅雨読書

走り梅雨鬼籍の人とすれ違ひ

夏浅し青々の富士見て昼寝

俳句には大切な展開がある句が並ぶ。二句目、買い物に出たのに気持ちの良い五月の風に買い忘れをした。梅雨の始めのどしゃぶりのなか、ふとすれ違った人が鬼籍の人だったような気がして振り返る。小説的でそのあとどうなったのだろうかという想像する楽しみを持たせてくれる。

田の果ての小さき古墳桃の咲く
高橋由紀子

鷺の子の踏みしめて行く青田風
夏風邪や独り碁の石そのままに

新涼や雨上がりの芝しやしきと
残月を横切り冬の始発行く

一句目、小ささが桃の花と相俟って効果的。そこに向かつて春の歩を伸ばすのであろう。夏風邪は油断ならぬ。クーラーの下で独り碁という楽しみもしばしお預けである。立秋を過ぎても暑い日が続くが、雨上がりの芝に秋を感じている作者の繊細な季節感が心地よい句。

首藤しず

立春の光つめたき弥勒仏
浅間とほく花菜にねむる駅舎かな
新涼やしゆるりと薄き鉤かず
かなかなや遠くに何を忘れ来し
立冬の鮒ゆつくりと釣られけり

熱心に作句を続けられ、句会の質問が鋭い。勉強させてもらっている。立春の光が冷たいと詠い、菩薩像の黒光りの質感の冷たさを詠う。鉤をかける音に秋の涼味を感じる。カナカナと鳴く蛸を聞けば人は空をみあげ、少しの寂寥感を持つ。繊細な感覚を句に写し取っている。

大寒や恙なしとのエアメール
志村 良知

駅からの急坂桜代替はり
桜薬降りきて薄き轍かな
訃報受く外に名残の法師蟬
恩師米寿帰路に鯛焼手に温し

一句目、このコロナ禍、遠くにいる人のことは心配。年が経てもあの時は……と大切な思い出もありそう。駅前の桜が代替わりした。しかも急坂。開発が進み、落ち着いてきた街並みを思う。恩師の米寿祝いの帰りの鯛焼き。祝いの集まりの余韻が相俟ってほこほこ温かい。

初日記手廻しの鉛筆削

斉藤まさお

エコバック提げて急坂薄暑かな

籠り居の心乾きし五月闇

なにもかも知った顔して鬼やんま

秋の日や芝生の上の脱ぎし靴

初日記と鉛筆削り、二物衝撃の句。「さあ、今年的一年は……」という意気込みを手廻しという措辞が余すところなく表す。籠り居は二年も続く。梅雨時の暗闇のなか、心乾くことを飲み仲間と愚痴りあうこともできない。鬼やんまが物知り顔だという観察は絵画的で俳味十分。

助手席に子の笑顔ある初荷かな

大津そうかい

登山バス待つ駅前の初燕

蛇苺赤を極めし寂しさよ

夏の蝶追ふ子の魂さらひゆく

羽ばたける鳩や光のしぶき燦

初荷の助手席に子の笑顔ばかりでなく、穏やかな運転手の笑顔まで浮かぶ。夏蝶は大型が多く、光の中をよぎる。まるで子の魂を攫うための飛翔と写生した。鳩の句も大気の光が働く句。浮かび出た鳩の羽搏きから生まれた水粒に光が入り込みしぶき自体が光となった。

春めくや男体遙か畔歩く

安藤 晃二

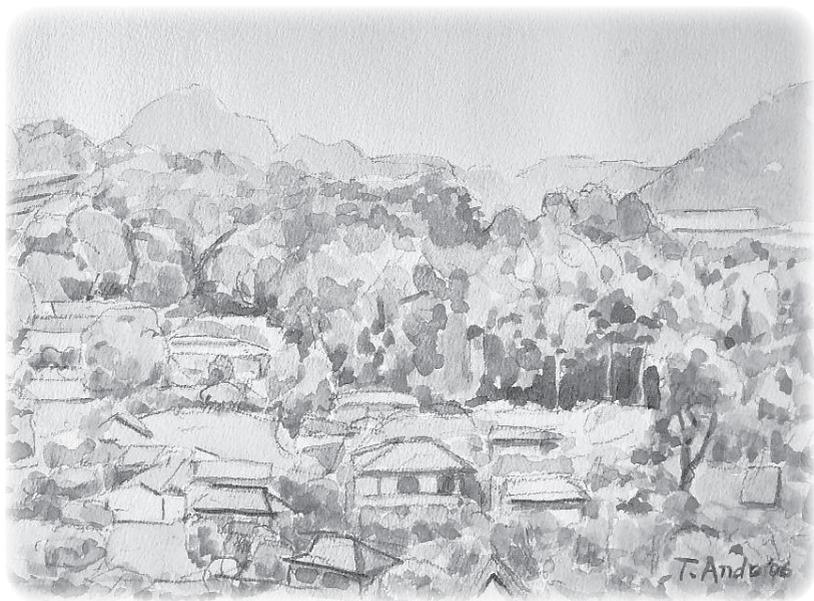
果てしなき多摩の起伏や梅盛る

百日紅バックミラーを零れ出て

涼新たプロゴルフアーの一番ティー

長屋門守る櫓や秋の声

多摩川と境川との間の起伏に富んだ広大な多摩丘陵。
小高い丘の梅が薫る中に立った作者。百日紅は夏の高木
の花が少ない時期に溢れ咲き、愛車のミラーに映える。
国分寺の旧本田家長屋門を思い浮かべた。俳句は旅の文
学、叙景詩である。その基本を踏まえる句。



ペン川柳

二〇二一年も前年に引き続きコロナ禍の制約で、ほとんど投句会となりました。しかし、十一月から新規コロナ感染症の収まりが見え始め、対面川柳会を再開したところ、久し振りの会だったので、合評会もその後の懇親会も、大いに盛り上がりました。

川柳はやはり新型コロナに関する句が多く、コロナ生活の困難を嘆くものから、早く克服しようとの意欲に溢れたものまで、幅広く取り上げられています。

十二月の勉強会からは投句と合評会を組み合わせた新しいスタイルに変更しました。

今後ともペン川柳会のご支援宜しく願います。

以下ペン川柳子の活動をご紹介します。

【晃二】

(安藤晃二)

「飛・飛ぶ」…ふるさとへ高飛びされて手足出す

「歌」…防人へ発つ夫に万感万葉歌

「食・食べる」…今日もまた三食コロナの悪夢付き

「食・食べる」…禄を食み家族人質働いた

「冷・冷やす」…冷たいよ揺らし呼び込む氷旗

晃二さんは俳句的川柳が得意です。また時流を巧みに詠んでいます。「ふるさとへ高飛び」は元日産のゴーン氏を想起させます。「防人」は武蔵の国に歌碑があるそうです。数少ない東国の万葉歌です。

【安兵衛】

(山縣正靖)

「歌」…今は夢放歌高唱花見酒

「欠・欠ける」…あの頃は欠食児童今メタボ

「化・化ける」…お化けなら四谷か番町永田町

「荒・荒れる」…大荒れで総理辞めたら株上がり

「群・群れる」…温泉でばかりゆったり猿の群れ

二句（四月「欠・欠ける」、七月「化・化ける」）が最優秀句に選ばれました。戦中戦後の困難を乗り越えた作者ならではの句です。また、時事問題を巧みに詠んでいます。お化けは、四谷怪談のお岩さんや、番町皿屋敷のお菊さんに劣らず永田町では魑魅魍魎が跋扈しているようです。この句の語呂が良いですね。

【井波】

（稲宮健二）

- 「欠・欠ける」…マスク美人欠けたとこ埋め妄想す
- 「冷・冷やす」…灼熱禍冷えたビールが解熱剤
- 「荒・荒れる」…寿命延び荒ら屋先に崩れかけ
- 「命・命じる」…マスクなし命生き生き喋りたい
- 「打・打つ」…眉唾か打出の小槌MMT

十一月の「打・打つ」は最優秀句に選ばれました。コロナ禍で財政支出は増え、一方インフレが起きない範囲内では政府支出は問題ないとするMMT派もいます。「寿命延び…」は高齢化の新しい問題ですね。でも長生きしましょう。

【明迷】

（八木信男）

- 「満・満ちる」…享年は満にしてねと妻がいう
 - 「歌」…歌ダメで我が師の恩も仰がれず
 - 「悪」…悪ノリで出世が消えた3次会
 - 「化・化ける」…まだ辞めぬベテラン化石と言われても
 - 「冷・冷やす」…割り勘も円まで払う冷めた仲
- 明迷さんは一回お休みでしたが、十一回の参加で十回優秀句に選ばれました。ペン川柳大賞です。現役で忙しいなか、川柳会の盛り上げに大いに貢献してくれました。八月の「冷・冷やす」は最優秀句でした。どの句も発想が素晴らしいです。

【だし】

（大野 暁）

- 「飛・飛ぶ」…この次は核弾頭が飛んで来る
- 「食・食べる」…朝食が満員電車でデブな奴
- 「悪」…税金を悪い奴ほど払わない
- 「化・化ける」…世界中見事に化かす新型コロナ
- 「打・打つ」…あら嫌だ打つ真似をしてシナ作る

作者は時事問題を巧みに川柳に詠み込んでいます。北朝鮮のミサイル問題は脅威ですし、高所得者の納税率の低さは、格差の拡大とともに耳目を集めています。コロナの時期に車内で食事を摂る人もいるのですね。

【零門】
れいもん

(松谷 隆)

- 「飛・飛ぶ」…ローカル線飛び交う言葉お国ごこ
- 「歌」…持ち歌を先に取りられて出番なし
- 「悪」…難聴も悪口だけはよくキャッチ
- 「化・化ける」…大化けのルーキー達で首位に行く
- 「群・群れる」…イケメンに群れる熟女の意気高し

八句が優秀句に選ばれ、六月「悪」では最優秀句を獲得しました。カラオケで持ち歌を先に歌われることはよくありますね。阪神タイガースは昨年レギュラーシーズンではそれなりに頑張ったものの、最後はクライマックスシリーズファーストステージであえなく敗れてしまいました。今年は寅年ですから、新たな発展を期待したいものです。

【火酒】
ウオツカ

(三 春)

- 「満・満ちる」…カモにされ満更でもないヒヒ親父
 - 「欠・欠ける」…通夜の酒欠点だらけの友徳ぶ
 - 「悪」…ちよい悪を指摘したはずがちよいデブに
 - 「命・命じる」…痛風にあん肝ビール命がけ
 - 「打・打つ」…人生の打ち身捻挫にサロンスパ
- 最優秀句に二回（二月「満・満ちる」、四月「欠・欠ける」）選ばれました。幅広い視点から自由な発想を展開して、川柳子を楽ませています。「サロン＋スパ（温泉）」の捻りが面白いですね。世話人もビールにあん肝大好きです。ヒヒ親父のにやけ顔も印象に残ります。

【損得】
そんとく

(細谷 博)

- 「食・食べる」…新型コロナ次々新種で食い荒らす
- 「悪」…悪いのは飲屋ばかりと押しつける
- 「冷・冷やす」…アフガンで冷たく飛び立つ米軍機
- 「打・打つ」…遊びなら飲む打つ買うで三刀流
- 「群・群れる」…群れがイヤ言う奴ばかり徒党組み

十二月の「群・群れる」は最優秀句に選ばれました。昨年は、大谷翔平の投手と打者の二刀流が話題になり、MVPなど多くの賞を獲得しました。米軍のアフガニスタンからの撤退、日本政府の対応などは多くの課題を投げかけました。

【**酔帝**】

(曾山清徳)

「飛・飛ぶ」…飛ぶ鳥を落として食べる塩とタレ
「歌」…呆け進み歌も忘れたカナリアに
「荒・荒れる」…また飲んだ一荒れありそ明日の朝
「打・打つ」…妻と揉め打ちやるはずが口で負け
「群・群れる」…腰曲がり杖をついても群れたがり
家庭内の様々なやりとりを巧みに表現しています。結局どちらが強いのでしょうか。どうも作者が劣勢のように見えます。腰が曲がっても頑張りましょう。

【**酔深**】

(平尾富男)

「満・満ちる」…月満ちて出でたる男子我に似ず
「満・満ちる」…部屋に満つ匂いの元は我にあり
「食・食べる」…食べたのにそれを忘れて又せがむ
「悪」…なあ息子悪女が好きは父譲り
「化・化ける」…情けない化した女に二度惚れる
作者は男女の世界を詠むことにかけては名人級！素晴らしい能力を発揮します。美女と悪女が溢れています。加齢による苦しみにじみ出ています。

【**酔雅**】

(西川武彦)

「飛・飛ぶ」…噂飛ぶ昔転勤今介護
「化・化ける」…化けるのが下手で出世の道外れ
「冷・冷やす」…冷や飯を食った分だけ強くなり
「命・命じる」…命じても耳が遠くて空回り
「群・群れる」…群れるのを避けて出世の道外れ
九句が優秀句となり、内二句（八月「冷・冷やす」、十月「命・命じる」）が最優秀句に選ばれました。現役

時代への思いが溢れています。「出世の道外れ」が二回出てきますが、作者は出世の道でも堂々と真ん中を歩いてきました。命じられるのは作者自身だそうです。

【我々好】
ウイスギ

(浜田道雄)

「満・満ちる」…満願にほど遠き日々この一年

「飛・飛ぶ」…森の火事飛び火で菅笠焼け焦げた

「欠・欠ける」…今の世に欠けるはたしなみ譲り合い

「食・食べる」…食い意地のツケが回った血糖値

「悪」…旧友に出会って名の出ぬ間の悪さ

二句(五月「食・食べる」、六月「悪」)が最優秀句に選ばれました。「食い意地…」は身につまされます。旧友でなくても、名前が出てこないことはよくあります。

加齢とはうまく付き合っただけゆくしかありませんね。「菅笠…」は二月に詠んでいます。素晴らしい先読みですね。

【享々】
ただ

(塚田 實)

「飛・飛ぶ」…飛沫よけ対策したが客は来ず

「歌」…大会議ふと気がつけば四面楚歌

「食・食べる」…冷や飯を食わされたこと数知れず

「化・化ける」…何事も老化のせいと医者曰く

「荒・荒れる」…テレワーク家の天気は荒れ模様

優秀句には八句選ばれましたが、そのうち三句(二月「飛・飛ぶ」、三月「歌」、九月「荒・荒れる」)が最優秀句でした。サラリーマン生活がにじみ出ています。これからも先輩を見習いながら川柳に励みます。

(世話人 塚田 實)

ペン・フォト句会

フォト句会では、出題された一枚のお題写真に各人が句を考える「付け句」と、自分の好きな写真に句を添える「自由句」の二種類を、各人が毎回二句ずつ提出し、句会を楽しんでいます。

令和三年度もコロナ禍の影響を少なからず受け、五月はオリンピックセンターに集まることができず、付け句のみをメールでプロマネに提出し、全員に配布された「付け句一覧表」の中から再びメールで投票するという方法で行いました。この回は自由句の提出は行えませんでした。

一方状況が許される場合は、出来るだけオリンピックセンターに集合して句会を行いました。付け句と異なり自由句は、ホワイトボード一面に貼った全員の作品を目の前にして各人が投票します。その後作品一つ一つに対して、投票した理由や良い点悪い点などをコメントとして、皆で言いたいことを言い合うため、一堂に会さないと議論が盛り上がりがないという事情があります。

九月、十月のようにメンバーの半分しか出席できない回もありましたが、年度納めの十二月にはフルメンバーが揃うことができました。また全員が楽しみにしている句会後の懇親会や、句会の無い八月に恒例となった納涼昼食会も、軒並み中止せざるを得ませんでした。懇親会は秋ごろから復活しています。

こうした中、フォト句の生みの親である中村晃也さんが十月でプロマネを勇退され、十一月からは松田・長尾でプロマネを担当させて頂くことになりました。

平成二十二年の創設以来、中村さんの創意工夫と指導力で、フォト句会をここまで成長させて頂いたことに感謝と敬意を表します。今後も及ばずながら、これまで通り和気あいあいの楽しい会を続けてゆきたいと考えます。引き続きご指導をお願いします。

なお俳句や川柳とともに写真にもちよつと興味があるという方は、ぜひ一度句会を見学してみてください。どなたも大歓迎です。

(プロマネ 松田昌康・長尾進一郎)

英語を読む会

英語文献（報道記事、論説等）メンバーが輪番制でプレゼンを行った。

開催月	題 名	担当名
1 月	The Uninhabitable Earth by David Wallace-Wells, columnist, 地球問題、全米ベストセラー同書への賛辞集を読む	安藤
2 月	Big week of Australian Open tuneup tournaments set to start by AP, 全豪オープンテニス、開催者側のコロナ感染防止対策	安藤
3 月	Where the World Wants to Work: the most popular countries for moving abroad 英国の送金会社 Remitly 社が纏めた外国人の移住希望国	鎌原
4 月	The Coalition of the Un-Woke by Josh Hammer, Opinion editor, Newsweek, 米国に台頭する neo-Marxism による wokeness, "cancel culture," and "anti-racism." に対し共同戦線構築を呼び掛ける	森田
5 月	EU kicks off race to produce advanced semiconductors 自動車業界の EV、自動運転化への高度な半導体部品対応への動き	安藤
6 月	WWII codebreaker Turing honored on UK's new 50-pound note 英国の £50 紙幣肖像が女王から、6 月に第二次大戦でのナチ暗号解読者に替わる。イングランド銀行の虹色の垂れ幕、その悲しい物語も	安藤
7 月	Here's Why Your Symptoms May Be Worse After Your Second COVID-19 Shot アメリカの verywellhealth Web に CDC の丁寧な解説	安藤
9 月	Australian Prime Minister hints at end to 'Covid zero amid protests and record infections 豪州のコロナ対策改変、英国事情など	鎌原
10 月	Discover 14 Current Online Learning Trends by Friedman & Moody パンデミック下、米国の大学教育へのオンライン導入が大きな展開を遂げている。その傾向と将来を占う	下山
11 月	Arizona Senate Report on the Maricopa County Election Audit Highlights 49,000 Questionable Votes, Asks AG to Investigate 昨年の米大統領選、アリゾナ州で選挙結果に齟齬、問題が拡大中	森田
12 月	Was COP26 Glasgow Pact A Win For Climate? Time Will Tell グラスゴー合意はギリギリの妥協、道筋はできたが、後は各国の努力にかかる。地球上の人間生活の存亡危機に直面する非常事態である	安藤

何でも読もう会

二〇二一年に読んだ本

この四月で「読もう会」は満五年になりました。

昔の文豪たちの作品は減り、下記の通り現役の作品が目立つようになりました。掌編小説を書く人たちは沢山読んで、彼ら彼女らの推薦図書には初めて耳にする作家、作品もあります。面白い、中身が濃いものも多く、さすがに良いものを推薦してくれます。

一方で現代小説の複雑さを感じます。恋愛物にしても昔の純愛物、青春物は影を潜め、心理の綾が複雑で或いは主人公の心理が不安定だったり、社会とうまく折り合えなかったりと読む側を戸惑わせます。ひたすら前を向いて生きてきた自分たちを振り返ることも一再ではありません。

昨年はコロナ騒動に明け暮れました。オンライン（Zoom）による活動を強いられ、顔を合わせたのは年末の二ヶ月のみでした。しかし、遠隔地の方や健康上教室に来られない方にとっては福音となりました。

二月 『活動寫眞の女』

『茂吉秀歌 上下』

三月 『雪沼とその周辺』

『子午線を求めて』

四月 『女たちのジハード』

五月 『アウト』

『檸檬』

六月 『天地明察』

七月 『塩狩峠』

九月 『青葉繁れる』

『春は馬車に乗って』

十月 『星々の舟』

『新釈諸国噺』

十一月 『武蔵野インディアン』

『赤い花』

十二月 『舟を編む』

『女のいない男たち』

浅田 次郎

佐藤佐太郎

堀江 敏幸

堀江 敏幸

篠田 節子

桐野 夏生

梶井基次郎

冲方 丁

三浦 綾子

井上ひさし

横光 利一

村山 由佳

太宰 治

三浦 朱門

ガルシン

三浦しをん

村上 春樹

（世話人）
首藤 静夫

ホームページ関連

コロナ禍で、対面での活動を完全に止められた状況でスタートした今年、ホームページは大きな変化を遂げた。

これは、有志によるホームページ改革委員会が一昨年来年度ものリモート会議やメール交換で詰めていった成果である。

まず、ホームページの顔、トップページ。毎月更新されるのはトピックだけで様式は変わってないように見えるが、一年間に亘って地道で着実な進歩を遂げ続け、一月と十二月ではすっかり様変わりした。

次に、読者へのインパクトが非常に大きかったと想像される『800字文学館』、『エッセイコラム』と『会員写真館』の掲載様式変更。作者が掲載の様式を決めて投稿し、そのまま掲載されるようにした。これまで完全に統一されていたページが、いきなり縦書き・横書きバラバラになり、戸惑われた読者も多いと思う。これは、自

分の作品は縦書きで発表したい、というかねてからの根強い希望の実現の為である。エッセイの中には、テーマによって数字が多い、欧文単語をアルファベットのまま表記したい、などの作者の思い入れのあるものもあって、縦書きにはなじまないものもある。しかし、完全に自由としたのでは、小学校の卒業文集のようにになってしまう。最低限の統一をとるために改革委員会でマニュアルを作り、会員諸氏はそれに沿って投稿・掲載している。

総アクセス数は、ここ数年ほぼ固まってしまう。想像するに会員とその知り合いを中心に固定読者が大部分を占めているせいだと思う。新しい読者を獲得するために、一般検索エンジンで「企業OBペンクラブ」より短く簡単なキーワードでトップページを拾ってもらう、それが今後の課題である。

(プロマネ 志村良知)



クラブ活動を振り返って

二〇二一年

(会員への敬称略)

一、役員

前年に引き続き左記の役員が会の運営を務めた。

名誉会長

西川 武彦

理事・会長

斉藤 征雄

理事・副会長(講演会、新年会担当)

塚田 實

理事・運営委員長、IT担当

志村 良知

理事・HP、渉外担当

松浦 俊博

理事・財務担当

大森 海太

理事・会計担当

長尾進一郎

理事・事務局長

首藤 静夫

事務局顧問

三 春

監事

清水 勝

三、各月の活動報告

在籍数…一月一日現在 六二名

1. 新規会員の獲得

2. 各プロジェクト・勉強会の一層の活性化

3. 月例会の工夫、活性化

4. ホームページの活用

5. オンライン活動の活性化

6. インフォーマル活動の奨励

一月例会(十四日) Zoom

・新春特別公演 コロナ禍のため延期となった。

代わりに「オンライン落語寄席」をトライアル

・新年会(十四日) 中止

二月例会(十八日) Zoom

・会員講演Ⅱ川口ひろ子

『Zoomコンサート・交響曲とオペラを聴く』

ハイライト部分をオンラインで。

三月例会(十八日) Zoom

二、年度方針

コンセプト「明るく楽しいOBペン活動」

・会員講演Ⅱ池松孝子『留学生の進路指導』

四月例会（十五日）Zoom

・会員講演Ⅱ浜田道雄『佛の顔』

・『悠遊』二十八号刊行

五月例会（二十日）Zoom

・『悠遊』二十八号合評会

・新会員Ⅱ土屋弘美、戸松孝夫

六月例会（十七日）Zoom

・会員講演Ⅱ安藤晃二

『回想、海外勤務とそれはさまざまから、忘れ得ぬ物語』

七月例会（十五日）Zoom

・会員講演Ⅱ長谷川 修『四国遍路とサンティアゴ』

八月（夏休み）

九月例会（十六日）Zoom

・会員講演Ⅱ戸松孝夫『異文化との交流』

・新会員Ⅱ荒野喆也

十月例会（二十一日）Zoom

・会員講演Ⅱ安藤晃二

『回想、海外勤務とそれはさまざまから、忘れ得ぬ

物語後半』

十二月例会（十八日）青少年センター、Zoom併用

・今年初めての青少年センター開催

・会員講演Ⅱ大平 忠『大平正芳の若い頃』

十二月例会（十六日）青少年センター、Zoom併用

・会員講演Ⅱ稲宮健一

『宇宙産業体験談と超省エネの提案』

・退会Ⅱ大泉潤、上原利夫、鎌原俊二、戸松孝夫、

土屋弘美

二〇二二年は、会員数六十二名でスタートした。

コロナ禍により、昨年に引き続き、自宅からオンラインで活動するスタイルが定着した。遠隔地或いは健康面から教室に来られない会員にはむしろ参加の機会が増え、予想外の新しい展開となった。それを発展させ、現在では教室での活動の中に一部オンラインを併用、教室組・オンライン組が一緒に楽しんでいる。今後さらには新しい取組みに挑戦し、サークルの輪を広げたい。

（事務局長 首藤静夫）

氏 名	主 な 活 動 分 野
塚田 實	書こう会、掌編小説、川柳、絵
都甲 昌利	書こう会、エッセイ
富岡 喜久雄	書こう会、エッセイ、掌編小説、英読会、読もう会
内藤 真理子	書こう会、エッセイ、掌編小説、読もう会、俳句
長尾 進一郎	書こう会、俳句、フォト句、写真
中村 晃也	書こう会、俳句、フォト句、写真
西川 武彦	エッセイ、掌編小説、サロン21、川柳、写真
西川 知世	俳句、エッセイ
新田 由紀子	書こう会、読もう会、俳句
野上 浩三	書こう会、掌編小説
野瀬 隆平	書こう会、掌編小説、サロン21、読もう会、英読会、写真
長谷川 修	書こう会、エッセイ
馬場 真寿美	書こう会、エッセイ、掌編小説
浜口 須美子	エッセイ、写真
浜田 道雄	書こう会、エッセイ、読もう会、川柳、写真
原田 信	書こう会、エッセイ、会員談話室
平尾 富男	川柳、書こう会、掌編小説、サロン21
福本 多佳子	読もう会、掌編小説、絵
藤原 道夫	書こう会、エッセイ
細谷 博	川柳、エッセイ
松浦 俊博	書こう会、エッセイ
松谷 隆	書こう会、エッセイ、掌編小説、読もう会、川柳
松田 昌康	フォト句、エッセイ
三 春	書こう会、エッセイ、読もう会、川柳、フォト句
宮原 由利子	読もう会、俳句
森田 晃司	サロン21、英読会、エッセイ
八木 信男	エッセイ、川柳、絵、会員談話室
矢澤 正二	エッセイ、フォト句、写真
山縣 正靖	エッセイ、サロン21、川柳、絵
吉田 真人	書こう会、エッセイ

会 員 名 簿 (五十音順)

氏 名	主 な 活 動 分 野
浅井 壮一郎	サロン21
新井 良侑	エッセイ
安藤 晃二	書こう会、英読会、俳句、川柳、フォト句、他
池田 隆	書こう会、エッセイ、サロン21、読もう会、写真
池松 孝子	書こう会、エッセイ
市川 忠夫	書こう会、英読会、サロン21
稲宮 健一	書こう会、エッセイ、川柳
上田 信隆	エッセイ、サロン21
内田 満夫	書こう会、エッセイ、会員談話室
大越 浩平	書こう会、エッセイ、フォト句
大津 隆文	書こう会、エッセイ、俳句
大塚 喜子	掌編小説、読もう会
大月 和彦	書こう会、読もう会、フォト句
大平 忠	書こう会、エッセイ、サロン21、会員談話室
大野 <small>たの</small> 晃	川柳、エッセイ、サロン21
大森 海太	書こう会、エッセイ
川口 ひろ子	書こう会、エッセイ
川村 邦生	エッセイ
木村 敏美	書こう会、エッセイ、絵
荒野 <small>あらの</small> 喆也	書こう会、エッセイ
児玉 寛嗣	書こう会、掌編小説
斉藤 征雄	書こう会、エッセイ、読もう会、俳句
清水 勝	書こう会、エッセイ、掌編小説、読もう会、フォト句
志村 良知	書こう会、エッセイ、読もう会、俳句
下山 健夫	エッセイ、サロン21、英読会、フォト句
首藤 静夫	書こう会、読もう会、俳句、絵
杉浦 右藏	エッセイ、サロン21
曾山 清徳	英読会、川柳
高橋 由紀子	俳句、エッセイ
田原 敬	書こう会、エッセイ

▽同人誌も二十九号を数えるまでになりました。来号は愈々記念すべき三十号です。当会HPに創刊号からざらり並んでいるのを見ると、月日の重みを感じます。来し方行く末を思わずにはおられません。

(首藤)

▽作品はどれも深い造詣と意欲に溢れ、長引くコロナ禍による停滞を感じられない素晴らしいものでした。

日頃は十七文字に苦勞している私ですが、圧倒されるばかりでした。ともあれ何とか役目を終ることができました事、首藤さん、松浦さんに感謝いたします。

(宮原)

▽コロナ感染拡大を機に「禍を転じて福となす」を実践される会員の方々に接すると、その逞しさに励まされます。作品の多様化も進んだと感じます。話題は政経・歴史・科学・旅行・生活・人生観など多岐にわたり、表現についても川柳や短歌をちりばめた粋な作品やしみじみする作品、詩風の感性の高い作品も見られます。色とりどりの美しい風景を見せていただく思いがします。

(松浦)

企業OBペンクラブ同人誌

『悠遊』第二十九号

二〇二二年四月一日発行

発行者 企業OBペンクラブ会長

塚田 實

印刷所 新灯印刷株式会社

東京都新宿区水通町二一五 (〒一六二〇八一)

TEL 〇三―三二六〇―九二六一

連絡先 企業OBペンクラブ事務局

首藤 静夫

Eメール: obopenclub@gmail.com

クラブURL: <http://www.obpen.com>

入会案内はクラブURLホームページの「ご案内」

見学希望・入会希望は事務局まで

口座 三菱UFJ銀行海老名支店(409)

企業OBペンクラブ (普通) 1086096

ペンフォト句 ②

うららかに
音も立てずに
どんこ舟

長尾 進一郎



灌仏会
甘茶うれしや
阿弥陀堂

大月 和彦

陽を浴びて
ニヨッキリ
出ました
夏大根

矢澤 正二





断崖の
紅葉見ながら
奥の院

松田 昌康



瘦^えを知るや
名残りの紅に
語りかけ

安藤 晃二

ペンフオ句 ④

飽きぬ秋
散れば散ったで
飽細工

三春



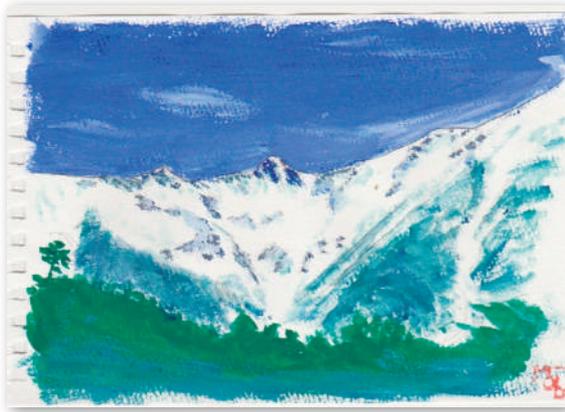
ひとり占め
隠れた秋の
京模様

清水 勝

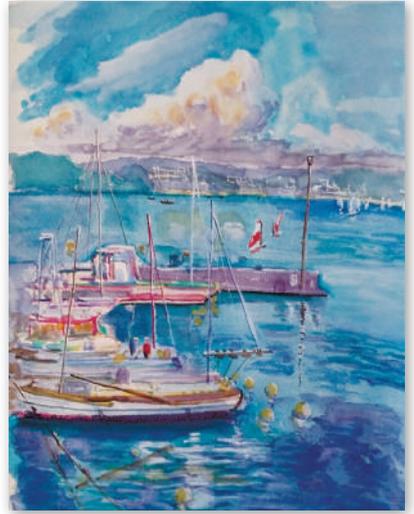
鬼灯は枯れ
寂聴さん入寂す

大越 浩平





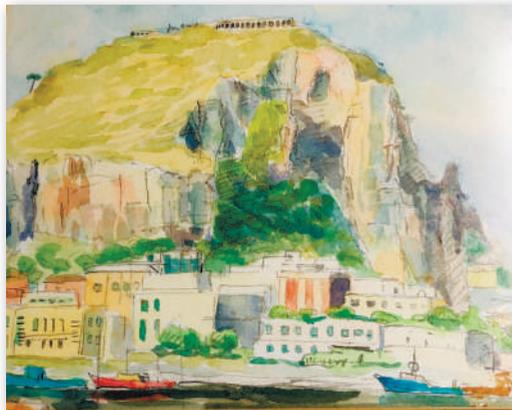
八木 信男



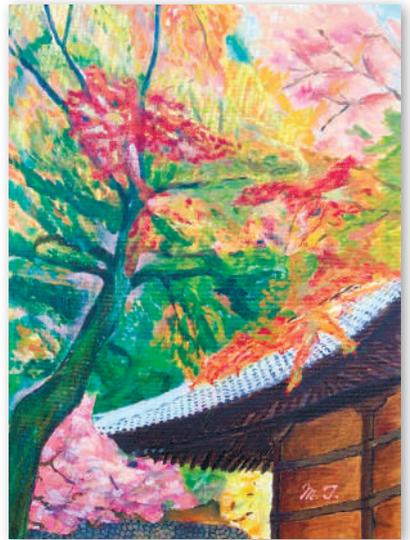
首藤 静夫



木村 敏美



安藤 晃二



塚田 實